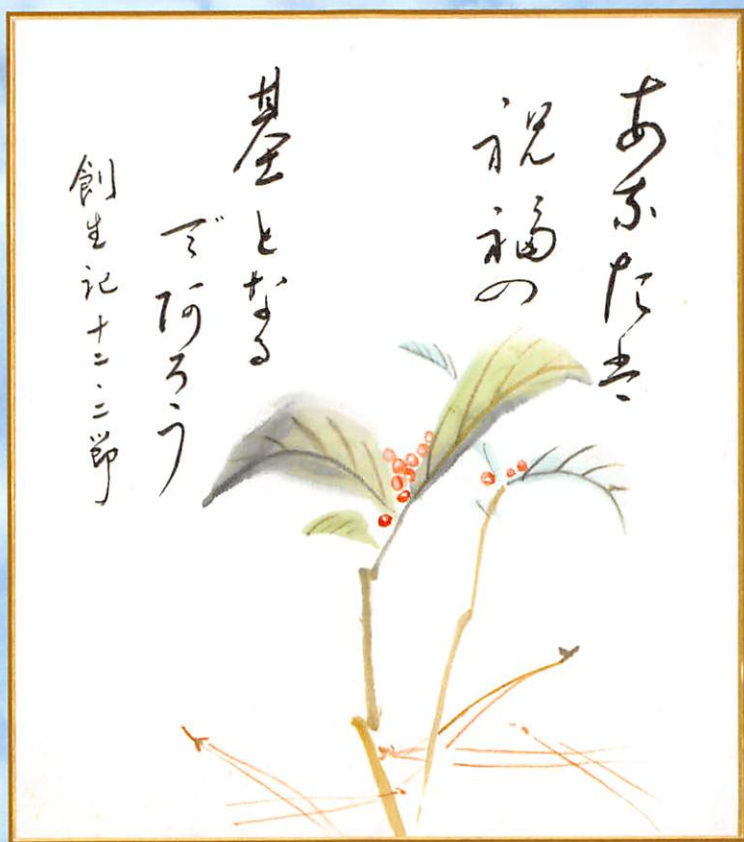


— 正野サカエの生涯と信仰 —

# 神は愛を 与へ

正野眞宏  
編



神は愛か

## 推薦の言葉

だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。

コリント人への第二の手紙 五章十七節

正野サカ工姉は平成三年三月に七十九歳の生涯を終わって、天に帰られました。その後、平成五年三月に『神は愛なり―正野サカ工の生涯と信仰』と題して、姉の信仰と生涯について語った記念誌が私家版として発行されました。このあかし集は読んだ人に深い感銘を与え、信仰について多くの示唆が与えられました。発行された部数が少なく、その後入手困難になっていました。このたび改装新版として発行され、多くの方々に読んでいただけるのは嬉しいかぎりです。

サカ工姉の生涯はまことに波乱万丈ですが、同時代の人々にはもっと波乱に満ちた数奇な人生を生きただけです。人生の有為転変だけを語るならそれだけのことにはすぎません。しかし、ここに語られている生涯はイエス・キリストを信じる信仰によって新しく造りかえられた人生、神様の再創造を語ったものです。

サカ工姉は人生半ばにして、イエス・キリストに出会い、生き様が変わりました。それは劇的で



あり、驚天動地の事態でした。それによって天地万物の創造者なる神を知り、さらに限りない大きな神の愛を知って、自分に与えられた人生の全てを、良きことも悪しきことも、感謝して受容し、神の摂理に委ねる生涯を全うされたのです。

この「証言」をとおして、今の時代に失われた「生きる情熱」に触れ、人生に新しい意義と目的を見つけることができるでしょう。ぜひ、一読して生きる喜びを味わってください。

基督伝道隊 八幡前田教会牧師 榎本 和義

## 推薦のことば

神の恩恵により喜びと勇気と感謝の生涯を送り、先年、栄光の御国に入られた正野サカ工姉の生涯と信仰の記念誌『神は愛なり』が、このたび装いも新たに出版されると聞き、心から感謝しています。

サカ工姉は、苦難のどん底で「神は愛なり」（第一ヨハネ 四章一六節）という聖書のみことばに接し、イエス・キリストを信じて救われ、人生を新しく造りかえられました。以来、サカ工姉は何事にも神を第一とし、順境も逆境も喜んで受容し、祈り深い敬虔な家庭を築き、神の恵みを熱心に証してこられました。

四十数年前、私共の教会の青年会主催で母の日の感謝会が行われた時、若き日の隆士兄が「私があるのは、母の信仰と祈りの賜物です」と目を潤ませて証しされ、お母さん級の婦人会の人々が口々にその感動を語ったことを忘れることができません。

やがてサカ工姉が喜寿を迎えられた時には四人の姉弟たちが「金銭ではなく、信仰という何物にも代えがたい最高の財産を受けた」という主意の感謝状を贈り、信仰の母を称えたということです。

## 推薦のことば

「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」(ヘブル 一一章四節)、私はこのすばらしい証しの言葉をぜひ多くの人々に聞いていただきたいと、心から推薦いたします。

日本イエス・キリスト教団 岡南教会名誉牧師 鈴木 一郎

# 目次

推薦のことば	八幡前田教会 榎本和義牧師											
推薦のことば	岡南教会 鈴木一郎名誉牧師											
<b>第一章 母のあゆみ</b>												
一	はじめに	1										
二	生い立ちから娘時代	2										
三	結婚	9										
四	大分時代（大分県櫛来へ疎開）	14										
五	東郷時代（苦難そして神との出会い）	17										
六	黒崎時代（真の信仰へ）	53										
七	岡垣町時代（カナンの生涯へ）	85										
八	終章	109										
九	おわりに	121										
<b>第二章 母の証し集「家族のこと」</b>												
一	祈りに応え給う主											
二	愚かなりとも迷うことなし											
三	次男への手紙											
四	次男の結婚											
五	三男の結婚											
六	賢き妻は主から与えられる											
七	聖美の誕生											
八	信ぜば神の栄光を見るべし											
九	昨日も今日も永遠に変わらず											
		158	156	148	143	139	135	133	132	127		124

第三章 母の証し集「生活の中で」

一	ゆるし	161
二	詩「スリッパさん」	169
三	あなたこそ私の主	172
四	すばらしい一日	175
五	先見の明	177
六	高尚な生涯	179
七	目を覚ましていなさい	183
八	恵みの訪れ	188
九	主の祝福は人を富ませる	192
十	愚かなりとも迷うことなし	195
十一	すべての道にて主を認めよ	198
十二	我が家の家庭礼拝	201
十三	行く先を知らずに出て行った	203

十四 わたしに聞け

十五 弱ったひざ

十六 由布院に行きて

第四章 母の思い出

一 詩「祈り」

二 母から受けたもの

三 母からの大いなる遺産

四 母の思い出

あとがき

(文中のカットは、母が書いた色紙である)

177	松崎溥子(長女)	227
179	正野眞宏(長男)	230
183	正野隆士(次男)	232
188	正野暢之(三男)	235
195		238
201		
203		
214		
217		
238		
209		

第一章  
母のあゆみ



## 一 はじめに

母は一九九一（平成三）年三月三十日午後四時十六分、七九歳の生涯を閉じて、平安のうちに神の御許に召された。

誰にとつても母親という存在は大きなものがあるが、私たちには格別その思いが強い。それは終戦後の混乱期の中で数々の苦難と戦い、親鳥がヒナを羽で覆うように私たちを守り育ててくれた母の汗と温もりを、今もつて忘れることができないでいるからであろうか。

母は決して理想的な女性ではなかったと思う。人間的な弱さも欠点も多かった。それでも私たちにとつては有難き母であり、良き母親を持ったと感謝している。母の生涯は誠に波瀾万丈であったが、主の奇しき摂理により信仰に導き入れられ、以来、母のあゆみは変わっていった。

母が私たちに与えた影響は凶り知れないものがあるが、特に母を通して生ける神を知ることができた。母にはこの世的な遺産なるものはないが、信仰という最大の遺産を受けたと思つてゐる。そういうことで、正野家の初穂となつた母のあゆみを記録し、世々の証しとしてエベネゼルの記念碑（サムエル記上七・十二）を遺したいと思ひ立つた。

私たち家族は、流浪の民のように何度も住む場所を変つたが、そこに見えざる神の導きを見るのである。その眼で母の生涯を見ると、まるで出エジプト記のイスラエルの民のようである。すなわち、神を知らざる異邦の地エジプトの時代（北九州市八幡・大分県国東市国見町柳来）、そこから導き出されて神を知り、試練を受ける荒野の時代（福岡県宗像市東郷）を通り、ヨルダン

川を渡つて、約束の地を獲得していく時代（北九州市黒崎）、最後は神の安息を得たカナンの時代（福岡県遠賀郡岡垣町）と四つの時代に区分することができる。幸い母はこまめに「あかし」を教会誌や「祷告」誌（埼玉県熊谷市籠原教会丸山今朝次牧師）などに投稿し、記録として残してくれた。これをもとにしながら、そのあゆみを辿つてみたいと思う。（母の略歴は、第一章の末尾参照）

## 二 生い立ちから娘時代

私たちの母正野サカエは一九二二（明治四五）年一月一日に正野峯吉・シカの三女として、福岡県遠賀郡八幡町大字尾倉（現北九州市八幡東区尾倉町）に生まれた。

母は自分の生年月日を大正元年一月一日と話していたので、私たちは長い間そのように思っていた。しかしよく考えてみると、確かに明治四五年に大正と元号は変わったが、一月一日はまだ明治である。母も人の子、女性の心理から出たことであろう。

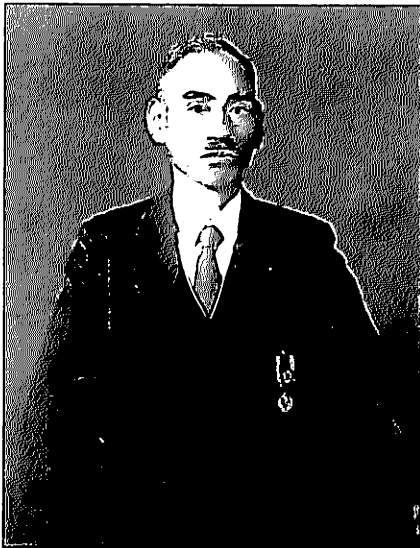
もうひとつ、母に紛らわしいことがあった。それは名前である。本名はサカエであるが、通称は員子かきこと言った。祖父が子どもたちの幸せを願つて、姓名判断から本名とは別に付けたらしい。親も子ども同志も通称で呼び合つて育つたので、母もその方が身についていたのだろう、員子、員子と言うので、私たちは何の疑いもなく、学校の届出から就職先の書類まで全部「員子」と書いて出していた。

サカエの方が信仰的で良いと思うのだが、母にとってはそれも気付かないほど馴染んでいたのだろう。

### 〈祖父について〉

母の事にふれる前に、まず母の生涯に大きな影響を与えた祖父について述べておきたい。

母の父正野峯吉は、福岡県宗像郡吉武村（現宗像市）の貧農の次男として生まれた。十一歳の時に父親を亡くし、早くから丁稚奉公に出た。このため小学校もろくに出入れなかつたが、少年時代から発奮し、奉公の傍ら独学で勉強したという頑張り屋であった。奉公先でも勤勉忠実に働いたので、主人に目をかけられ、早い時期に独立をした。



祖父 峯吉

独立をしたといつても店を持ったわけではなく、食料品の行商から身を起こし、艱難辛苦のすえ、八幡一の材木商を営むまでに至つた。故郷では立志伝中第一人者ということで、近郷の次男三男が祖父を頼つて来幡して来たそうである。母親を呼び寄せて孝養を尽くし、兄弟にもそれぞれ店を持たせ、後輩の者たちの面倒をよく見ていたという。

母が生まれた時は、祖父はまだ食料品の行商していたようであるが、まもなく材木商を興し、その商

才を發揮して急成長を遂げた。大分県の国東半島の立木を買い入れ、東国東郡櫛来村（現国東市）にある製材所で木材製品にして、大分や北九州方面へ送り出していた。零細な農業か漁業しかない寒村で五十人程の人を使っていた祖父は、ここでも知名士であり、恩人のように思われていた。一九四四（昭和十九）年に私たちが戦災を避けて疎開したとき、まだ小学生だった私を地の人が「若大将、若大将」と呼んでくれた訳が後でわかった。

母が育った八幡の本店では、五、六人の若衆が住み込んでおり、他に世話女中に子守、それに九人の子供がいて大変な大所帯であった。それだけに家も大きく、木造三階建て事務所にもなっており、居住部分の畳の数は六二枚あったという。私も小学校一年生まで住んだが、屋敷が広かったことと子どもが絶対入ってはいけない奥座敷があったことを、かすかに覚えている。多分、立派な床の間のある客間だったのだろう。

敷地がまた広く、木材倉庫の周囲に二十軒ばかりの借家があり、外勤の者や生命保険代理店もしていたので、その家族たちを住まわせていた。また八幡で一番に市場を作ったのは祖父だと言われ、子どもの時から、市場の家賃の日切りをするのが、母の役目だったそうである。このように、祖父は根っこからの事業家であった。

#### 〈姉弟について〉

母の姉弟は九人である。その部分は、母の「あかし」から少し記述してみよう。

父は事業家でしたから、男の子が欲しかったのでしように、生まれてくる子供はみんな女の子ばかりだったので、母が八人目の女の子を生んだ時は、失望の余り「もう、男の子はいらない。今後できても、五十歳過ぎてでは間に合わない。女の子を生め、生め」と言つて悲しかったので、母はその子に「ウメヨ」と命名したと聞いておりました。

私はその中の三番目に生まれたのでした。

三番目というのは、何かにつけて割りが悪く、着物から道具、教科書に至るまで全部お下がりばかりで、ほとんど新調してもらえませんでした。その頃はエビ茶の袴をはいて通学していましたが、ひだで隠れた所は鮮明でも、表面に出ている所は色が褪せていました。それでも母は新調してくれません。ところが次の妹になると、いつも新調物ばかり。私はそれを羨ましく思つていたためか、その妹とはよく喧嘩をしては叱られていました。

両親があきらめて男の子を欲しがらなくなった時、皮肉なもので、九人目に生まれたのが男の子でした。いらないといつても、初めての男の子です。初節句では大きな鯉のぼりが何匹も空高く泳いでいたことを、今でも覚えています。目に入れても痛くないほどの愛し方で、小学校に入學してからも、帰つてくると母の乳を飲んでいました。

母と十四歳違いの長男が生まれた。この事がまた母の生涯を運命づけていくことになる。

〈運命の別れ目〉

母は小学校から八幡高等女学校（現在は県立八幡中央高等学校となっている）に入った。将来は学校の先生になりたいと思っていたが、祖父が許してくれなかった。

女学校を卒業した日に、母の将来が決められることになる。母の「あかし」を続けてみよう。

弟がまだ幼児だった頃、私は最終学業を終え、卒業証書を握って、希望に胸を膨らませて家に帰りました。そして、まだセーラー服も脱がなかった私に、「員子、着替えたら、ちよつと来なさい」と父が呼ぶのです。珍しいことでした。

私達姉妹にとって、父は不断から煙たい存在で、話をするなどということはほとんどありませんでした。父は事業の虫とでもいうのでしょうか、私達が父に用事のある時は、いつも母を通して伝えたものでした。夕食の時は、父は座敷で、私達は板の間という風で、父に会うのですら何だか怖々だったのに、その父に呼ばれたのです。

ですから、父から呼ばれた時は、ちよつと小学生が校長先生に呼び出された時のようでした。何の用事だろう、不安に思いながら恐る恐る父の前に座りました。

「おまえは学校を卒業したのだから、これからはお父さんの家業を継ぎなさい。寅夫（長男）は小さくて、大きくなるまでお父さんが生きられるか分からん。生きられたとしても、その間が困る。これからおまえを仕込むから、そのつもりでいなさい」。

青天の霹靂とは、このことではないでしょうか。思ってもみないことでした。

何故、姉に継がせないのか。私が学校の先生になりたいと思つて、進学部に入ったことが父に





女学校卒業時の母

知れたとき、女にはこれ以上学校の必要なしと言って大反対されたことも、私に家業を継がせるためであったのか。お姉さんにはお茶、お花、琵琶の免許まで取らせ、私にだけ稽古事もさせず、自由まで束縛されなければならぬのは何故だろう。ああ、いやだ、いやだ！何とか反発したい思いでいっぱいでしたが、蛇に睨まれた蛙で、震えて言葉が出てこなかったことを思い出します。父はそんな私を慰めるつもりか、「おまえに沢山の財産をやるからな。たとえ長男が大きくなくても、お父さんが死ぬようなことがあっても、ちゃんと書き物にしておくからな。安心して働きなさい」。

何故こんなことを言うのか、私には分かりませんでした。ただ、嫌で悲しいばかりでした。それから父の説教が長々と続きました。

「おまえはまだ若くて何も知らぬだろうが、世の中で一番大切なものは何だと思うか」。

女学校を出たばかりの、まだ十六歳です。分かるはずはありません。そう尋ねられて、何だろうかと耳をそば立てたものでした。

「金だ！ お金だよ」、父がそう言った時、私は少なからずがっかりしました。お金ならいくらでもあるではないか。私にとってもっと大事な、満たされたいと願うものは違ふものだと思っていたからです。今にして思えばそれが信仰であったことに、その時

は気付きませんでした。

「商売人は頭を低くせねばならぬ。人に頭を低く下げてても、金儲けのためなら腹も立つまい。無学のお父さんでも、大学生がハイハイ言うて仕えてるだろうが。病氣しても金さえあれば、日本一の医者を呼ぶことができ、専属の看護婦も雇える。地獄の沙汰も金次第、智恩院に金積めば極楽でも往ける」。

この父の教訓を間違つたものとは知らず、それから二五年間、私は一途に父に仕えてきたのでした。

嫌々ながらも、父から教わる材木の種類、名称、単位を覚えるほか、合資会社の簿記については、専門の先生から難しい貸方・借方のつけ方を習いました。

一銭間違つても、二十冊近い帳簿に目を通さなければなりません。帳簿つけだけでも大変なのに、家の見積りから交渉、入札にまで、私の働きは及んでいました。

祖父は母ならきつとやれると、その力量を見越してのことだったに違いないが、見込まれた母の方はたまつたものではない。そのやり方も一方的で、今日であれば娘から逃げ出されたであろうが、当時の父親の権力は絶大で、反発することすらできなかったたのであろう。

それにしても、大の男でも大変な材木商を、まだうら若い十六歳の娘が男衆を使い、大人の中でせりや交渉を行うのである。母の苦勞は並大抵ではなかつただろう。おそらく芝居に行くことも、化粧することも、美しい着物を着ることも、お花を習つたり、花嫁修業をすることもほとん

どなかったのではないか。雇い人には休みはあっても、自分には年中休みはなかったと母は述懐していた。

母は誠心誠意祖父に仕え、力の限り努力した。祖父の自慢は相当のもので、何処へ行っても娘の自慢をしていたということである。それでまた母は祖父の期待に応えんと、一層頑張っていたのである。

### 三 結婚

母が結婚したのは、一九三二（昭和六）年十一月十九歳の時である。



結婚写真（昭和6年11月吉日）

最初は学校の先生を養子に迎える話があった。ところが、仲人を通して財産を先に分けて欲しいと申し込んできたため、祖父は烈火のごとく怒り、財産目当てに来るような者はこちらから断る、と破談になってしまった。それから程なくして、祖父の眼鏡にかなった私たちの父と婿養子縁組をすることになった。ここで私たちの父について、少しふれてみたい。

父義雄は一九〇六（明治三九）年十二月六日に旧門司市に生まれた。母の名は川面タツ、父は石田由太郎と言った。つまり父は正式の結婚によって生まれたのではなかった。

当時、石田家といえば、門司では知らない人はいないほどの名家で、祖父は貴族院議員を務め、門司港駅の近くでその頃の皇室やシーボルトも宿泊したという由緒ある石田旅館を経営しており、また石田棧橋という専用の船着場を持っていた。その跡取り息子の由太郎が川面タツと恋仲になったが、家柄が違うということで、結婚を許してもらえなかった。そこで生まれたのが父である。認知してもらえず、父なし子として育った。十九歳の頃、祖父と実父が相次いで亡くなったこともあって、漸く受け入れられ、石田旅館で働くようになったようである。

二五歳の時、母と見合いをした。その時の母は、父の顔をほとんど見てなかったそうだ。何しろ父は鼻が高く、色白で歌舞伎役者のようであったので、若い娘たちの憧れだったらしい。母は恥ずかしさもあって、まともに父の顔を見ることができなかったわけだ。祖父は父の真面目さと家柄の良さが気に入って、婿に選んだようである。結婚が決まっても、結婚式まで二人は一度も会うことはなく、また許されもしなかった。

結婚式とその後の生活を、母は次のように記している。

披露宴は豪華なもので、八幡市の有名人、警察、商工会関係者等五百人くらい招待しました。披露は五日間も続き、大きな酒樽がいくつも玄関前に積み重ねられています。その間、美容師が毎日通ってきて高島田を結い、花嫁衣装を着せられ、人形扱いされたのですからたまりません。

屋の部で挨拶に出て、夜の部もまた同じことをしました。同じ姿で十度も宴席に出されたのでした。

どなたが来られているのか知らない人ばかり、父との関係はあっても、私達には無関係で、一室に閉じ込められ、外にも出られず、主人になる人が気の毒でなりませんでした。

その費用も莫大なものだったと思います。そのためか新婚旅行もなく、私どもにとっては誠につまらない結婚式でした。

六日目にやっと披露宴から解放されると、今度は仕事仕事で追いまくられる毎日です。しばらくは二人でやっていましたが、店員が五、六人おるから、今まで通りやれるだろうということので、八幡の店は私一人に任せられ、主人は父の命令で大分工場にやらされ、私達は引き離されてしまいました。

主人は月に一度くらいしか帰ってきませんでした。

私の仕事は、女の身にしては荷が重すぎましたが、任された以上やらねばならず、店員には月二回の休日はあっても、私には年中休みなしです。皆が休んでいる休日は、帳簿の整理に当たらなければなりませんでした。

そんな中で、子供は次々と生まれましたので、



長女誕生

昼間は子守を女中に見てもらい、夜だけ子供を抱いて寝ましたが、夜中に子供に泣かれると、疲れた体で何度でも起きなければならず、夜泣きのひどい子もいて、夜通しおんぶしていたこともありました。

一晩でもよいから、煩わされないでぐつすり寝てみたいと、どんなに思ったかわかりません。それでも病気ひとつせず、神様は私の健康をお守りくださったと、今にして思います。お店を休んだといえば、お産の時ぐらいでした。

日曜日には、勤め人のご夫婦が子供連れで出掛けるのを見ると、羨ましく思ったものでした。私達には旅行はおろか、二人で出掛ける機会などは全然ありませんでした。そうして働くばかりですから、主人が父に気に入られるのは当然で、父は私をも誉めて、ひとつの誇りにしていたようでした。

しかし、その背後には主人がどれほど犠牲になっていたことか、主人の忍耐には全く頭が下がりました。



昭和16年、大分工場の従業員と祖父（本店前で）  
（祖父に抱かれているのが私）





大分疎開を前にして

もうひとつ母の忙しさのエピソードに、こんなことがあった。私は小さい時から、カッチョの子と言われるほど骨細で痩せていたが、年頃になるに従ってそれが苦になり、人に細い腕を見せるのが嫌だった。それで、どうして自分はこんな体なのかと母を恨んだものである。私からそのことを口にしたことはないが、ある時、母がしみじみと私が小さい時が一番忙しくて、

一九三三（昭和八）年、最初に生まれた男の子は、生後十数日で亡くなった。妊娠中の無理が影響したのかもしれない。翌年に長女溥子いづこが生まれ、一九三八（十三）年に長男真宏、一九四一（十六）年に次男隆士、一九四四（十九）年に三男暢之のぶゆきが生まれた。

長男の私（真宏）について言えば、私が一歳の頃、火鉢に掴まり立ちしてセルロイドのおもちゃでひとり遊んでいた時、それを火鉢に投げ入れたため燃え上がった。あまりに激しい泣き声に飛んで行ってみると、炎の中に頭を突っ込んだまま泣いていたという。

このため顔に随分ひどい火傷を負った。おそらく左眼は失明し、左側の頭髮は生えないだろうと言われていたが、神様の憐れみで、額のところには火傷の痕は残ったものの、失明もせず禿げにもならなかった。母は自分の忙しさのために、子どもにこんな目に遭わせてしまったと、随分心を痛めたという。

乳が張って飲ませたくてもそれができなかつた、あなたには悪いことをしたと話してくれた。そのことを聞いた時、私は自分が痩せている訳を悟った。わが子に乳を飲ませることができない。母はどんなにつらい思いをしていたことだろう。私は母を恨んでいたことを申し訳なく思った。そして自分の痩せていることを恥ずかしがることはしまいと考えた。

#### 四 大分時代（大分県櫛来へ疎開）

一九四一（昭和十六）年に開戦した太平洋戦争は、日に日に戦火の激しさを増し、若い男は次々と召集されていった。一九四四（昭和十九）年頃には大本営発表とは裏腹に日本の敗戦は色濃くなり、米軍上陸が噂されるようになった。経済統制や企業整備が行われ、八幡の店は閉鎖の止むなきに至った。これを機会に、祖父は第一線を退くことになり、宗像郡東郷町（現宗像市）に家を買って隠居した。

私たち家族の方は、戦火を避けるとともに大分工場の事業を続けるため、一九四四（昭和十九）年の夏、大分県東国東郡櫛来村（現国東市国見町櫛来）に疎開した。姉が尾倉小学校四年生、私が一年生、弟の隆士は三歳、暢之は七か月ぐらゐの乳飲み子であった。

木材を運ぶポンポン船に家財を乗せて、夕暮れの小倉の日明海岸から船出した。太陽が海を赤く染めながら西に沈み、辺りが暗くなってうら寂しかった事をかすかに覚えていゝる。船は夜中走り、翌日昼頃に櫛来港に着いた。

檜来村のある国東半島は、中央にある両子山の噴火によってできたもので、そこから溶岩の流出でできた山が放射線状に海岸まで延びており、山と山に挟まれるようにして小さな村落が多数あった。大分県でも過疎の地とか陸の孤島とか言われた所である。檜来村はその中でも小さい村で、人口は記憶にないが、恐らく何百人台であろう（今は町村合併して国東市となっているが、村の様子はほとんど変っていない）。耕作面積が狭く、半農半漁半林業の寒村である。家のすぐ前が入江の海になっていて、朝漁に出る漁船がポンポンと鳴らして出て行く心地よいエンジン音に、目が覚めるといった風情であった。

私と姉は檜来小学校に編入したが、一年生は男女合わせて二十四人しかおらず、野球チームも編成できない少なさであった。それだけに先生との親密な交流があり、先生が当直の時は泊りにいって、布団の中に潜りこんだことなど懐かしい思い出が一杯ある。また仏教が盛んな所で、お寺が村の生活に深く溶け込んで、お寺の行事や初盆の家で行われる盆踊りは村中が参加していた。私も踊りの後で振る舞われる甘酒等が楽しみで、少々遠くても姉と一緒によく行ったものである。だから今でも盆踊りの歌と踊りを覚えている。

疎開して間もなくして父が召集され、佐世保の海軍に入隊したが、六か月程で終戦となって帰還した。そして一九四八（昭和二三）年に、四男弘巳が生まれた。

さて事業の方は、伐採する山林が遠くなり、運賃の高騰などで、経営はだんだん厳しくなったようである。そういうこともあってか、母は副業として電球の卸業を始めた。それまで自転車など乗ったこともない母が、ある時から練習を始めた。それも仕事が終わって夜暗くなつてから自



家族写真の日に離れる来を御

素堀りのままで岩は丸出しであり、電気もついていないので、長い貫きになると真つ暗やみであった。それに地下水がポタポタと落ちてきて水溜まりができていた。私も隣村の中学校に行くのに長い貫きを通らねばならなかったが、人通りも少なく、一人で帰る時は後からお化けが追い掛けてきているようで、息を凝らしながら小走りで、時には水溜まりに足を取られたり、暗がりでおでこをぶつつけたりしながら帰った事を思い出す。母も随分難儀した事だろう。

転車を出し、倒れないように私に後を持たせて練習をするのである。私はまだ小学生で華奢な体である。支えられないはずがない。たびたび倒れることが多かった。それでも母は止めようとは言わなかった。私を帰した後も、一時間以上生傷を作りながら練習をしていた。私はその時、母の始めたらそれをやり通す意志の強さ、頑張ることの大切さを身をもつて感じ取った。

比較的早く乗れるようになった母は、早速自転車に電球を乗せてかなり遠くまで、西は香々地町、東は国東町まで得意先を開拓しながら、商売に出掛けるようになった。当時は今と違って道路は舗装されておらず、狭いデコボコ道をバスやトラックが通るたびに砂塵にまみれた。また国東半島はトンネル(当時は貫きと言った)が多く、

ここでの六年間の生活は、母にとつてどのようなものであつただろうか。豊かではないにしろ、小さな村では資産家の奥さんであり、戦後の食糧難もなく、子どもたちも一時期姉が体を壊したことがあつた以外は順調に成長してきたのであるから、まずもつて幸せな時ではなかつただろうか。

母のあかしの中にも多くは語られておらず、また私たちにもこの時期の母の思い出は、残念ながらあまりない。なにしろ私たちは遊ぶ事に熱中して、ほかの事には気が回らなかつたと言つていい。製材所のすぐ前は船着場で、魚を釣つたり、泳いだり、貝を取つたり、後は山でメジロや木の実を取りに行つたり、遊びには事欠かなかつた。この櫛来での生活は、私たち子どもにとつてはいろいろと思ひ出も多く、懐かしいわが故郷となつてゐる。

そして、いよいよ神の時は近づいたのであろう。長男が大学を卒業し、しばらく一緒にやつていたが、製材所を継ぐことになつた。

一九五〇（昭和二五）年の夏、私が中学一年生の時、回り舞台が廻るように私たち家族はこの地を離れ、舞台は祖父の居る福岡県宗像郡東郷町田熊（現宗像市）に移つていった。

## 五 東郷時代（苦難そして神との出会い）

〈東郷へ、そして祖父との決裂〉

東郷での生活は、母にとつては今まで以上に苦難の時であり、同時に苦難を通して神を知り、

新しい人生を歩み始めた時でもあった。

再び母のあかしを掲載しよう。

終戦後間もなく弟が大学を卒業し、しばらく見習いで私達と一緒にやっていたが、私達が  
大分に来て六年目に、父からお前達のために家を建てたからこちらに來なさいとの連絡がありま  
した。

私達は喜びました。今は弟が立派に成長し、父の事業を継げるようになったのですから、こ  
なめでたいことはありません。私達は二五年間かかって、その懸け橋をしたのでした。父の命令  
通りに成し終えたのですから、父はその報償として家を建て、財産も分けてくださると思っ  
たら喜んだのでした。

ところが、五人の子供を連れて大分の地を後にし、初めて見る東郷に來て驚きました。それは  
私達が想像していた家とはおよそ天と地ほど違っていました。

それは父の家の隣にあつた古ぼけた農家の納屋を改造して畳を入れただけのもので、六畳の間  
とちよつとした板の間があるだけでした。荷物を入れると親子七人折り重なるようにして寝な  
ればなりませんでした。天井も低く、窓も少ないため昼でも電気を付けていました。それに家も  
傾いて隙間風はするわ、雨漏りはするわで、本当にひどい家だったわけです。

それでもまだ、私は父を信じていましたから、住む所は雨露をしのげさえすればそれでよい、  
だが二五年も無給で働いて來たのだから、お金の方はどっさり下さるに違いないと思っていまし



た。父の約束を信じて来たからこそ貯金もせず、ただひたすら働いてきたのです。

しかし、待てど暮らせど、父は会っても「知らん顔の甚兵衛さん」です。

当座のお金しか持って来ていませんでしたから、思い余って、ある日、隣に住んでいる父の座敷に行き、山から飛び降りる思いで、恐る恐る切り出しました。

「お父さん、すみませんが、手元のお金もわずかしかありませんので、少し財産を分けていただけませんかでしょうか」。

すると、父の顔色が変わって恐い形相になると、雷のような声が私の頭上に飛んできました。

「財産を分けてくれと……。とんでもない！ おまえにどれだけの働きがあったか。五人の子供の足を誰が伸ばしてやったか、考えてみるがよい。おまえなんかにやる財産があるか！」。

そう言うやいなや、父はそこにあつた太い火箸でいやというほど殴り付けました。私は打たれて、そこに転がってしまいました。そして父は振り向きもせず、荒々しく立ち去りました。

その時、小学校一年になったばかりの三男が立って見ていましたが、あまりの恐ろしさに大声を上げて泣き出しました。私は痛さと恥ずかしさに耐えながら、

「何も心配せんでもいいのよ。遊びに行っておいで」。

そう言つて銅貨一枚与えると、喜んで駆けて行きました。そして一人になったので、思いきり泣くことができました。

今にして思えば、祖父は決して母との約束は忘れていなかったのではないだろうか。と言うの

は、祖父は一代で事業を起こし、それを成し遂げ、相当な財を成したが、敗戦によつてすべてが狂つてしまつたのだ。母から聞いた話だが、祖父は以前から数万円の生命保険に加入していた。当時の金額としては破格のものであり、近所近辺で噂になつたほどである。それで祖父はこれで自分の老後は安泰であると自慢していた。ところが終戦後の円の切り替えで相当な貯金も紙切れ同様となり、高額な生命保険も満期で受け取つてみると一ヶ月分の生活費にもならないものだった。加えて、八幡の大きな屋敷も貸家も市場も全部、戦災で焼けてしまつた。悪いことに、広大な敷地は借地だつたのである。祖父は買おうと思えばいつでも買えたのであるが、当時の借地代はただみたくに安かつたので、買わなかつたのである。

祖父は商才に長け、先見の明に富んでいると言われていたが、人間の計画ほど当てにならないものはない。祖父は戦争で無一文同然になつてしまつたわけだ。私はイエス様の例え話に出てくる「愚かな金持」(ルカ十二・十三)の記事を見るような気がした。そういうことで、祖父は応えようにも応えられないところへ、母から要求されてあのような態度に出たのではないかと思う。しかし、それにしても二五年間働いて、受けた報いが火箸で打ち叩かれる事とは、あまりにひどい仕打ちである。

### 〈神との出会い〉

しかし、この事を通して神と出会うことにならうとは、母はまだ知らない。

母のあかしを続けてみよう。

私は父の先の言葉を思うと血が逆流し、怒りは怒濤のように噴々として抑えることができません。悔し涙がとめどなく流れました。

こんな目に会うことが分かっていたら、お金を自由に自分のものにできたのに、疑ってみなかったのは、父が頼みもしない証文まで書いてくれたので信じ切っていたからでした。その大体の内容は、「正野家を継いだ者に全財産の六割を、分家する者に対しては四割を与える。この事を後日のために証す」として、父の名前の下に父の手にある純金の指輪の実印が押してありました。

私は短気を起こしてその証文をいくつにも破つて、ばらまきました。（主人に許しもなく破つたことを後で悔いたのですが、主人は絶対に人と争うことを好みませんので、叱られることはありませんでした。）

過信していた父への信頼も今はいずこ。こうなったのも父が欲張りだからだ。弟ばかり愛して、必要なくなったら履き捨てた草履のように捨てるなんて。そんなに惜しくば何ももらわなくてもよいから、二十年の昔に返しておくれ！と心の中で叫んでいました。

同じ捨てられるなら、せめて十年早かったら何とかなつたでしょうに、主人は五十歳近くにもなつて、商売しようにも金はなく、人夫するにも力はなし、私は二歳の幼児を抱え、上の四人の子供の学費どころか、どうして食べていったらよいのか、目の前は真つ暗やみです。主人はちょうど留守でしたから、一人で悶え苦しみ、疊に顔を伏せて泣いていました。

そういう時、不思議なことに、私の目の前に現われたのは『神は愛なり』という文字でした。

この世に神様があるだろうか？父は毎年受ける天照皇大神宮の御札を拝み、顔を洗ったら外に出てお日様を拝むし、母はかまどの棚に祀った荒神様を拝みます。また祭りの時には八幡宮も拝みます。一体、神とは何だろうか？この時、初めての疑問が私の心に湧いてきました。

それに「愛」とは何か。何が何やら、さっぱり分からなくなりました。

もし神なるものがあるとすれば、正しい者の味方であるはずです。私は今日まで、何一つ悪いことをした覚えがない。そのうえ、二五年間無報酬で親を助けてきたのに、こんなひどい目に会っている。という事は、神はないという証拠だ。神なんてみんな人が作ったものに過ぎない。私はそういう結論を出しました。

すると、今まで父を恨めしく思っていたのが、今度は神様に対して腹が立つてきて、「神が愛なり」なんかくそ食らえ！と、これも破り捨てたいのですが、どんなに掻き消そうとしても空間を掘むだけで、私の目の前から依然として消えません。墨痕鮮やかに「神は愛なり」が生き物のように迫ってきます。

その文字をじつと睨みつけていると、どこかで見たような気もするのですが、どうしてもそれがい思い出せません。なお考えていると、「あつた、あつたー」。

何とそれは、お向かいの薬局の店の柱に掲げられていた短冊の字だったのです。

それが分かれると矢も盾もたまず、その薬局に飛び込みました。そしていきなり、

「あなたは一体何の神様を信じていますか。この世に神様なんか絶対にいません。あなたは人を迷わせています。その短冊を破ってください」。

そう一気に言ってしまうと、その場でオンオン泣いてしまいました。

その御主人（岡部住雄兄）、お客かと思っていたでしょうに、神様の抗議にきたのですから驚いたに違いありません。けれども、さすが信者の方だけあって、まことに柔らかな物腰です。

「そこは店先ですから、どうぞお上がり下さい」。

案内されて、奥座敷に通されました。

応接台を前に向かい合って座りますと、ご主人がやさしく、「何かご事情がありそうですが、差し支えありませんでしたら、聞かせて下さいませんか」。

私は大分から移ってきたばかりで親しい友もおりませず、誰にも話すところもありませんでしたので、ありのままを語っておりますと、そのご主人がポロポロ涙を流して聞いてくださるのです。私の気持を知ってくれる者は一人もいないと思っておりましたので、とてもうれしい気持になりました。

奥様が静かにお茶菓子を運んで下さいました。やがて私が語り終える頃は、嵐のように騒いでいた心は凧のように治まり、安らぎを覚えていました。

ご主人は立ち上がられて、何やら分厚い本を持ってこられました。それが、私が聖書を見た初めであり、その時初めて福音を耳にしたのです。

イエス様は十字架の上で私達のために死なれたこと、そして三日目に甦られて、あなたのように人に捨てられた気の毒な人達の味方となって、恵んでくださいます。あなたは格別選ばれた方です。きつとあなたは恵まれますよ、とうれしいことばかりおっしゃいましたので、二時間くら

いお話を聞いて帰りました。

帰ってから、主人にイエス様の話をしますと、「あんたは知らないのかね」と言われてがっくり。小学生の時に日曜学校に行っていたとのこと。知っていたなら、なぜ私に教えてくれなかったの……と、ふくれましたが、主人はその後教会には全然行っていなかったのです。

それから、私は毎日毎日三十日間、岡部兄宅に通いつめました。

そのうち、一人で聞くのはもつたないと思ひ、近所の奥さん達を誘って、四く五人で聞くようになりましたが、一人減り二人減りして、結局最後は私一人になりました。こんなすばらしいお話をどうして聞かないのだろうと不思議に思いました。

マタイ伝（当時は文語訳）が終わった頃には、教会に行きたくてたまりません。その頃はまだ東郷に教会がない時でしたので、岡部兄にお願いして、汽車に乗って、それからバスに乗り換え、遠い教会（日本基督教団津屋崎教会）に連れていってもらいました。

このようにして、母はイエス様と出会い、教会に行くようになった。この事が劇的であっただけに、その後のいろんな苦難に会っても、神様から離れることはなかった。母はいつも私たちに、自分は神様から格別目を留められた特選の民で、特別に愛されていることを話していた。この時の「神は愛なり」は、母の生涯のみことばであった。

母の信仰のあゆみは、後でふれることにして、その後の出来事を追ってみることにしよう。

## 〈生活との戦い〉

父は私たちに自分のことを話すことはほとんどなかった。だから、この時の祖父の仕打ちを父がどのような気持ちでいたか分からない。恐らく、母と同じ心情であったに違いないが、ただじつと耐えた。父はいつもそうであつた。そして、職を求めて探し廻つたが、年令的なハンディもあつて適当なものではなかつた。結局、八幡時代に使つていた番頭が独立して建設会社をやつていたので、そこに雇われることになつた。以前使つていた人に使われる。父も随分つらかつたであろうが、生活のためには止むを得なかつたのであろう。父はこれまでの経験を買われて、山林買いのために私たちが住んでいた櫛来村にほど近い大分県東国東郡竹田津町に長期単身赴任した。このためひと月かふた月に一度くらいしか家に帰つてこられず、その間、母が家の全責任を負うことになつた。父の仕送りはわずかで、とても一家を支えるだけのものではなかつた。

祖父から受けたものは、結局、それまで祖父が小使い錢稼ぎに使つていた古びた自転車とわずかな商品（電球）だけだつた。これで働いて自分で食つていけと放り出されてしまつたのだ。母はあまりの悔しさに夜通し泣き通した。何度も死にたいと思つた。くじけそうになる心を励ましたのは、一つ布団に足を突き合わせて寝ている、あどけない五人の子どもの寝顔であつた。ようし負けてなるものか。この子等のために何が何でもやるぞ！そう決心した母は、次の日から自転車に大きな荷物を載せ、電球を農協などの店に卸売りする行商に出掛けるようになった。やりだしたら、とことんやり遂げる母であつた。販路をどんどん広げ、宗像郡一円から遠賀郡まで足を伸ばしていった。大きく分けると、南郷、赤間、吉武コース、城山峠を経て海老津、波津、鐘崎

コース、神湊、勝浦、津屋崎、福岡コースの三つのコースがあった。今日のように車であれば大した事はないかもしれないが、自転車に荷物を載せて山坂を越えていくのである。だから時間がかかった。朝、私たちを学校に送り出してから出掛け、夕方まで帰ってこなかった。

夏の暑い日は麦藁帽子をかぶり、化粧もせず、汗と砂塵にまみれながら、ラムネ一本買うこともなく、訪問先で井戸水を恵んでもらって渴きを癒しながら、ひたすらペダルを踏んでいった。もともと色が黒い母は、なお色黒になった。冬の日には寒風に晒されながら、手もかじかんだろう。お昼の弁当はどこで食べていたのだろう。途中で雨にあつた時は難渋しただろうな。多くの雇い人を使つてきた身分から、今は落ちぶれて行商の身、耐え難いような惨めさも、子どものことを思つて乗り越えてきたに違いない。

母は私たちの前では決して泣き言を言つたり、悲しい顔をしたりすることはなかった。いつも元気に働く母の姿だけが印象に残っている。確かに我が家は貧乏だった。毎日の食事も着るものも、それはつましいものだった。一つのミカンを姉五人で分けていたことを思い出す。一人二袋程度であるから、当然大きい小さい、の差が出る。それをジャンケンで決めたりするが、小さいのが当たつて悔しさを我慢しなければならなかった。今考えて、それも人間形成上大切な訓練の場だつたと思う。家が狭くて勉強部屋も取れないので、押入れが私の勉強部屋であり、ベッドであつた。そういう状況にあつたが、姉弟は仲良く助け合い、私たちには楽しい家庭であり、暗さはなかった。そこには母の頑張りや深い愛情があつたからだ、今にして感謝する。このように私たちには強く頼もしい母であつたが、やはり弱いひとりの女性であつた。後で知つたこと



であるが、母には秘めたる涙の隠し場所があつたのだ。それは行商の途中の、鐘崎から少し離れた岬であつた。道路から海岸の海辺まで降り、そこで母は心の中の悲しみ、悩み、全部を神様に訴え祈つた。それは祈りというより大声で泣きながらの叫びだったという。人通りはなく、大声を出しても岩に打ち付ける玄海の波がかき消してくれた。「キリストの神様、本当にあなたは生きておられるのですか。私は悲しくて、悲しくて、消えてしまいたい思ひです。正直者が、どうしてこんなひどい目に会わねばなりませんか。私は楽しもうとは思いません。子どもだけでもひまじい思ひをさせたくありません。助けてください」。「私はあなたが見えません。私に信じさせてください。今、私は二歳の子をひとり家に置いて、行商に出なくてはなりません。それがつらいのです。出なくてよいように店を出させてください。そして主人の就職のことも、あの事もこの事もお願いします。この事が叶えられたら、確かに神様がおられることを信じます」。まだ神様のことが分からない母は、ここで誰はばかることもなく、子どものように思ひ切り声を上げて、見えない神様に訴え泣いた。それから涙を拭って自転車に乗り、何事もなかったかのように家に帰っていった。

後日談であるが、この時祈つた母の祈りは、ことごとく聞かれたのである。その中には数年経つて母がすでに忘れていたものもあり、神様の真実さに驚きとともに感謝を捧げたものである。しかし、この時はまだ神様の時は来ておらず、さらにもうひとつの大きな試練を通らねばならなかつた。

〈祖父との和解そして死〉

その大きな試練のことを述べる前に、母があれほど恨んでいた祖父との和解が、信仰によってできたことを、証ししなければならぬ。母は次のように記している。

父は事業家であり、またいろいろな名譽職に付いて人望もありましたから、私はそうした父を尊敬し、信頼していました。ですから、これまで父の言葉を信じて一生懸命やってきたのです。それが裏切られて、生活もできなくなつてしまつたのですから、その恨みは毎日に大きくなつていったのです。隣同志に住んでいても、ものを言うこともありませんでした。

ところが、そんな冷たい父と思つていましたのに、お米がなくなる頃になると、お米や野菜をこつそり置いていきました。やはり父親でありました。けれども、それで私の心が解けたわけではありません。依然、冷戦状態が続いておりました。

ある日、私を導いて下さつた薬局のこ主人の聖書講義を聞いていました時、

「もしも、あなたがたが、人々のあやまちを許すならば、あなたがたの天の父も、あなたがたを許して下さるであらう。もし人を許さないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちを許して下さらないであらう」(マタイ六章十四、十五節)。



この御言を聞いているうちに、私の魂の中に大変化が起こりました。

心の中を探られ、恐ろしくさえなりました。イエス様のことを思わないで、父を憎んでいた罪の恐ろしさを知り、和解を迫られまして、翌朝早速、父の所に行つて、謝りました。その時の父のうれしそうな顔は、かつて見たことがありませんでした。

父は釣りが好きで、川魚だけでなく、海に行つて舟に乗り、網を打つて漁をすることを楽しんでいました。収穫があつたときは、必ずピチピチ生きた魚を持つてきて下さつて、子供達を喜ばせてくれました。

それから二、三カ月も経つた頃でしょうか。福岡の妹の家の客となつて、機嫌よく晩酌をかたむけている時、突如脳卒中で倒れ、不帰の人となりました。私達が駆け付けた時には、もう冷たくなつていました。

人間の死は、実に思わぬ時にやつてくるものです。健康そのもので病気を知らない父であつただけに、死体を前にしてただ呆然としていました。

私の主人は体が弱く、三日と空けずに臥しておりましたため、父の機嫌が悪く、「お前は気が弱いから、病気が付くのだ。私を見る。病氣の方が恐れて逃げていくから病氣などしたことがない。死神が来たら捕まえてやる。お前もそれくらい気構えを持って」とよく言われたものでした。ですから父の死とは、どうしても結びつきませんでした。

「草は枯れ、花はしぼむ。確かに人は草だ」(イザヤ四十・七)

父の死を前にして、衿を正さずにはいられませんでした。神様はあらかじめ父の死をご存じで、

西も東も分らない無知な私を憐れみ、御言を通して正しき道にお導き下さったのでした。

もしあの時、御言を聞かなかつたら、私は一生を悔やみ、生涯救われる機会を掴めなかつたかも知れません。

まことに主のなさることは、時に適いて美しきかな、と思います。

#### 〈四男弘巳の召天〉

さて、母にとつて最大の試練について記さなければならぬ。

この当時の母の一番の痛みは、まだ二歳の四男弘巳を家に残して行商に出ることであつた。昼間は、兄たちが学校に行つてゐるため、家には誰もおらず、一人ぼっちとなる。まだ保育所もない時代である。家が国道三号線沿いであつたので、今日ほどでなくとも自動車の往来は多かつた。今頃はどつてゐるか、交通事故に会つてはいまいか、絶えず心配しながら行商をしてゐた。お昼の食事はお膳に用意して出掛けていたが、帰つてみると、食ひ散らかして見るも無残な状態であつた。叱ることもできず、不憫さと申し訳なさに心が痛んだという。しかし弘巳は親の心配によそに、年上の近所のお兄ちゃんたちの仲間に入つて、毎日元氣よく動き廻つて遊んでゐた。

三歳になつて間もないある日、弘巳が病氣をした。これから先は、母が「一粒の麦」と題して教会誌に投稿した召天までのあかしを、そのまま掲載することが適當と思う。

『一粒の麦』

正野サカエ

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん。もし死なば、多くの実を結ぶべし」

(ヨハネ十二・二四)

忘れもしない昭和二十六年十二月二日、遂に四男弘巳は召天しました。

目のパッチリした子で、可愛い盛りの満三歳でした。小学校一年生のお兄ちゃんを読む本を先に覚え、親に似ぬ子ができたもの、将来何になるだろうと、親馬鹿の私は楽しみにしておりました。病気ひとつしたことのない元気な子供でしたが、ある日突然発熱、四十度を超す高熱も扁桃腺の熱くらいに軽く考え、近くに医者控えておるのに連れて行きもしませんでした。

朝になって計ると、体温計も上がり放しで、顔は真っ赤にほてり、体が燃えるように熱いので、驚き慌てて医者を呼んで診てもらった時は後の祭り、急性心臓弁膜症という病気になっていました。

医者の説明では、この病気は生れつきの人が多いが、この子は高熱のために悪くなったのだそうです。ちょうどポンプの弁が悪くなるのと同じで、ポンプなら取り替えも効くが、心臓の弁は取り替えるわけにはいかぬし、茶碗のヒビと一緒で修繕ができないというのです。すなわち、心臓の役目ができなくなる病気で、それは死を意味する残酷な宣言でした。

入信してまだ間もない時でしたので、祈りは聞かれることも知らず、発熱した時すぐ医者にかかっていたら、こんな恐ろしい病気にならずに済んだかもしれないと、どんなに自分を責め苦し

んだことでしょう。誰も知らぬ所で、長い長い間悲しみました。しかし、十字架の御愛を知ってから、この事は神の深いご慈愛から出たことであり、神の摂理であったことに気づいた時、神の図り知ることのできない御愛と選びの尊さ、今も生けるキリストの奥義を教えられ、ただただ感謝と喜びで一杯になりました。

この事は後で詳しく書くことにして、我が家の一粒の麦となった弘巳の病床日記にふれたいと思います。

その頃事情があつて何不自由ない身分から転落し、無一物になつた我が家は、高校生を頭に五人の子供を抱えて、一家を支えるだけの収入はなく、私が重荷を負うことになり、慣れぬ東芝製品を行商しておりました。

以前、多くの人を使つていた時のことを思うと、それは耐えられぬ程のつらさでした。そのつらさも子供可愛さに忍ぶことができたと思います。もちろん、自分のために一寸の布地を買うことも、顔にクリームを付けることもありませんでした。

その日暮らしの生活に、いつ治るとも知れぬ、いや、元の体には絶対になれぬと刻印を押された病人を抱えて、我が家はにっちもさっちも立ち行かなくなりました。私が働いてさえ、やっとここまで来たというのに、重病人を抱えて働きに出ることもならず、これから先、一体どうやって食べていけばよいのか、お先真つ暗でした。

町医者も設備の整つた大病院に連れて行ってくださいと手放してしまつた。入院するには貯えはなし、頼る人もなく、日頃強がりの私も人並みの弱い女でした。出てくるものはため息ばかり。

イエス様も私をお見捨てになられたかに見えた時でした。

「お母さん、僕がお母さんの代わりに行ってこようか」。中学二年の長男の眞宏が言いました。今でこそ見上げるように背高ですが、その頃はクラスでも小さい方で痩せていました。田舎道を二十キロ以上も走らねばならない遠距離は、とても無理に思われましたが、他に妙案も浮かばず、やらせてみることにしました。

得意客が大体固定していたし、眞宏なら案外できるかもしれない、かすかな望みが心の中に湧き、パツと目の前が明るくなるように思われました。

得意先、品物の値段、請求書の書き方、物の言い方まで教え、大人用のボロ自転車の荷台に電球の入った箱を乗せると、眞宏の背よりずっと高くなり、足もペダルに届きません。横乗りして上下に体を大きく動かしながら、こいで行くのです。小さい子供が大きな荷物を運ぶ姿は、人目を引いたに違いありません。私は見えなくなるまで涙で見送り、無事に帰ってくるように祈りました。

宗像郡一円を巡ってくるのですから、五時間はかかります。初めて行く先々、今頃どうしておるだろうか、後悔にも似たものを感じながら、帰って顔を見るまで折り続けました。その間の長かったこと。無事に帰った時のうれしさを忘れることができません。

ほとんどの品を売り尽くし、計算も間違いなく現金を手にした時のうれしさ、有り難さ、しげしげと息子を眺めて頼もしく、思わず心の中で「神様、有難うございます」と叫びました。

目に見えて弘巳の病状は悪化していくので、意を決して福岡済生会病院に入院しました。一日

に十本ぐらいの注射を打ちました。子供ばかりの病室で、回診の先生の顔を見ただけで泣きだす子供が多いのに、弘巳は一度も泣いたことはありませんでした。注射の時は口を真一文字に結んで手を差し出し、観念したかのように、とてもいじらしい姿でした。

一週間目に計算書を手渡されました。「八拾九円」也。

請求金額を見た瞬間、卒倒しそうになりました。今なら十万円にも相当する金額だったので、二週間もおりましたでしょうか、身の破滅を恐れて、医者を引き止めるのを振り切つて退院しました。それは電球を仕入れる会社に支払うべき代金を、医療費に肩代わりしていたからでした。

(注・当時はまだ健康保険がなく、全額支払いだった。)

その頃、弘巳は床に寝かすと、心臓を圧迫して全身紫色になり、瀕死の状態になるほど悪化しておりました。結局、入院して結果は悪かったです。

病人の心配と会社に無断借用したことが気になって、夜もろろく休むこともできませんでした。

恐れていた日がやってきました。何日まで支払わなければ、商品停止という手紙を受け取ったのです。品物が来なくなつたら、飢え死にしないでなりません。早速、現状を訴えて哀れみを乞いました。折り返し、課長さんが来られたのでお叱りを覚悟していると、今まで一度も支払いを遅らせたこともなく、成績優秀ということで賞品を下さつたのみか、懇ろに労い、お見舞いを置いて帰られました。

私は涙が出るほどうれしく思いました。



「あなた方の会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなた方を絶えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、逃れる道も備えて下さるのである」(第一コリント十・十三)

その後も弘巳ちゃんの容体は思わしくなく、再び植木医院にかかるようになりましたが、度重なる注射のために、小さな静脈はカチカチに固くなり、何度も何度も注射針を突き刺したり抜いたりしなければならなくなりました。それでも弘巳ちゃんはグツと口を咬み締めて痛みをこらえ、決して泣きませんでした。

そうこうしているうちに腎臓病を併発し、だんだんおしっこが出なくなりました。一日の量を見るため牛乳ビンに取っておりましたが、茶褐色よりも濃く、私の目には血のように見え、いつもその量を気にしておりました。

幼心にも、私を安心させたいと思つてか、「お母ちゃん、僕おしっこ沢山するよ」と言うので、長いことかかってもスタンスタンと二、三滴でした。弘巳は沢山しようと、一生懸命息ずんでいました。そのいじらしさに、私は泣けて、泣けて、なりませんでした。

おしっこが出ないため、体がだんだん腫れて、お腹は臨月のようにふくれ、ピカピカに光って今にも破裂しそうです。

どうしても水分の制限をしなくてはなりません。飲みたい水を制限し、大好物の蜜柑もわずしか与えませんでした。弘巳も一生懸命我慢しました。でも、喉の渇きにどうして耐えられまじょう。その苦しみがよく分かるだけに、いつそ心行くまで飲ませてあげよう、好きな蜜柑も与えて

やりたいと何度思ったか分かりません。けれどもその都度心を鬼にして、ほんのわずかしか与えず、それをうまそうに飲む様子を見てはつらい思いをしました。

そのうえに、横に寝せると心臓を圧迫して苦しみだすので、寝せることができません。少し傾斜してさえ呼吸困難になります。来る日も来る日も、壁にもたれて起きたままで眠らねばなりません。見るに見かねて、ある日、「お母ちゃんも弘巳ちゃんと並んで寝ようね」、私はそう言つて、少しでも弘巳の苦しみを味わおうと思つて、横に並んで同じように上半身起きた状態のまま寝ることにしました。一時間二時間は辛抱できましたが、まずお尻が痛くなる。何としても上体がきつくて、夜中の二時頃にはもう耐えられなくなりました。

弘巳は何の屈託もなく、すやすや眠っています。私は済まないような気になりながら、床をひいて長々と横になったのです。初めて、その有り難さが身にしみました。床の中で長々と寝られる有り難さ。何の感謝もなく小用していたことも、実は当たり前のことではなく、神様のお恵みがなければ、何もできないことがよく分かりました。私は今でもその度に感謝を捧げています。不思議なことに、弘巳はただの一度も夜眠らなかつたことも、痛みを訴えたこともないことでした。大人の私でさえ一晩も真似ることさえできないのに、年端もいかぬ子に辛抱ができましたよ。あの安らかな寝息、平安は一体どこから来るのでしょうか。神様が支え、助けてくださらないで、どうしてこのようなことがあり得ましょう。

私が側についている時はよいのですが、ちよつと私の顔が見えなくなつたら、さあ大変、苦しみ出すのです。それは決して芝居しているのではなく、本当に危篤状態になるのです。だから

ひとときも離れることができません。狭い家ですから、襖を開ければ台所も便所も見えます。私は便所の戸を開け放して用を足していました。

もうひとつ不思議に思うことがあります。それは召天の前日までイエス様のお話を熱心に聞き、讚美歌を歌うことでした。特に讚美歌九十番「こも神の御国なれば」が大好きで、丸暗記していました。イエス様のお話が尽きてしまっても、同じ話は何遍も耳を傾け、身動きひとつ、まばたきもせず、私の顔をじつと見つめるのです。

大きな黒い瞳は澄み切った湖を思わせ、その中に私の顔がポツカリ映っていました。

私の顔を見つめて、まばたきもしません。何か神秘的なものを感じながら、イエス様のお話をしました。それは見えない方を見ているように思われました。神様が天国への準備をなさっておられたのではないのでしょうか。

そして、遂にその日が来たのです。

召天の時の様子を、当時中学二年生の眞宏が、学校の作文として書いたものが残っているので、原文のまま記すことにします。

### 作文「永遠の命」

正野 眞宏

「まさひろちゃん、眞宏ちゃんー」と姉の呼ぶ声に、目がさめた。

「うん…、もう朝」。僕は眠い目をこすりながら聞いた。

「弘巳ちゃんが危ないのよ」。

「えっ!」、僕は飛び起きた。

そう言うと、姉は台所の方へとんで行った。

そう言えば、障子一枚へだてて寝ている弘巳ちゃんの息づかいが荒い。

突然、「弘巳ちゃん、イエス様の所よ。恐ろしくないのよ」。母の悲痛な叫びが、僕の胸をズキ  
ンと刺した。

「まさひろちゃん、早く」。

姉の声で、僕はすばやく服を着て外に出た。外は暗く、街灯が寒空にぼんやり光っていた。

僕は寒くも恐ろしくもなかった。ただ「神さま、弘巳ちゃんをお守りください」と心の中で叫  
びながら、植木医院を目がけて走った。

僕が植木先生を連れて帰った頃は、隣りのおばさん(母の妹)が来て、弘巳ちゃんの足をさすつ  
ていられた。

弘巳ちゃんは、大変苦しそうだった。

先生は静かに弘巳ちゃんの大きくはれあがった手をとって、脈を見ていられた。僕達は息をの  
んで、先生のことばを待った。

「かわいいのですが、これでは……」。

僕達はただぼうぜんと、弘巳ちゃんを見守るばかりだった。

すると弘巳ちゃんは、

「おばちゃん…もういいよ……、ボク…いいよ。おかあちゃん…もういいよ……。ボクおばちゃ



弘巳3日前の召天

んすき……、かあちゃんも……すき……すき……いちばんすき……」。

苦しい息の下から、弘巳ちゃんは叫んだ。

この声におばちゃんと母は、わつと泣きふした。

僕もこらえこらえたなみだが、どうつと出た。悲しかった。とても悲しかった。

夜が明けたのか、あたりが明るくなった。

先生は、またすぐ参りますといわれて帰られた。

おばさんも帰られた。

僕達兄弟は、弘巳ちゃんの床をかこんだ。

「弘巳ちゃん、イエス様にだっこされなさいね……。おかあさんもあとで行くからね……」。

母は目になみだをためておっしゃった。

「おかあちゃん、もうついてこんでいいよ……。みんな……。こんでいいよ。イエスさまがきなさつたから……。ポクいくよ……。みんなさようなら……。さようなら……」。

この言葉、三歳の弘巳ちゃんの言葉であるうか。

この時障子があいて、前のおじさん（岡部兄）とおばさんが入ってこられた。

お二人は「弘巳ちゃん」と言つて、顔をふされた。

「千子……」、弘巳ちゃんはこう叫ぶと、息をひきとつた。手にはしっかりと母の手がにぎられ

ていた。

「弘巳ちゃん……」。皆、さげんだ。

僕は「かなしくない。かなしくない」と叫んだものの、あとからあとから出るなみだを、どうすることもできなかった。

愛する母にだかれた弘巳ちゃんの顔には、輝かしい天国で、とこしえの命を得たよろこびにかがやいていた。

この作文は、きつと神様が眞宏を通して、私達のためにそして神の福音のために残して下さったものと思います。なぜなら三年間も日の目を見ることなく、発見したのは、くず籠の中からでした。火にくべて燃やすところでしたが、赤インクでAと書いた最高点が目立ったので、拾い上げたのでした。

広げてまず驚いたのは、「永遠の命」という題でした。

一気に読むと、まるで昨日の出来事のようによみがえって感無量でした。弘巳の召天は子供心に焼き付いていたのでしょう。今では我が家の家宝として、子々孫々語り伝えることにしております。

葬儀は、隣の妹の広い家を借りて行なうことになりました。教会員の方々や隣組の方々が盛大でした。色とりどりの菊の花に埋もれて棺の中の弘巳の顔は、頬紅で化粧したので、一層生きているようで、天使か菊の精かと思われました。献花をなさるお一人ひとりが覗き込んで、嘆声を

上げていらつしやいました。

信者のお一人で信仰の篤い安永のおばあちゃんが、聖句を書いた短冊を私に下さいました。  
「エホバ与え、エホバ取り去り給う。」

エホバの御名は、ほむべきかな」(ヨブ記一・二二)

と書いてありました。長い間その真意が分からず、悲しみの種でしたが、「今わからず、後これを知るべし」とおつしやつた御言のように、神様の深い御愛とお恵みを後になって知りました。わずか三年のえにではありましたが、私達に多くのことを証して、使命を果たしたのでした。

聖書に書かれてある天国はまさにあるということ、神様のお言葉は真実であること、私達の住む世界は仮の宿であり、私達の目標は天国にあること、救われるということは永遠の命を戴くことであること、それは働きではなく、ただ主イエス様を信じる信仰によって義とせられること、義とは主イエスご自身であり、一点の罪なき御方が私達の罪の身代わりとなって死んでくださったこと、そして三日目に甦られ、信じる私達と共におられて、悩みの時のいと近き助けとなつて下さる救い主でいらつしやるのが、弘巳の召天を通してよく分かりました。

天が地よりも高いように、神の御思ひは人の思いとは異なることでした。病気の進行とともに当然痛みや苦痛が伴うはずなのに、ただ一度も訴えたことがないばかりか、イエス様のお話に耳を傾けるなど常識では考えられないことですが、見えない御方が弘巳と共におられたに違いありません。小さな子でも御聖霊のお働きで信ずることができること、信せば肉体的にも靈的にも時間空間を越えて重荷を負ってくださるばかりか、神の栄光を見ることができたのです。神の御

言は、今も力強く生き働いて下さることがよく分かりました。

残された四人の息子娘も、言わず語らずイエス様こそ私達の救い主でいらつしやることを信じ、それ以来二十年、毎日家庭礼拝を致しております。

今ではみな成長し、それぞれ家庭を持つておりますが、その所で続けており、主の御用に励んでおります。今年の正月は遠路各地から親元に集まってきましたが、十四名に増えており、みんな主を崇め礼拝しました。

「汝、主イエスを信ぜよ、さらば、汝も汝の家族も救わるべし」(使徒行伝十六・三一)の御言のとおり、全家族を救いに入れてくださいました。それぞれの遣わされた地において、この証をしております。私も証し人としてお立て下さったのでしよう。会う人ごとにお証し致しております。したら、イエス様が選ばれた方々を集めて下さって毎週集会が我が家で開かれ、皆さんが主を崇めるようになりました。主は私をすべての仕事から解放してくださいと、毎日感謝賛美を致しております。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」(ヨハネ十二・二四)。

神様は、私達の思うところ願うところに勝ることをなしてくださいました。弘巳が我が家の一粒の麦となつて死にましたが、彼は信仰によつて今なお語っています。

一粒の麦が何十倍、何百倍になるように、これからも祈っていきたく思っています。

「エホバ与え エホバ取り去り給う」



エホバの御名は「ほむべきかな」。アーメン。

一九七二（昭和四六）年七月記

〈その後の我が家の生活〉

弘巳の召天は、母と私たちに大きな影響を与えた。

これより先、まだ弘巳が病気の頃、母の姉妹たちがある新興宗教に入っていたが、たびたび母の所に来て、あんただけがこの神様を信じないから子どもが病気になっている、信じたら治ると教祖が言っているから入りなさいと奨められていた。しかし母はどんなに言われても、弘巳の状態が悪くなっても、耳を貸さなかった。そして弘巳は死んだ。「見てごらん、あんたが私たちの言うことを聞かなかつたからよ」と姉たちが言ってきたが、母の心は決して動か

東郷時代の母



なかつた。否むしろ、弘巳がはつきり天国を証ししてくれた、天国は間違いなくあるのだ、私たちも天国へ行つて弘巳に会えるようにイエス様を信じていこう、家族みんながそういう気持ちになつていた。

それから我が家の家庭礼拝が始まった。働きに出てどんなに疲れていても、どんなに遅くなつても、私たちが試験勉強していても、今日は止めようということにはなかつた。

この点は徹底していた。教会で覚えた讚美歌を、私たちの試験の答案用紙の裏に書いて歌った。母が間違つて覚えた讚美歌そのまま覚えてしまったので、今だに修正が効かないものもある。聖書を読んで、母がその日のあつた事やいろいろな証しをしてくれた。それが結構おもしろかつた。それは親子の交わりの時でもあつた。最後に祈る母の祈りが長かつた。足がしびれてくる。体がじつとしておれなくなる。誰かが我慢しきれずに「クク…」と笑う。するとそれが伝染して、みんなが笑いだして祈りが中断することもしばしばだつた。そんな家庭礼拝が生活の一部となつて、ずっと続いた。今にして思えば、ここで養われた信仰と母との交わりが、その後の私たちの人間形成に与えた影響は、図り知れないものがある。私が親を少しでも助けたいと大学受験を止めて就職したことも、両親が年老い病氣になつたとき、姉弟みんながひとつ思いで支え合つたことも、この時の母のぬくもりが原体験として残つていたからだと思う。

さて、弘巳の看護から解放された母は、今までの分を取り返すかのように行商に励んだ。そしてだんだん販路を広げ、遠賀川、折尾、黒崎まで足を伸ばしていった。母にはひとつの目標があつた。それは家を改築することであつた。私たちの住んでいる家は納屋を改造したもので、狭いうえに雨漏りがひどく、雨の度にバケツと鍋が総動員された。特に台風の時は一晩中戸を支えていたことを思い出す。勉強部屋もなかつた。それでなんとかしてやりたいと、母は頑張つたに違いない。それから一年か二年して、古い家の横に増築する形で、十坪くらいの小さな二階建の家が建つた。二階には四畳半の勉強部屋もできた。母の祈りのひとつが、このようにして応えられた。

姉は宗像高校に行っていたが、父の血を引いて、小さい時から踊りや演劇が好きで演劇部に入っていた。身内のひいき目かもしれないが、表現力が豊かでもいつも主役級をやっていた。その頃から話術が巧みで、映画を見た日は後で私たちにその内容をセリフに身振り手振りを入れて話してくれていたが、実際の映画を見るよりもおもしろく、夜の更けるのも忘れて聞き入っていたことを思い出す。姉は卒業したら、宝塚に行きたいと熱望していたが、両親の猛反対で実現しなかった。その代わりという訳でもないと思うが、幼稚園の先生の資格を取るため、兵庫県西宮市にある聖和女子短期大学に行くようになった。当時の経済状態からして、母もよくやったものだと思う。子どもの将来のことを考えて、教育だけは何とか受けさせてやりたい、生活の方は自分が頑張ればよいのだから、そういう思いだったのだろう。

私の時もそうだった。これからは高学歴の社会になるからあなたは大学に行きなさい、学費はお母さんがなんとかするからと言うので、奨められるまま有名高校に入るため福岡の伯母の家に寄留してそこに入った。母は私が国立大学に入ることを楽しみにしていたようである。しかし大学受験準備にかかる頃になって、私は大学に行くことに疑問を抱くようになった。親にこんなに苦勞させてまで大学に行く必要があるのだろうか。大学に行くばかりが人生ではないはずだ。人間にとつて一番大切なことは神様を敬うことであつて、大学に行かなくても立派に生きていけるはずである。そう考えると、勉強に身が入らなくなつてしまつた。私としては親を少しでも樂にさせてやりたいという思いで一杯であつた。それで一年浪人までしたが、入試を失敗したのを機に、思い切つて就職することに切り替え、当時の八幡市役所に入職した。最初の給料を袋のまま

渡した時のうれしそうな母の顔を忘れることができない。私も少しでも役に立つたことがうれしかった。そのようなことで弟たちも大学には行かなかった。(もつとも次男だけは自分の力で夜間大学に行った。)

### 〈青果店の開業〉

さて母の電球の卸売業の方は、蛍光灯の出現と普及に伴い裸電球は売れなくなってきた。蛍光灯も扱ってはみたが、電気知識と技術を持たない母には無理だった。その頃、父の大方の方の仕事もなくなり、これ以上勤めることもできなくなつたので、母も行商をやめ、一緒に青果とお菓子の店を開業することになった。

ところがこれも簡単には行かなかつた。家に近い青果店が大反対運動を起こし、東郷町の青果市場に入れなくしたのだ。父は止むなく、隣の福岡町の青果市場まで仕入に行かなければならなかつた。自転車で片道一時間ぐらいかかるし、自転車では仕入れる量もたかが知れていた。それに近くの青果店の意地悪もあつて、お客は向こう側を通つて近寄らず、なかなか売れなかつた。私もときどき店番をしたが、羨びた野菜を売るのはつらかつた。家で食べるほうが多かつたのではないだろうか。そういう風で二人でかかる程でもないのに、店は父一人に任せ、母は生命保険の外交員を始めた。持ち前の頑張りで、ここでも成績はいつも上位だったと聞く。母の生活力の旺盛さというか、したたかさには感心するほかない。母は自然と郷里の八幡市方面に足が向いていった。この事が神の導きを受けることにつながっていく。

店は結局三、四年ぐらいで閉じることになる。後日談であるが、十数年経ったある日、姉が博多の町で意地悪をした青果店の奥さんにひよっこり会った。するとその奥さん、あなたたちに謝りたかったという。聞けば、私たちが店をやめて東郷から出ていってから、間もなく主人が交通事故で亡くなる、自分も病気で商売もできなくなるなど不幸続きであった。自分の店は十分売っていたのだから、あんな意地悪しなくてもよかったのに、それで罰が当たったのよ、御免なさいね、早くあなたたちに謝りたかったということだった。その話を聞いて、神様はご自身に従う者の責任を持たれる方で、逆らう者を許し給わず、必ず報いられる恐るべき方であることを知った。

### 〈一枚のプリント〉

ここで私たちが行っていた教会と、母の信仰について触れておきたい。

母が最初に行ったのは日本基督教団津屋崎教会（森分牧師）であるが、時々しか行けなかったようである。この教会にはピート先生という婦人宣教師がおられて、日曜日の午後になるとジープに乗って、大和先生という宗像高校の先生で熱心なクリスチャン宅での日曜学校に来ていた。私たち子どもはこの日曜学校に行っていたが、多分、母はその後開かれていた家庭集会に出ているのではないかと思う。その後、東郷の信者さんたちが何とか教会が欲しいと、岡部住雄兄、下川洋太兄、吉田稻城先生、大和先生が中心となって用地の取得など建設準備を進め、一九五五年頃、小高い山の上に東郷教会が設立された。

初代牧師には津屋崎教会から献身して神学校に行っていたY師が、卒業と同時に就任した。そ

れで私たちは近くなつた教会へ毎週行けるようになった。一年くらいして幼稚園が開園され、ちょうど短大を卒業して幼稚園の教師免許を取得した姉が勤めるようになったが、牧師の奥さんと思見が合わず、一年くらいで福岡の幼稚園に変わってしまった。Y牧師はいま考えると、信仰者というより事業家といった感じであつた。礼拝説教は最初聖書を読んだ後は、聖書とはあまり関係ない時事問題や人生問題等が中心で、神様のことや信仰のことは何も掴めなかつた。ここでは旧約聖書は一度も読まれることはなかつた。だから私たちは、旧約聖書は律法時代の古いもので読まなくてもよいものだという認識しなかつた。母の魂は飢え渴いていたと思う。信仰の何たるか、十字架の何たるか、なにも分からなかつた。それでも、奨められるまま洗礼を受けた。このままでは、十字架の救いにあずかることはできなかつたであろう。しかし、神は眞の信仰に導く備えをしておられたのである。

ひとつは一枚の説教プリントを手にしたことであり、今ひとつは吉田稻城先生と出会つたことである。まず、一枚の説教プリントについて、母は教会誌に次のように証している。

### 一枚の説教プリント

もう二十年にもなりましようか、私が東郷におりました頃、八幡前田教会から発行されたガリ版刷りの説教プリントが、どのような経路で私の手に入ったか分かりませんが、その一枚のプリントが私の運命をガラリと変えてしまいました。

私がいつも礼拝していた教会は、神学校を出たばかりの牧師で信仰経験が浅いためでしょう、



吉田稲城先生

悩みの内にあつたので、解決はないものかと相談に行く、私にそんなこと言われても困るとおっしゃったので、何のための信仰か分からなくなつてしまいました。

それに毎週の説教は人の借り物で作り上げた作文に過ぎず、それを棒読みするだけで、私達の方を向いて説教することはありませんでしたので、何の救いも希望も受けることはできませんでした。

ある優秀な大学生が、人は何のために生きるかと牧師に教えを乞うたが答えが得られず、失望落胆して、遂に惜しくも若い命を自ら断つてしまいました。また、その父親は教会の長老でありましたが、牧師を見限つて脱退するという悲劇も起こりました。

私も生きるぎりぎりの所まで来ていたので、手にした一枚のプリントが、どんなに大きな救いとなつたか分かりません。さら紙に印刷されたガリ版の字も薄れてしまうほど、引き出しから出しては読み、出しては読み、紙が破れてしまうぐらい何度も読み返したものでした。

「はじめに神は天と地とを創造された。この方は無から有を造り出す力をもって、どんな境遇の者をも救うことができる」ということが、懇ろに書いてありました。活字ではありませんが、脈々と生きづきを感じ、私の知らない世界があるようで、ほのかな希望が与えられたのでした。新約聖書だけでしたので、創世記など読んだことのない私は新発見をしたように思われました。

私は一度でよいから、この教会に行つて直接この耳で聞いてみたいと思うようになりました。

この願いは数年後に叶えられることになるが、その前に母の信仰に大きな影響を与えた吉田稲城先生のことに触れておかねばならない。

〈吉田稲城先生との出会い〉

吉田稲城先生の略歴を簡単に紹介すると、先生は小学校の校長までなさつた方で、弟に初代の北九州市長吉田法晴氏がおられる。信仰に入られた動機は、若い頃の大病を通じて命ということを考えさせられたことと、妻が召天前に「麗しい、ああ、麗しい」と天国を証しし、最後に「イエス様を信じ、教会に行つてください。天国で待っています」と言い残して召されたことによると聞いている。

定年後は信徒伝道に専念され、東郷教会設立後は若い牧師のために日夜祈つておられた。特に病床伝道に力を注がれ、毎朝祈つては、今日は何処に参りましょうかと導きを求めて、毎日のように出掛けられていた。そして汽車の待時間などちよつとした時間を割いて、みことばを書いた葉書を出していた。その一つひとつに祈りが込められていて、母あてに來た手紙を母は宝物のよう大切に保管していた。

母が稲城先生と出会つたのは何時なのか定かではない。おそらく津屋崎教会に行くようになって間もなくではないかと思う。母はあかしの中で「逆境の中にあり、行き悩んでいた時に、主が



神の人吉田稲城先生をお遣わし下さったことは、私にとって地獄で仏に会ったような幸いなめぐり合わせでありました」と書いてある。先生は自転車に乗って、我が家にもたびたび訪問して下さった。母は何でも相談をし、信仰上の導きを受けていた。母は先生を恩師とも父とも慕っていた。後に母が信徒伝道を志し、家庭集会やみことばを書いた手紙をこまめに出すようになったのも、先生の影響である。

ここで吉田先生を通して、神からの新しい導きを受けたことについて記すことにする。

すでに述べたように、両親が始めた青果店はうまくはいかなかった。それで母は家計を助けるために、比較的勤めが自由な生命保険の外交員になった。そして黒崎で外交をしている先で、耳寄りな話に出会ったのである。母の証しを掲載する。

私の心は、いつも生れ故郷の八幡の方に向いていました。それでいつしか八幡で仕事をやるようになったのですが、ここでよき音づれを聞いたのでした。

それは信じられぬことでした。新しいお客さままで仕事の外は知る由もない方から、私の事情を聞いて同情し、私のために家を建てて商売の資金まで出してやる、というのですから信じられません。お断りしてきましたら、今度は奥さんまで勧めてくださるので、私も真剣に考えざるを得なくなりました。

そこでご夫妻に言いました。あなた方はどうして得にもならないことを私に勧めるのですか。もし私が大金を借りて失敗したら、利子どころか元金さえ払えなくなるのですよ。すると、利子

などいらぬ、失敗したら返さなくてもよいというのです。人情薄き世の中に、こうした奇特な方もいるものだと思いました。

そんなよい話も、もし失敗したら……という恐れがあるため決心がつきません。思いあぐねた末、吉田先生に相談しました。

すると、私の顔をじつと見つめて聞いていらつしやいましたが、「正野さん、祈つてみましょう。それが神から出たものか、とにかく祈つてから返事します」とおつしやつたまま梨のつぶて、何日経つても返事もなく、訪問もしてくれません。待つ身の長さ、私のことなどすっかり忘れているに違いないと、せっかちな私は心穏やかではありません。

そこへひよつこり現われた先生は、にこにこしながら、「正野さん、行きなさい。それは神から出たことです」。

私には人からとか、神からとか分かりませんので、そんなことはどうでもよく、なぜ先生はそんな冷たいことを言うのかしらと思つたのでした。それで、

「先生、もし失敗したらどうしますか。私が八幡へ行ったら、先生淋しくなりますよ」。こういう不信仰な不遜なことを平気で言いました。

先生は私を睨みつけました。今までこんな恐ろしい顔を見たことがありませんので、ソツとしました。

「主が行けとおつしやるのだから、行け！」と、大喝なさいました。

こんな大声は、今だかつて先生の口から聞いた事がなかつたものですから、後の方へ三尺も飛

び上がるように驚きましたが、その事によって私達の決心はつきました。

先生とお別れることは辛いことでしたが、心に決した時から物事はスムーズに道は開け、閉ざされた門が祝福の鍵をもって開かれ、展開して行きました。

後で聞いた話であるが、私たちのために家を建ててくれた奇特な方は、近所でも評判のケチな人であったとのこと。ペルシャ王クロスの心を動かして捕囚のイスラエルの民が祖国へ帰れるように道を開かれた父なる神が、私たちのためにその方の心を動かし用いて下さったのである。限りない御愛のゆえに感謝する。

このようにして私たちは新しい神の導きを受けて、一九五九（昭和三四）年七月に東郷の町を離れ、八幡市黒崎町へと引越すことになった。父五二歳、母四七歳の時である。それは母にとつて信仰面から見れば、イスラエルの民が荒野の旅を終えてヨルダン川を渡り、乳と蜜の流れるカナンの地を目前にしてそれを獲得し、聖別されていく様に似ている。

## 六 黒崎時代（真の信仰へ）

### 〈食堂の開業〉

新しく建ててもらう家は国道三号線と二〇〇号線とが交差する交通の要所で、黒崎駅から徒歩十分、繁華街からは外れていたが、人と車の往来が多い場所であった。ここで食堂を開業するこ

とになるが、そのいきさつについては、母の証しで紹介しよう。

### 主の山に備えあり

吉田先生から「神様の御旨だから八幡に行きなさい」と奨められ、やっと決心がついて家を建てていただくべくお願いに参りました。すると快く引受けてくださり、自分で設計してきなさいとおっしゃいました。

まず何の商売を始めるかを決めなければなりません。小資本で、しかも回転の早いものは何でしょうか。主人は、食べ物商売は現金商いで回転が早い、うどん屋ならば素人でもできるだろうと言いますので、それに決めました。一階は全部お店に、二階を二間の住居にして建てていただきました。

古い日記帳が見つかりましたので、開店までのことを抜粋して書いてみようと思います。

○月○日

子供達は学校があるので、当分私達夫婦だけが行くことにして、必要な荷物をまとめてトラックで黒崎に運び、子供達と別々に住むことになった。新築の木の香り、新しい畳の上に座る心地よさ、まるで夢を見ているよう。何か良い事のありそうな気がする。夜は二人きりで淋しかった。子供達はどうしているだろうか。

○月○日

さあ、これからが大変だ。喜んでばかりいられない。何から始めてよいやら、まずは仕事を分

担することにした。主人には料理の技術を習ったり、研究してもらい、私は資金の調達と什器の買入れに当たることにした。

主人は「ようし、やるぞ！」と目を輝かしている。こんな生氣ある顔を、今まで見たことがない。

○月○日

トラック代を支払ったら、硬貨だけになった。心細きこと限りなし。午後、家を建ててくださった家主さんに資金を借りに行く。差し当り五万円借りることにした。家主さんは五万円では駄目だ、十万円持っていきなさい、今は家内がおらんから後で持っていさせる、そう言っているうちに奥さんが帰ってこられた。

「正野の奥さんが資金に十万円必要だそうだ。出しておいで」とおっしゃった。すると奥さんが私の顔をちらりと見て、嫌な顔をなさったかと思うと、「家を建てただけでも大変だったのに、今月も来月も金を貸してはいけないと曆に出ているから知らん」と言われた。ご主人の方は出して来いと言う。二人が喧嘩になりかねない様子を見て、いたたまれず「いいです。私が勝手なことを申し上げて済みませんでした」と言うなり、飛んで帰った。

主人にベソを見られないように二階にかけ上がり、机に顔を伏せた。ああもう駄目、万事休す、目先が真っ暗になった。でも吉田先生が神の御旨とおっしゃった言葉を思い出し、「主よ、助けて下さい」と叫びながら祈る。夜になって家主さんが来て、手元にこれだけあるから使いなさいと、一万円渡して下さった。

○月○日

眞宏が八幡市役所勤めの帰り、毎日帰りに寄ってくれるので、好都合。風呂敷包みの品物を持って行ったり、来たり。子供達の様子も報告してくれる。お姉さんがお母さん代わりになってよくやってくれること、どんな家か見たい、今度の休日に行ってもよいか等の報告。私も顔を見たいから来なさいと言っておいた。昨日の資金借入のことを話すと、眞宏は困った顔をして市役所から借りることは難しいとのこと、がっかりした。しかし、私は神によつて希望を捨てない。「人にはできないが、神には何でもできる」、主よ、助け給えと必死で祈る。神より他に頼るものなし。

○月○日

家主さんから借りた一万円を握って、古道具屋を捜しに黒崎の街を歩いていると、向こうから誰か思い出せないが、顔見知りの人が私を見付けて近付いてくる。やっと思い出した。父の友達の糸山さんという方だった。

「やあ奇遇だなあ。今何処におる？」。

「最近ここにきて、食堂を出そうと思っています」。

「そりやちようどいい。わしは食堂で儲けたんで、貸しビルを建てるつもりや。食堂の道具が邪魔ではないが、捨てるには惜しい。使っておくれ」。

渡りに舟である。

「おいくらで分けていただけますか」。

「いやあ、正野さんには世話になった。ただじゃ。いらん、いらん。すぐトラックで運ぼう」。

そう言つて、わざわざ運んで下さった。お金は受け取られなかった。

お店に道具を入れると、明日からでも営業ができるほど、何から何まで、茶碗類に至るまで揃っていた。食台は銀杏の銘木、厚さ十五センチぐらいある豪華な品で、とても私達に買える代物ではない。二人掛けの椅子も揃い、合わせれば二五人まで座れる。そのうえ、夏の密掛けを作る削氷機には二馬力のモーターがついている。ああ、天の助けだ。主よ、感謝します。

資金がなくて借りるところもなかった私に、主は何もかも備えて下さったのでした。

○月○日

手元の一万円でのれんと看板が欲しいと思い、染め物屋にのれんを頼み、帰る途中で、はからずも岩崎看板店のご主人に何十年ぶりか会った。

「やあ、正野さん、珍しい。どうしてます？」と聞かれたので、食堂開店のことを話した。すると、

「その看板、私に書かせて下さい。正野さんには御恩返しをせねばならぬ」。

「恩返しとは何ですか。私には何もして上げた覚えがありませんけど」。

「あんたじゃない。お父さんですよ」。そう言つて、こう語られた。自分が自立するとき、仕事場として広い家と倉庫が必要だが、自分にはまだ信用がなく、誰も貸してくれる人がなくて困っていたとき、あなたのお父さんが「気の毒だ」と言つて、保証人になって借りて下さった。そのお陰で今日の私があるのだとおっしゃって、看板書きを快く引受けて下さった。

小さいのでよいですからと頼んだのですが、まあまあ私に任せなさいと言われて、店の外観を見て帰られた。

二度までもこんな事があるとは……父の功德か。いや、これはこの世に神なんてあるものかと荒れに荒れていた時に、幻の内に「神は愛なり」と私に近づいて下さった主が、事を行なって下さるのに違いない。「わたしは生きていて、必ず約束を果たす」とおっしゃっておられる主の御声が聞こえるようだ。

○月○日

ガス屋さんが来た。取り付けかと思つたら、下検分だけで帰った。隣の関門急行バスのバスガールや運転手が入れ替わり立ち替わりのぞきにくる。

「きれいな店ね、いつから出すの。待っているのよ」と女の子に聞かれて、「ガスがつき次第、開店します。どうぞ、よろしく」と答えた。開店前から催促されるとは、幸先がよい。

○月○日

眞宏がいつものように給料袋を開封せず渡してくれた。済まないと思う。いつになったら、もういいよと言う日が来るのか、その日が待遠しい。別のポケットから封筒を取り出して、「はいお母さん、二万円」と言つて渡してくれたので驚いた。聞くと、市役所の職員厚生会の貸付からやっとこれだけ借りたというのだ。涙の出るほどうれしい。

早速その内から東郷の生活費を渡し、家主から借りた一万円を返しに行った。「そんなに早く返さんでも、また何時でも借りにおいで」と言つて下さったが、この分ならもう借りなくてもよさそうだ。

○月○日



岩崎看板店のご主人が、出来上がった看板を取り付けにきて下さった。思いがけない立派なものだ。四十ワット二本の蛍光灯付看板に、「三平うどん」と赤字で書かれた字は、遠くからでもよく目立つ。また入口の屋根の上に三メートルもある横看板、店の入口の横に二メートルほどの立看板を付けて下さった。身に余るご厚意に恐縮して、半金でも受け取って下さいと願ったが、お受けにならなかった。

人の厚意とそれを導いて下さる神の御愛に、涙があふれる。

屋号の三平は、吉田先生のお話の中に三人の信仰の勇者がおられて、山室軍平と後は忘れたが、この三人を称して「何とかの三平」と言うと、その三平を思い出したのでそれにした。

○月○日

いよいよ開店の日が来た。すべり出しは上々。今日一日うどん一杯サービスすることにした。そのことを知った人がぞろぞろ来た。隣の特急バスの人達だけでも二十人、うれしい悲鳴をあげる。

これまでが開店までのあらましであり、主の御恩寵の深さを忘れることができませぬ。資本金なしでは商売はできないと思いついていたことも、無から有を産み出す神の力の無限なることを知ることができたのでした。

このようにして食堂は開店された。神様の祝福と導きはなお続いた。母は書き忘れたわけでもないと思うが、別のあかしに次のようなことを載せている。

主が働いて下さったので、一銭の借金をすることもなく、また何一つ買うこともなく、すべての物は備わりました。

しかし、ズブの素人では看板に出した料理の品々ができませんでした。困っていると、偶然と申しましょうか、三十年前、子供の時に世話になった女中さんにばったり会いました。

その人は髪が生え際も白くなり、その頃の艶やかさは失せておりまして、昔の面影は残っているもので、会った瞬間、向こうから「あら、かず子さん」、私も「藤野さんやね」と言った具合で、互いに消息を語り合いました。三十年の歳月は、随分事情境遇を変えるものです。藤野さんはよき主人と子供に恵まれ、則松に家を建てて幸福そうでした。

それに引き換え、私の境遇に同情して下さいたのか、「明日から加勢に行つてあげる。私は食堂に三年勤めた経験があるので、何でも作れるのよ。お嬢さん育ちに、何ができるものですか」と言われる。教えてもらえば分かると言つても聞かず、押し掛けて下さったのでした。

それで私達は大助かり。そして私達が覚えて自信がつくまで、何から何まで教えていただきました。

このように主は料理人まで備えてくださり、全くの至れり尽くせりで、まことに祈りに勝るとを成して下さいました。主のなさることは、完璧であると思います。

それはかつて母が岩壁で涙をもって祈つた祈りに、神様が真実に応えられたということである

う。しかも単に生活の安定というだけにとどまらず、カナンの生涯に入るために魂の成長という、神様の最高の恵みが用意されていた。

へ八幡前田教会へ、そして天国ソロバン

食堂が軌道に乗ったところで子どもたちも黒崎に移転し、一緒に住むようになった。弟の隆士はここから宗像高校に通い、暢之は黒崎中学に転校した。家族五人が住むには六畳一間では狭く、勉強部屋も取れなかったが、住めば都であった。

さて教会であるが、母はためらわずに、先の一枚のプリントで知った八幡前田教会と決めていた。けれども食堂を始めてからは日曜日にお客が多く、休めないのではとんど行けなかった。私も仕事が忙しいやら、礼拝は何処でも同じという気持もあつて行っていなかったが、ある日母に誘われて、父に店を任せて礼拝に出てみた。一九五九（昭和三四）年九月六日のことである。その日の感動を忘れることができない。それは今までの形式的な礼拝とはまるで違っていた。それまでは神は遠い存在であったが、ここには神が今生きて働いておられる、何か分からぬがそういうものを感じたのである。母も同様であった。それから私たちの前田教会通いが始まった。行動派の母は、早速榎本先生の所へ挨拶に行った。その日のことを次のように記している。

天国ソロバン

「私は○○教会の者でございしますが、こちらの方に移転してきましたので、今日からこの教会の

会員にして下さい。商売をしていますので、毎週は来られませんが、どうぞよろしく」。私は丁寧に辞儀をしました。

よくいらつしやいました、と歓迎して下さいさるかと思いきや、さにあらず、「クリスチャンが礼拝を怠るとは、一体どういうことですか」。

初対面者に手厳しい答えが返ってきました。

「開店して間がありませんし、日曜日が一番売上げが多いので、毎週休んでいたら口が干上っています。家賃もたまっていますので」。

恥を忍んで実情を打ち明けたのですから、よく分つてくれて、「それではお祈りしましょう」とおっしゃるかと思つていきますと、またまた、さにあらず、

「それで、口が干上がりましたか」と言われる。

「聖書に、安息日を覚えて、あなたの全ての業をせよ、と書いてあるでしょうか」。

「……」。

口が干上つては遅すぎるではないですか、と反発したい言葉を飲み込んでしまいました。

「家賃を払いたかつたら、毎週いらつしやい」と、全く理に合わぬことをおっしゃるのです。

毎週来れば、褒美でも下さろうと言うのだろうか。まさか、そんなことはあるまい。前の教会では、私は日が浅いのには役員を仰せ付けられるほどに熱心で、礼拝は欠かしたことがなかったのに、一向によい目に会ったことがなく、子供が死ぬなど苦しみの連続だった。どう考えても、日曜の入出の多い日に休めば、売上げはゼロ。ここまで来るのにも電車賃もいるし、献金もいる。

マイナスばかりなのに、それを毎週来なさいとはちよつと厚かましすぎるのではないか、と言いたいところですよ。

それを知ってか知らずかお構いなく、先生は一時間以上語り続けられました。

「私は三十年間、聖書一卷だけで、何も持たず八幡に参りました。『まず神の国と神の義を求めよ。そうすれば、それらのものは全て与える』との神様の約束を信じて、まず自分がこの事を確かめたうえで、もし餓死する時はこの聖書を信ずべからず、信ぜば餓死します、と遺言に書いて

死ぬ覚悟で参りました。今日まで餓死することなく、一人の時は一人のように、家族が増えれば増えたように、必要なものは与えられ、豊かに恵んで下さいました。私が今生きているということ、神様が生きておられる証しであつて、神様のお約束は絶対変わりありませんでした。どうです、信じてみませんか」。

私一人のために、ご自分の体験を力強くお証し下さいました。私は聞いていて理屈に合わないことばかりで、さっぱりわけが分かりませんが、そのお言葉の熱烈さの中に何かがあるような気がして、「よし、そうまでおっしゃるならやってみよう」という気になりました。

帰って主人に話すと、



三平食堂の前で

「そういう無茶な事はできん。第一、家主が許さんよ。家主の好意で家賃は当分待つてあげると言われているのに、日曜日のかき入れ時に休んで、教会に行くなんてできるか」と大反対。

それでも、私は「安息日を聖くすべし」と一線を引いて、「日曜日は休みます」と店頭に貼り紙を出すと、いつの間にか主人が引き破っていました。また書いて出すと、また破りました。

結局、三カ月間だけ日曜日休まず働くのと、休んで礼拝を守ると、収入がどちらが多いかを見て決めようということ、主人はしぶしぶ同意しましたが、もし家主がやかましく言ってきた時は、あんたが言い訳しなさいと責任を持たされてしまいました。

しばらくして、案の定、家主さんが来ました。

主人は慌てて私の所に来て、耳元で「わしや、知らんからね。あんた出なさい」と言つて、トントンと二階へ掛け上がってしまいました。

「あんた方、日曜日のかき入れ時に毎週戸が閉まっているが、病気でもあるまい。一体何しとる。家賃払えるんやろう。もらおうか」。

ごもつともな家主の言い分です。こうなったら、仕方ありません。私は度胸を据えて言いました。

「家主さんはご承知ないかも知りませんが、私達はクリスマスチャンです。毎週礼拝に行つています。それは家賃を払いたいばかりに、教会に行つて神様の祝福をお祈りしているのです。お陰様で売上げも少しずつ祝福されつつありますから、今しばらくの間、目をつぶつて見ていて下さい。きつと払いますから」。それから食堂を開店するまでの神様の奇しき御業を、真実をもってお話ししました。

それが通じたのでしよう、黙って帰られ、以来、それから一度も請求を受けることはありませんでした。主は決して私達をはずかしめ給いませんでした。

こんなことがありました。菜っ葉服を着たゴマ塩頭の痩せた年配の作業員らしい方が、毎日素うどんだけ注文されていました。ある日可哀相に思つて、素うどんの中にポンと卵を割つて入れてあげ、これはおまけですと差し出しました。栄養がなくては力も出まいと思つたからでした。

その方は食べ終わると、私の所に寄つてきて内ポケットから名刺を取り出し、私はこういふ者ですとおっしゃるので、その名刺を見ると、〇〇株式会社工場長の肩書きを持った方でした。私は飛び上がるほど驚き、失礼をお詫びすると、「いやいや、このうどんは実においしい。これからうちの工場の指定食堂にしましょう」とおっしゃつて下さいました。それからは、お昼時は悲鳴を上げるほどの忙しさでした。

こうして一カ月を締めてみると、一日も休まず働いていた月よりも、御言に従つて六日間働いて、日曜日は休んで礼拝を守つた月の方が、ずっと売上げが多くなっていました。

常識では考えられないことでした。神様の祝福は、マイナスもプラスに変えることができる。人間のソロバンに乗らない、それを超えた天国ソロバンがあることを、体験を通して知り、榎本先生のおっしゃつた意味がやっと分かりました。

このようにして店は繁盛していき、家賃もきちんと払えるようになった。

〈暢之の病氣〉

若干話は後先になるが、食堂を始めて間もない頃、三男の暢之が原因不明の病氣になり、商売の事に加えて心を痛めたことがあった。この事も神様の哀れみと癒しにより、無事通過させていただいた。母の証しを通して、主の奇しき御業を崇めたい。

お恵みで商いも軌道に乗るかに見えた時、好事魔多しの例に漏れず、悪しき音ずれを聞かねばなりませんでした。

中学生の暢之が、学校で倒れました。すぐに九州厚生年金病院に連れて行き、診察と検査をしてもらいました。

しばらく待っていますと、名前を呼ばれて診察室に行きました。医師はカルテを見ながら、「あなたが母親ですか」と尋ねられたので、

「はい、そうです」と答えますと、

「こんなになるまで、分からなかったのですか」と眉を寄せておっしゃいました。

「そんなにひどいのですか」。私は胸の高鳴るのを覚えながら聞きました。

「血液が人の半分もないのだよ。こんなになるまで放っておく人があるものか。すぐ入院させなさい」。

無情な母親だと言わんばかりです。とつさに返事もできず、当惑顔の私に詳しく説明され、絶対入院しなければならぬことを強調されました。すなわち、普通人の赤血球は一〇〇あるが、



息子の場合は四五しかないと言つのです。その貧血の原因がどこから来ているのか、内臓一つひとつ調べるのに三カ月を要し、治療はその後になる、いつ治るか尋ねられても予測がつかないほど、難しい病気であるとのことでした。

まず入院費のことが心配でなりませんので、恐る恐る一カ月どれくらいでしょうかとお尋ねしますと、三万円くらいあつたらよいでしょう、と無造作に言われましたが、私には頭をドカンとやられたような思いでした。

そんな事も知らずに、「すぐ事務室に行つて、入院手続きを下さい」とおっしゃいました。

足のよろめきを感じながら、待合室の椅子に腰を下ろして考え込んでしまいました。どの息子もこれまで病気知らず、この子は小学校六年間の皆勤賞をもらったほどの健康児でしたから、まさかこんな大病をするとは夢にも思いません。入院させねば死に至ることになるかもしれない。その弟の弘巳を死なせた経験がありますので、恐怖と恐れが広がるばかりでした。

青白い顔で私に寄り掛かっている子が、元氣なく目をつむっている様子を見ると、まるで死人のようです。出るのは、溜息ばかりでした。入院手続きをするにはお金はないし、さりとて帰ることもできず、途方に暮れておりました。たとえ、今十万円あつたとしても三カ月でなくなるし、それから何カ月したら治るといふ保証もない状態で、どうすればよいか頭を抱えて悩んでいました。

その時、「恐れるな、ただ信ぜよ」という声ならぬ声を聞きました。無から有を呼び出す神は、死人をも甦らす力をもつて、よく病気を癒すことができなさる。こうして下を向いていた私の心

は、神を見上げることができたのです。

私は、息子に信仰を持たせることに一生懸命でした。今までの主の御業を証したり、アブラハムの信仰などを話しているうちに納得してくれたのでしよう、帰ろうと言いだしたので、ホッとしました。三日分の薬も帰る途中の塵箱に捨てました。

翌日は聖日だったので、礼拝後、榎本先生から頭に手を置いて、神癒の祈りをさせていただきました。

「恐れるなかれ、ただ信ぜよ。見よ、我万物を新たにせん。彼言いけるは、すでに成れり。信じよ。受けよ」。

この御言を忘れることができません。

それから四、五日後のことでした。それまで人の肩に寄り掛かって歩いてきた息子が、一人で二階からトントンと降りているではありませんか。いつの間にこんなに元気になったのか、本人も気付いていないようでした。

余りに不思議で、本当に癒されたかどうか確認するために、再度病院で採血検査をしていただきました。すると、どうでしょう。赤血球が二倍になっているではありませんか。結局、入院もせず、薬も飲まず、何の治療も受けず、ただ教会で祈っていただき、御言を信じただけでしたが、全快しておったのでした。

この息子は、この事を通して神様が生きておられることを知り、それから信仰に励むようになりました。後に日曜学校の御用を兄と共にさせていただくようになり、生まれながらの性情性格

もすっかり新しくされ、日々精進している姿を見るたびに、主を賛美しております。

「恐れるなかれ、ただ信ぜよ」。ハレルヤ・アーメン。

このようにして暢之は、学校も長期欠席することなく無事卒業し、高校へ進学することができたのである。同じ年、次男の隆士が高校を卒業した。大学へ行きかけたようであるが、まだそれができるような経済状態ではなかった。それで就職することにして、一流銀行の入社試験を受けた。一次試験に合格し、福岡の支店の偉い人が家庭調査にきた。

その人が息子さんは試験の成績がとてもよかった、でもお宅の飲食店という商売がどう影響するかですねと言うので、母は、うちはお酒も出していない真面目な食堂ですと必死で説明し、その人もするように上申しましょうということであったが、結果は不合格であった。期待していただけに、商売による差別のショックは大きかった。隆士は初めて味わう挫折感を乗り越え、地元の信用金庫に就職し、同時に専門的学力を付けるべく八幡大学夜間部に入學した。「人の歩みは主によって定められる。主はその行く道を喜ばれる」(詩篇三七・二三)とあるが、この事もまた、後に道が開ける分岐点となった。

さて、食堂の方はその後も順調に売上げを伸ばしていった。別の会社から弁当の注文も入ったりしたので、仕込みで朝から忙しかった。父は若い頃、石田旅館で働いていた経験があったのと、もともと料理することが好きであったので、張り切って頑張っていた。しかし体があまり強くない父は、疲れて寝込むことがあった。そういう時は、母が一人でやらなければならなかった。幸

い私の勤務先が近くて走れば五分くらいの所にあつたので、昼休みに走って帰り茶碗洗いなどを手伝っていたが、母の頑張りには頭の下がる思いであつた。しかし、商売が順調にいくとともに、母はこれに熱中していったのかもしれない。神様は母を靈的な恵みに導くため、もうひとつ大きな試練の中を通された。

### 〈大やけど〉

強いといつても母も人の子である。朝早くから夜おそくまで休む間もなく働き続けた無理がたつたつて、ある日調理場でめまいがして意識を失い、倒れてしまった。倒れたところが悪く、うどんを温めるためにお湯をたぎらせている釜の上であつたため、熱湯をもろに浴びてしまった。一九六三（昭和三八）年二月二十日のことである。

詳しいことは、母の証しをもって紹介したい。

### 慰め主

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである」（第二コリント一・三〜四）

それは夢であつたか、まぼろしであつたか知りませんが、雲の上に乗って天国指して昇ってい

ました。きつと召天した弘巳ちゃんに会えるだろう、そう思うとうれしくてたまりませんでした。すると、誰かが私を呼んでいるように思われました。注意深くその声を追っているうち、だんだん大きくなって、耳元ではつきり、「おかあさん！ おかあさん！ 死んだらいかんよ！」。主人が泣いて叫んでおりました。その声に、私は我に帰りました。

その時、両足を切られたような痛みを覚え、思わず「痛いー！」と叫びました。すると主人が「痛いはずだよ。大火傷をしたのだから」と言いましたが、私にはその覚えがありません。

どうして火傷などしたのだろう、一生懸命思い出そうと考えてみました。仕事をしていて胸がキリキリ痛み、少し横になりたいなと思いましたが、使用人もいませんし、二人だけの商売ですから、私が休んだらどうなる、そう思って頑張っているうちに、フワリと自分の体が浮いて、その苦しみから解放され、すばらしい世界に入れられたようになったのでした。しかしそれは私の心情であって、現実は無意識不明になって倒れたのでした。

そのまま天国に行かれたら最高の人生になるところでしたが、まだまだ私に使命が残されていたのでしよう、天国中途から呼び戻されてしまいました。

火傷の状態は目も当てられぬ程の惨状です。両足は付け根の所から足先まで完全なところがなく、屠殺された牛肉のように赤肉が飛び出し、脈拍も欠滞して、もう少して命を取られるところでした。雫の垂れるスカート脱ぐこともできず、上から下までハサミで切り離して脱がし、着替えることもできないため、上から覆ってもらっただけでした。自分では気丈夫なつもりでも、痛みが激しく、耐えることができませんでした。

主人が電話をしたとみえて、長男が役所から駆け付けて来ましたので、牧師先生に電話を掛けるように頼みました。その返事が、先生は学校に行ってお留守とのこと、力が抜けていくのを感じました。来て祈っていたら、少しは楽になるだろうとの希望も断たれ、布団を被って泣きました。

「祈りなさい！」そういう御声を聞きましたが、痛さを耐えるだけで精一杯ですから、祈れませぬ。ただ、「イエスさま」「イエスさま」と叫ぶだけです。布団の中は暗闇です。私の心も暗闇でした。

ところが、私の目の前にパツと光るものを見ました。その瞬間、主の十字架を思い出しました。それつきり、あれほど痛んでいた傷が癒されたことを直感しました。見たところの傷は少しの変化はありませんでしたが、痛みはほとんどなくなりました。もう嬉しくてうれしくて、小踊りしたいくらいでした。

「この苦しむ者が呼ばわったとき、主は聞いて、すべての悩みから救い出された」（詩篇三四・六）。主はこのような賤しい者の祈りを聞いて下さり、私の重荷をすっかり取り去って下さいました。祈りは口に出ませんでした。隣れみに富み給う主は、私のすべての罪、咎、重荷を十字架の上に負わせ給いました。何たる慈しみでしょう。涙が込み上げて来て、思わず声を上げて泣きました。

ああうれし我が身も 主のものとなりけり

浮世だにさながら 天つ世のこちす

歌わでやあるべき 救われし身の幸



火傷当時の母

たたえでやあるべき 御救いのかしこさ (讚美歌五二九番)  
いつの間においでになつたのか、私の枕元で牧師先生が長男と讚美歌を歌っているではありませんか。それに気付くと、また泣く始末。ややあつて、讚美歌の三番が歌われる頃には私の心も治まって、一緒に

胸の波収まり 心いと静けし

我もなく世もなく ただ主のみいませり

大声で合唱致しました。

歌詞そのままの境地にまで恵まれて、先生も共に喜んで下さり、共に讚美の渦でございました。牧師先生がお帰りになって、やっとお医者さんが来てくれました。火傷三度、深い所は四度、すぐ入院しなさい、皮膚移植しなければ歩けないだろうとおっしゃり、注射と応急措置だけして帰られました。

その後で、長男が私の顔を覗き込みながら、「お母さん大丈夫、歩けるようになるよ。必要なら僕の皮膚を上げる」と言います。私は主にあつて全き平安を与えられておりましたので、少しも自分の事では心配しませんでした。長男の心情には泣かされました。

しばらくして、教会の方達が伝え聞いてお見

舞いに来られました。偶然と申しましようか、吉田先生もおいになつて驚かれたようですが、私が喜んでお証をしますので、ともに感謝を致しました。先生からは折り返しお手紙を下さり、それには和歌まで添えてありました。

「◎ 主イエスの 御苦しみに あやかりぬと

大やけどをも 感謝する君

◎ 信仰は くすしきかな 大やけど

身に負えどなお 主を崇えいる

◎ やけどして 知りきと言いぬ 主イエスの

釘もて裂かれし そのみ痛みを

◎ 大やけど 身に負いし日に 背の君の

愛を新たに 知りまししとぞ

『神の栄光の勢威に随ひて賜ふもろもろの力によりて強くなり、凡ての事よろこびて忍び、かつ耐へ』(コロサイ・十一)。

苦しみながら、呻きながら、忍ぶでもなく耐えるでもなく、喜んで忍び、かつ耐えて行くことのできるとは、何たる幸福、何たる感謝。主もまた非常にこれを嘉し給うて、私どもの願うところ、求めるところ、望むところに勝ることを成して下さることを、しばしば経験させていただくことでもあります。

『主は我らのために命を捨て給えり』。嗚呼、何たる愛かな。この汚れたる私、愚かな私、弱い



私のために主は最高最上のものを与え給いました。

正野さん、多忙な仕事から暫し離れ、『汝、静まりて我の神たるを知れ』静かに主を思い、貴い時を与え給うとは、何たる感謝でしょうか……」。

恩師の手紙を何度も何度も咬みしめながら読み、アーメン、アーメンと、この恵みの時、救いの日を感じました。病床にあること一年半、聖書を読み、主の恵み深きを味わい知る、最もよき時でございました。

母は十七日間だけの入院で退院し、後は薬をもらって自宅療養をすることになった。入院しなくても神様が癒して下さるという信仰によるものであった。しかし、まだ傷は深く痛みがあり、歩ける状態ではないので、止むなく幼稚園に勤めていた姉を辞めさせ、手伝わってもらうことにした。そして母は誰はばかることなく、聖書を読み、祈りに没頭することができたのである。

確かにこの一年半余りの時は、母の信仰を整えるために神が備えられた時であった。この間、多くの方々が見舞いに訪れ、母のあかしを聞いて恵まれて帰っていかれた。その中には、以前の教会の方で、複雑な家庭問題のために悩み、それがために胃潰瘍になり、すぐでも手術しなければならぬが、入院の費用がないと泣いて話された婦人の方がおられた。母は聖霊に導かれながら、自分の証しをもって励まし、「信ぜば神の栄光を見るべし」、神様を信じましょう、神様は必ずあなたの病を癒されますと勧めた。その方は目を輝かして「肩の重荷がすっかり取れました。信じます」とおっしゃって、共に祈って帰られた。果たして、一ヶ月後にその方が来られて、あ

の時から胃の調子がよくなり、何を食べても何ともないので、レントゲンで診てもらったらずかり癒されており、医者も不思議がつていたとの感謝の報告であった。その後、その方の家で家庭集会が開かれるようになったとのことである。このような事もあって、母はやがて仕事から解放されたら、福音伝道のために働きたいという願いを持つようになり、そのために祈るようになった。

もうひとつ、この時は姉にとつても貴重な時となった。福岡にいる時は教会に近づく機会が少なかったが、郷里に帰ってきて、日曜礼拝は勿論、早天祈祷会にも出るようになった。そこできことばの養いを受けたことが、後に結婚して遠くへ行き、靈的な教会のない中に置かれても、信仰から離れることがない土台となった。その陰には、母の祈りと毎週のように送られてくるみことばの手紙があつたことを忘れてはならない。

手紙の事のでに記すと、隆士は夜間大学の四年間が終了した一九六四（昭和三九）年に、自分の力を試したいと勤めを辞し、東京へ出て河合楽器のセールスマンになった。給料が保障されたこれまでと違い、楽器を売らないと生活ができない厳しい世界である。多くの社員は一年も経たない内に行き詰まって、酒や女に溺れるようになるそうである。それだけに弟の戦いは激しかったと思う。母は日夜このために祈り、三日空けずに手紙を出した。心身共に疲れて寮に帰つても誰も迎えてくれる人もない味気ない砂漠のような所で、故郷の母の手紙は真清水を得たようなものだったに違いない。洗礼は受けていたが、それほど熱心でなかった弟が教会に行くようになり、そこで主に出会ったのである。今、ミサワホーム岡山の社長の傍ら教会の役員として奉仕

し、自宅にチャペルを建てて集会を開いている。

今日、私も人の親となり、子どもは各地に離れているが、母のようにこまめに手紙を出す真似はできない。母の私たちに対する愛情がどれほど深いものであったか、陰にあつてどんなに心血を注いで祈ってくれていたか、私たちが今日あるのはそのゆえである、と今にして感謝するのである。

### 〈父の信仰告白〉

母の魂が恵まれてくるとともに、その一つひとつが毎日持たれる家庭礼拝で語られた。私たちは決して喜んで出席していた訳ではなく、母に引つ張られて出ていたようなものであるが、その中で信仰が養われてきたといつてよい。家庭礼拝は食堂の営業が終わった九時頃からやっていた。その頃は、父は参加していなかった。父はその日の営業が終わると、それから按摩に行ったり、喫茶店にコーヒーを飲みに行ったりするのを楽しみにし、時間を潰していた。いつだったか、母が火傷を負う前だったか後だったかはつきりしないが、ある時父が参加した。母が誘ったか、自分で出たのか、それもはつきりしないが、その時父が初めて自分の胸の内を打ち明けた。自分は以前から家庭礼拝に出たいと思っていた、みんなが二階で歌を歌い、楽しそうに語り合っている声が聞こえると、自分だけが取り残されたようでとても淋しかった、父親の見栄のようなものがあつてなかなか言い出せなかった、自分もみんなと同じように神様を信じていきたい…そういう内容だった。これは父の信仰告白とも言えるものであった。父がそこまで考えているとは誰も気

付かなかった。思わずみんなで拍手したが、その時の父の嬉しそうな顔を忘れることができない。その日ばかりは父が主役であった。以来、父の株が急上昇していった。家拝に参加するほか、礼拝にも出席するようになった。

父が洗礼を受けたのは一九七三(昭和四八)年四月であるから、信仰が確立するまでには日時を要したが、主はやがてカナンの地(岡垣町)での生活のために備えをして下さっていたのである。

正直言って、私たちの両親は仲が良いのか悪いのか、心配したくなるほど夫婦喧嘩という口口喧嘩をよくしていた。婦唱夫随の逆転夫婦であったから、女としての弱さも持っていた母にしてみれば、もっと頼り甲斐のある夫であってくれたらという思いがあったと思う。そういう意味では、決して理想的な夫婦でもないし、むしろ平均点以下だったかもしれない。しかし、一緒に聖書を読み、祈ることができるようになって、母はどんなに喜んだか分からないし、父に対して従順になってきたように思う。

### 〈教会での母〉

教会における母の思い出は、礼拝でよくお祈りをしていたことと、婦人会や年末感謝会の時に長い証しをしていたことである。そういう意味では、何事も物おじしないで積極的であったし、真面目に取り組む性格であったと思う。その証しも生活の中での生きたものであったので、長さを感じさせないものが多かった。

また、教会誌「ぶどうの木」によく投稿し、病気で書けなくなるまでほとんど欠かさず出して

いたようである。

一九七四（昭和四九）年四月、私たち一家が転勤で東京へ行った後、私のピンチヒッターという形で日曜学校の奉仕をしばらくしたことがある。ここでも母のあかしが泉の如く次々と語られたから、生徒は結構おもしろかったのではないかと思う。

クリスマスの思い出としては、クリスマスキャロル隊が我が食堂に立ち寄った時、父が作った温かい飴湯を飲んで冷えた体を温めるのが慣例になっていた。また、いつのクリスマスだったか、中央公民館で行なわれた祝会で一家総出演したことがあった。母が作った詩を三橋美智也の古城の曲で母と私たち姉弟が歌い、父が着物を着て踊り、拍手喝采を受けた。父の得意満面の時の思い出である。

### 〈長男からの自立の問題〉

さて、ここで私長男と父母との将来に関わる問題について触れてみたい。私も二七歳になり、結婚を真剣に考えなければならぬ年齢になった。私が結婚すれば両親に少なからず影響を与えることになる。その時、年取っていく両親をどうするのか、どうなるのかという問題である。この問題について、私は聖書を通して教えられていたので、いずれはつきりさせておかなければならないと思っていたが、ある時それを両親に持ち出したのである。両親は考えても見なかったことなので、相当なショックを受けた。特に母にとつては大きな問題であったようである。しかし、母は苦悩の後に、信仰によって立った。それは母にとって、それからの信仰の在り方や人生の歩

みを決める転機にもなったと言えるものであったが、残念なことにこのことについての証しが見当らない。

幸い私の日記にその事が記されているので、抜粋しながら紹介したい。まだ結婚相手も決まっていなかった一九六五（昭和四十）年十二月のことである。

先週の月曜日であったと思うが、以前から考え、また話さなければならぬと思っていたことを、両親に打ち明けた。

それは私の結婚の問題である。結婚の正しい意義は、「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」（創世記二・二四）の御言に集約されるような気がする。特に「父母を離れて」ということに注目した。「離れて」とは独立することである。すなわち、子は親から離れて独立をする。親も子供を手放す。この両方がないと真に「離れて」ということにはならない。人は結婚して子を生み、これを育て、一人立ちできるようにすれば子は親を離れて独立していき、親は衰えて行く……こう書くと随分非情で厳しいようであるが、神様が定められた人間の道ではないだろうか。

子供は神様から預かったもの、一人前になるまでは責任もって育て、成長したらその子は神様にお返しして、自分はまた新しい使命に生きるべきと思う。勿論、親にして見れば、それは厳しい事に違いない。しかも自分は体力的にも衰えていくのである。老後は子供に頼るのは当然であろう。また子供も独立するのだから親の面倒を見なくてよいというのではない。育ててもらった

恩があり、神様の御用として親の面倒を見るのは当然である。私が両親に話したかったのは、面倒を見るとか見ないとかではなく、基本的にこれまでの親子関係ではなくなるのですよということである。

ここが曖昧になっているから、嫁姑問題も起きてくる。

正直なところ、私は母については信仰があるので、分かってくれると思っていた。父はまだそれほど信仰がないので、店を辞めたら私を当てにして、その上に自分の老後の設計を描いているに違いない。世の中ではそれでよいかもしれないが、折角の人生を隠居なんかして、まるで人生の卒業生みたいな生き方よりも、もつとすばらしい、神様の使命に生きる道があるはずだ。父にその方向に進んでもらいたい。私みたいなものに頼って生きなきゃならないなんて、危ないことこの上なしだ。それよりも全能者に信頼するほうが、どんなに幸いかわからない。

それで私は父に切り出した、「お父さん、子は親の面倒を見るのは当然と思えますか」。

父は少し険しい顔付になって、「それは当然だ」と答えた。そして、「お前の言うとおりにするなら、我々は衰えて死ぬほかない。お前は若いから分かるまいが、お前の言うことができるかどうか、とても耐えられるものではないぞ」と言う。

しかし、私は答えた、「お父さんが当たり前というなら、きつと失望する時があるだろう。お父さんは息子のためにこれだけしてやった、これぐらいしてもらうのは当然と言ってきてても、僕は応えられない時が多いと思う。何故なら、僕は僕で新しい家庭を築くために精一杯で、心はそちらに向いているだろうから。その時、お父さんは失望し、淋しく思うだろう。僕の嫁さんはお父

さん達の築いた正野家に来たのではなくて、僕と一緒に築く新しい正野家に来るのです。かと言って、僕は別居を希望するとかお父さん達を見ないとか言っているわけではありません。ただ僕は、極端に言えば、お父さん達よりも嫁さんの方を大切にします。これは神様の道に適っていると思うのです」。

よその子ならまだしも、うちの従順でおとなしいわが子がこんな激しいことを言おうなどとは、夢にも思わなかつたらしい。父はもとより、母の方が相当のショックを受けたという。母はその夜は眠ることができず、一晚中祈つたらしい。

そして四日目に、「己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我がために、己が生命をうしなふ者は、之を得べし」(マタイ十六・二五)の御言が与えられて、自分がイエス様を信じていると言いなながら、実際は息子を頼りとしていたことを示され、これからは主のみ従うべきこと、息子が一人立ちして親許を離れるのは喜ぶべきこと、それは神様の前に責任を果たしたことであり、神様から善かつ忠なる僕よとお褒めの言葉をいただけること、これからの生涯も一切を主に委ねていけば、主は決して捨て給わず、すばらしい人生が開かれること、新しい使命に歩むべきであることを教えられたという。

大きな戦いだったろう。だが母はすばらしい信仰が与えられた。

この証しを聞いた時に、私は神様が私のために道を備えて下さったことを覚えて、感謝した。と同時に、信仰によってこの人生の大きな課題を乗り越えた母を、羨ましく思った。



以上がその内容である。今にして思えば、私も随分きついことを要求したものである。しかし母はそれに応え、私たちに信仰の良き足跡を残してくれた。私も間もなくその課題に直面する年令に近づこうとしている。果たして、母のように乗り越えることができるか。

### 〈仕事からの解放〉

神様の不思議な導きにより、一九五九（昭和三四）年に黒崎で食堂を始めて八年になろうとしていた。その間に三男の暢之は高校を卒業して日活ホテルのコックとして働くようになり、次男の隆士は東京へ出て行き、姉は一九六四（昭和三九）年に結婚して鹿児島へ、私も一九六七（昭和四二）年五月に結婚して別所帯となった。

子どもがそれぞれ独立していき、家の中は急に淋しくなった。それまで子どものためと頑張って来た両親も、張りがなくなってきたのかもしれない。それに父はもうすぐ還暦を迎える歳になっていた。

私が結婚して間もなく、父がもう疲れた、この歳になつて働きたくないと言ひ出した。母も、余り強くない体でこれまでよく働いてきましたと父の労をねぎらい、もう長くもない人生を少しは楽しみましよう、食堂を止めることになった。急な話で私もびっくりしたが、父母のためにはそれがよかろうと賛成していた。しかし、今後の生活はどうするのだろう。まだ遊んで暮らすほどの貯えがある訳でなし、さりとて私たちに養うだけの力もない。そうこうしているうちに、食堂の権利が売れて譲つたので住む所がなくなつたと言つて、私たち新婚のアパートに暢之を含

む親子三人が入り込んだ。

聞けば、どこで聞きつけたか、息子夫婦にやらせたいのでぜひ譲って欲しいと言われる人がいて、道具一式電話も付けて、これこれならということまで話がまとまり、明日からでもやりたいと言うので、とにかく家財だけは置かせてもらおう約束で出てきたのだという。無茶な話である。当面は止むを得ないとして、今後どうするか、それから連夜の家族会議であった。

そして得た結論は、両方が資金協力して家を建てて一緒に住もう、生活費は私たち夫婦が共稼ぎして得る、その代わり子どもができた時は面倒を見てもらうということであった。実は土地については、一九六五（昭和四十）年十月頃、特に当てがあつたわけではないが、将来のために買つておこうと共同出資で取得していた。それには、次のようないきさつがあつた。私の日記から紹介すると、

「土地を求めて三千里、折尾方面から上津役方面へ母と二人で歩いたが、場所と値段が折り合わなかつた。結局、教会からどんどん遠くなつていったが、鹿児島本線沿いの水巻町、遠賀町を過ぎ、とうとう岡垣町まで来てしまった。ここで母ははからずも旧知に何十年ぶりかで出会つた。この岡垣町は祖母シカの郷里であり、母にとつても思い出深い土地である。母と会つたその人は、私たちが土地を探していることを知ると、自分は今不動産の仕事をしている、手数料なしで世話してあげようと言われた。そして世話して下さつた所が、また遠い親戚にあたるとかで、他の人では絶対に売らないのだがと言いながら、坪六千円の格安で一三〇坪を頒けて下さつた。やはり祈りは聞かれると思うのである」。ここは海老津駅から徒歩約十分の所にあり、まだ小高い山のま

までであった。造成費にどれくらいかかるかなと思っていた矢先、周辺を買収した不動産会社が、裏の谷を埋めるのに自宅の山の土をもらえないかと言ってきた。願ったり叶ったりである。ただで造成ができてしまった。神様のなさることは実に不思議で、時に適いて美しい。周りの石垣をするだけで、立派な住宅地になった。このようにして神様は土地を与えて下さった。

早速、設計に取りかかった。土地代を払ったのでお互いの貯金は残り少なかった。私は勤め先から借りられるだけ借りたが、十分な予算は取れなかった。そのため、最低限の安普請の家しか建てることができなかったが、私たちにとってはそれでも御殿のようであった。一九六七（昭和四二）年十月に着工、翌年一月完成、一月八日に両親と暢之、それに私たち夫婦にやがて生まれる子供を含めた五・五人は、感謝しつつ新居に移った。



## 七 岡垣町時代（カナンの生涯へ）

思えば八年前、東郷町から何一つ持たずに黒崎へ移ったが、今は土地と住む家とが与えられるまでに神様が祝福して下さった。それだけではなく、信仰というすばらしい財産を与えられて、母にとって最後の嗣業の地、遠賀郡岡垣町海老津に導かれたのである。

それは、「わたしは、つえのほか何も持たないでこのヨルダンを渡りましたが、今は二つの組にもなりました」（創世記三二・十）と、二十年ぶりに故郷に帰る時に主に感謝したヤコブを思い起させる。母もきつとこのような気持で神様に感謝したに違いない。この海老津時代は、これまでの生活の労苦から解かれ、靈的にも乳と蜜の流れるカナンの生涯であった。

〈岡垣町での生活〉

安普請の家とはいえ、新しい畳、芳しい木の香り。広い庭では花や野菜を作ることができる。一つひとつが神様の恵みを見るようであった。生活費は私たち夫婦の共稼で賄った。これまで苦勞してきた両親を見てきている私としては、今度は私たちが支えてあげよう、そんな思いが強かった。

七月には初孫が生まれた。母はそれまで孫が生まれても「おばあちゃん」とは呼ばせないと頑張っていたが、いざ生まれると何ら抵抗することなく、「おばあちゃん」を受け入れてしまった。昼間は父母に見てもらったが、ミルクをなかなか飲まないの、体重もあまり増えず、頭脳の発育が悪くなるのではないかと、随分心配したようである。育児を担当してみても大変さが分かってきたためか、いつまでも息子夫婦に頼つてもいけないと考えたためか、収入を得るためといって、中古のアパートを購入した。これは借地で建物の代金だけであるので非常に安く、ほとんど銀行からの借入で買い、家賃収入全部を注ぎ込んで短期間で返済できた。この点は長い間商売をしてきた経験からか、目の付けどころが的確で、決断も行動も早かった。

私も同居してみても、自分が考えていたことと違ってきていることに気付いた。それは母にこれからは神様に思い切り従ってほしい、人間として高尚な生涯を歩んでほしいと願っていた。その一方で両親を支えると言いながら、母に育児を押しつけている。生活のためとはいえ、これは間違っている、何とかしなければと思っていた。そこでアパートの返済が終わり、父母が何とかやっつけていける収入が得られる道が開かれたことを機に、私たちが別に家を借り、別居することにした。このようにして、神様は両親が何一つ束縛されることなく、神様に従えるようにすべての点で整えて下さった。しばらく同居した事も、決して無駄ではなかったのである。後に母は、別にもう一軒比較的まだ新しい八世帯のアパートを購入した。この借金返済が終った時、両親が生活するには十分過ぎるぐらいの収入が与えられるようになった。

#### 〈家庭集会〉

家庭集会を開くことは母の以前からの願いであり、祈りであった。家が建って生活が落ち着くと、早速榎本先生にお願ひして月一回の家庭集会を開くことになった。母は育児の傍らトラクトを近郊の家に一軒一軒配布し、集会の案内をして廻った。母には、「わたしは福音を恥としない」(ローマー・十六)という気概があった。その中からポツポツと新しい方が見えるようになった。それにS姉、N姉など、岡垣町に住んでおられる信者で、八幡の礼拝に出られない方たちが喜んで出席されていた。

そして育児から解放された時から、もっぱら祈りとみことばの御用に専念することができるよう

うになった。以後のことは母の証しを掲載する。

「お母さんは子守なんかしないで、高尚な生活をしてもらいたい」とは、かねてから長男が言っていたことであり、私の願いでもあった。

すべての事に時がある。私達夫婦の自活の道が開かれ、昨年春に孫の子守とアパート購入の借金から解放され、晴れて自由の身となった。

「あなた方のうちによき願いを起こさせ、これを実現させてくださるのは神である」(ピリピ二・十三)。

私達の願いがかなえられたのである。

牧師先生にもお祈りしていただいていたが、ある日、こうおっしゃった、

「これからこれまでの月一回の家庭集会を定期集会とし、毎週、野村先生にお願いすることになりました」。

そして、海老津伝道所「福音の家」として御用をするに当たつての教訓を与えて下さった。

一 集会は神の臨在する所である。家庭が聖別されるように努めること。

二 いつも「神の御旨は如何に」と、神に働いていただくこと。人間の業は負担になるばかりである。

三 「神の箱はガテびとオベデエドムの家に三か月とどまった。主はオベデエドムとその全家を祝福された」(サムエル記下六・十一)とあるように、必ずあなたの家に祝福がありますよ。

私は、このお言葉を心の碑に書き留めたのである。以来、私の心構えも違ってきたと思う。

これまで八回牧師先生に来ていただき、昨年八月十八日から毎週の定期集会となつて、今日まで、はや六十回を重ねた。

私は集会の記録をひもとき、主の恵みを数えてみることにした。

◎ 四四年八月二五日　丁姉感謝会

この方は、牧師先生のお話で恵まれ、最初に救われた家庭集会の初穂である。

この時の証しは、どこの病院にかかっても治らなかつた病氣（婦人病）が、教えられたとおりに心を注いで必死に祈っていた時、「心安かれ、汝の罪許されたり」の御声を聞いた途端、全く癒されたとその身に感じた、と満面喜びをもつて語られた。

◎ 次の集會にH姉が集會に導かれた。

◎ 九月一五日　丁姉が三人の新しい方を伴い来る。

◎ 九月二九日　また新しい方が求めて来られる。

◎ 十月六日　求道者のN姉、二年來の胃潰瘍が癒され、貧しい中から捧げられて、感謝会もたれる。

◎ E姉のご主人の転勤により、お別れの感謝会。

◎ 十月七日　丁姉とN姉から献金の申し出あり。思いがけないことであつたので、一度はお断わりしたが、強いて差し出される。神様への純真な捧げ物を断るべきではないと示されたので、共に献金のお祈りをして受取る。

◎ 十月九日から五日間、教会で松岡忠二郎先生による特別聖会があり、その後、家庭集會に導かれたM兄は出席するうち、すっかり変えられた。松岡先生も格別喜ばれた。十年間も精神病院に入っていたからである。「来たりて神の救いを見よ」。主の驚くべき御業よ、ハレルヤ！

◎ 十二月二二日 クリスマス礼拝と祝会

「すべての人を照らすまことの光があつて、世に来た」。

ヨハネ福音書の御言によつて、クリスマスの眞の意義が初めて知つたとおっしゃる方が何人かおられた。

そういう方もおられるだろうと思つて、聖誕劇を作つた。十二名の方一人ひとりのセリフを書いて役割を決めた。T姉は衣装を作つて下さり、天使の役を息子二人にさせ、セリフもちやんと覚えて見事に演じてくれたので、大いに引き立つた。

皆さんもぶつつけ本番だったが、一生懸命演じて下さつた。三人の博士は本物のようによくできた。野村先生も博士の一人になつていただいた。

観客は一人もないのに、皆さん初めてで、こんなおもしろいことはないと言つて喜ばれた。

◎ 四五年一月七日 集會三十回記念感謝會

F姉初めて福音を聞かれ、喜ばれる。この方はその後ノイローゼが癒されなかつた。

◎ 一月二八日 感謝會

T姉の息子さん、鼻の病気が癒され、また神の助けによつて、紙一重で交通事故から一家が守られたことを証しされた。



◎ 三月四日 一姉妹導かれる

主の選び給うた御方でしょう、以来渴いて喜んで毎週来られ、恵みに感じて得意のレース編みで集会室を飾って下さった。

◎ 三月二五日 集會案内の看板揭示

「姉、集會案内の看板をご主人に作っていただいて持参。牧師先生の許しを得て「来たりて見よ」の御言を書き入れ、集會日時を表示す。主は私の思いも及ばぬことを姉を通してして下さいました。」

小さな集いではありませんが、主の恵みを拾ってみると驚かされます。主は恵みを与えたくてたまらない御方、決して出し惜しみなさる方ではないことを知ります。

受取る側の方が整っていない。恵みと恵みの間に谷間がある。だから人間の力や行為ではどうにもならない問題も多々あった。そのたびに牧師先生始め多くの聖徒方に祈っていただき、その祈りに支えられて今日に至ったのである。

「目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている」。

主は生きていて、今に至るも働き給う。聖書の御言は真理であり、真実であった。罪に汚れし我さえ、主は愛して、御血をもってあがない、霊肉共にすばらしき生涯に入れて下さった。

それは何のためか、私が楽しみ遊ぶためか、さにあらず。滅び行く魂を愛されるゆえに、救霊の御用の端くれに使って下さるためであった。



海老津集会の皆さん 1976(昭和51)年5月

二十年前、神なんかあるかと敵対する私に、主ご自身が啓示して下さった、「神は愛である」と。「汝ら我を選びしにあらざ、我なんじらを選べり」

私を特選の民として選んで下さったのだ。どこに良きところありや。何も無い。あるのは罪だけである。なぜこのような者を選ばれたか、神は愛だからである。誰が何と言おうと、「神は愛である」。今日までそれだけを語ってきた。今後も語るであろう。一九七〇(昭和四五)年八月八日記

このようにして海老津集会はずっと続けられ、母もあかしの御用を、喜びをもってさせていただいていた。

#### 〈日曜学校教師〉

先にも触れたが、私たち家族が勤めの関係で一九七四(昭和四九)年四月から一九七七(五二)年十一月まで東京へ引っ越したので、その間、それまで私が担当していた日曜学校の西南中学クラスを母が受け持つことになった。この事も母にとってひとつの大きな恵みの経験だったと思う。

次のように証している。

「新米教師」

長男の嫁が、「お母さん、S姉の日曜学校のお説教を聞いたら、とても恵まれました」と言うので、次の週は朝早く起きて教会に参りました。分級は下の牧師館でやっているとのことでしたので、そちらへ下りていきましたら、牧師夫人に会いました。

「お早ようございます」と挨拶しますと、

「正野さん、眞宏さんが東京転勤なさった後、主人はあなたに御用していただくよう言っております」とおっしゃいました。

寝耳に水とは、こんな時に言うのではないのでしょうか。私は驚き、

「とんでもない。日曜学校の御用をしたことありませんし、年寄の出る幕ではありません。若い人にお願います」。

一生懸命お断わりしてましたら、私の言葉を聞かれたと見えて、障子が開いて牧師先生が出てこられました。そして、私の顔をじつと見つめるようにして、

「正野さん、私は祈って決めたのです。神様があなたに御用を命じられました」。

厳肅な雰囲気の中で体全体ピリツとしたものを感じ、「ハイ！」の一声で決まってしまいました。さあ大変、胸の中は不安でなりません。壁に向かって稽古してみました。一言いうと、もうつまってしまいます。自分の情けなさに悲しくなりました。

こんなはずはない。若い人ができるのに私にできないはずはない。長い間、息子達に説教して

いるのではないか、といくら言い聞かせても、人のいないところで言えない者が、人の前に立てばなおさらできるはずがない。

ふと、いいことを思いつきました。説教の筋道を組み立て、いつも行っている老人ホームで話してみよう。そう思つて、早速行つてみました。

海老津にある特別養護老人ホーム「恵みの家」には、身体障害者や寝たきりの人など介護を必要とする人達が沢山いました。そこで組み立てた説教をするつもりでしたが、精神的にも痛め付けられた人達ばかりで、それに身動きできない老人達を見ていると、死に対する不安そうな顔が哀れに思えました。思わず出た言葉は、

「イエス様は、私達のために十字架にかかられました。それを信じる人は罪が許されるばかりでなく、いつも私達と共におられて慰めて下さり、私達を天国まで引き上げて下さいます。私の息子は三歳で死にましたが、イエス様を信じていましたので、母ちゃん、イエス様が来なさつたと言つて、目を輝かして『母ちゃん、もうついでいいよ。僕、イエス様に抱かれていくよ。兄ちゃん、さようなら。姉ちゃん、さようなら』。喜び喜んで召天しました」。

こういふお話をしました。それは考えもしなかつたことで、予定していた説教とは全然違つたものでした。

一人のお爺ちゃんが泣き出しました。そしてこんなことをおっしゃいました。

「イエス様の十字架を中央に、両端に二人の強盗が付けられ、一人の強盗は、お前が神なら俺を助けてみよ、そしたら信じてやろうと言ひ、もう一人は自分達は悪い事をして当然の報いを受け

て死刑になったが、あなたは違う、あなたが御国に帰られる時、私を思い出して下さいと言いましたら、主は『あなたは今日、私と一緒にパラダイスにいるだろう』と。お爺さんはこう言うと、オンオン泣き出しました。

私がおおうとしていることを先に言われたので、驚いて「あなたはクリスチャンですか」と尋ねると、「いいえ、若い時に聞いたことがあります」と言われる。

この方はきつと選ばれた方に違いないと、その後も格別目を留めて伝道しました。その方は「私は信じます」とおっしゃって、間もなく天に召されました。八十歳になられたお爺ちゃんでした。私はやっと分かりました。説教は自分が作ったり、組み立てたりすべきものではなく、御聖靈の導きによつてさせていただくものであることを…。

それ以後今日まで、不思議なように主が語るべきことを次々と教えて下さいますので、楽しく語らせていただいております。人に教えるのではなく、自分自身が教えられ、恵まれて、有り難くて、全く教師として資格のない者が、恵みによつてさせていただいております。

生ける限り、健康が与えられる限り、続けさせていただきたく思っております。また海老津の地に日曜学校が開けるよう祈っております。

主の御摂理によつて、恵まれたS姉は三男の嫁となつて、今年から同じクラスで親子コンビで御用させていただくようになりましたことは、うれしいこととございます。生徒さん達が救われますよう、一人ひとりの名を上げて祈っております。

〈交通事故〉

神様は、「水に耐える者には水の中を、火に耐える者には火の中を通す」とおっしゃっておられるが、母はこれまで、何度も何度も火の中、水の中のような試練を通ってきた。けれども、母にはまだ聖別されなければならないところが残されていたのだろうか、それとも神様はさらに大いなる恵みの高みに引き上げようとして訓練をされたのであろうか、もうひとつの痛い試練の中を通らねばならなかった。一九七七（昭和五二）年二月六日早朝、日曜礼拝に行く途中で用事があつて黒崎で下車し、国道三号線と国道二〇〇号線の交差点を横断中、交通事故に会つた。

次のように記している。

交通事故に会つて

「わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしを永遠の道に導いてください」。

先月の二月六日午前七時四十分頃、黒崎の大通りを横断中、道の中央付近で前からグリーン色の乗用車が目に止まつたが、直進すると思つてみると、私めがけて右折してきたので、逃げる暇もなく激突されて、私はその場に昏倒してしまいました。

その時、気は確かでしたから、自分の過ちではなかつたかと思つて、頭をもたげて信号を見ると、青だつたのでホッとしました。

やがてその車から運転手が降りてきて、私を抱き起こすようにしながら「大丈夫ですか」と言つたので、「信号を無視して突っ込んで来て、何が大丈夫なことがありますか」と、つい怒りをぶつ

つけてしまいました。

「すみません」「すみません」と何度も頭を下げ、オロオロしているところに、三菱化成の工員さんが駆け付けて来て、ここは危ないから道の端に移動させようとおっしゃって、運転手と二人で私を抱えて家の前に置き、近くの電話で手回しよく、救急車や警察署、そして私の家まで連絡して下さいました。

救急車で病院に運ばれてレントゲン撮影の結果、第三脊椎圧迫骨折・腰椎骨折、全治四カ月の診断を受け、それから約一カ月間、入院生活を強いられました。

私は一生のうち滅多にしない大怪我を、一度ならず二度もしましたが、最初の下半身大火傷の時は、主が目の前に十字架を現し給うて、その場でお癒し下さったので、今度も主は直ちに栄光を現してくださいさるとばかり信じておりました。

しかしこの度は、呼べど叫べど何の応答もなく、痛みは激しく、熱は上がり、局部は腫れ上がって身動きもできません。こんな状態で二日二晩一睡もできず、火炎に悶える地獄もかくやあらんか、と思うほどの苦しみでした。

私は耐えかねて、

「主よ、なぜ私の祈りを聞かれられないのですか。サタンはこの時とばかり私を責め立てきます。どうぞ、お助け下さい」と訴えました。

その時、主は漸くお応え下さいました、

「子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり」(マタイ九・二)

「イエスの血、すべての罪より我らを潔む」(第一ヨハネ一・七)

「なんぢの咎を雲のごとくに消し、なんぢの罪を霧のごとくちらせり。なんぢ我にかへれ我なんぢを贖ひたればなり」。(イザヤ四四・一二)

次々と御言を与えて下さいましたので、それによつて全き平安に満たされました。

私は、自分の祈りが聞かれていないとばかり決め込んで泣き叫んでいましたが、思い違ひだったことを知らされました。もし二日間も一睡もしていないならば、普通だったら頭痛でガンガンする筈なのに、そういうこともなく、気分も爽快でした。

「耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることが出来る。…ダビデに約束した変らない確かな恵みを与える」(イザヤ五五・三)

このイザヤ書の御言を思い出しました。そして、「主よ、私の使命は何であるか、教えて下さい」と祈つて、聖書を開きました。与えていただいた御言は、

「すべて神がなさる事は永遠に変わることがなく、これに加えることも、これから取ることもできない。神がこのようにされるのは、人々が神の前に恐れを持つようになるためである」(伝道の書三・十四)でした。

不思議なことに、その翌日、千葉にいる長男の嫁百合子さんから、同じ御言が冒頭に書かれた手紙が届いたことでした。

私は、これはただ事でないと思って、もう一度聖書を開いて読み返しました。

「神がこのようにされるのは、人々が神の前に恐れを持つようになるためである」。



それでは、私は神を畏れない者なのだろうか。そんなことはない、と否定をしたものの、否定できない事実を示されたのでした。

事故に会った日が聖日で、礼拝に出るために家を出たのですが、その前に用事を済ますため二時間半も早く出ました。そのことについて御聖霊は、礼拝は霊とまことをもってなすもの、世の用件を先に済ませてから礼拝へでは、それで霊とまことをもって近づく礼拝と言えるだろうか…と、問いかけられたのでした。

その事はよく分かりました。

けれども、「すべて神のなさる事は…これに加えることも、これから取ることもできない」とは、どういうことなのか、どうしても分かりません。是が非でも知りたい。そう思つて、切実な渴きをもつて「主よ、真理を教えて下さい」と祈りました。すると、

「それは時の満ちるに及んで実現される」計画にほかならない」との御言が与えられました。それはエペソ書だと思つたので、早速聖書を開いてみました。

「それは、時の満ちるに及んで実現される」計画にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあつて一つに歸せしめようとされたのである。わたしたちは、御言の欲するままにすべての事をなさるかたの目的の下に、キリストにあつてあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである」(エペソ一・十―十一)。

読んでいる内に、こんな尊い身分とされている事を新しくされ、ありがとうございますと申し上げた時、主はさらに細き御声をもつてテモテ書をお示し下さいました。

「そこで、わたしの子よ。あなたはキリスト・イエスにある恵みによって、強くなりなさい。…キリスト・イエスの良い兵卒として、わたしと苦しみを共にしてほしい」(第二テモテ二・一〜三)。主は、低い低い所で満足している私に対し、妬けるような御思いをもって、迫って下さいました。

その時、先に牧師先生がお見舞いにきて下さって、手を置いて祈って下さった時の御言を思い出しました。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」(第二コリント五・十七)。

そうだ、義人は信仰によって生きるのだ。見えるところで失望することはない。「信仰に始まり信仰に至らせる」(ローマ一・十七)、すべて信仰でなくてはならない。だから、十字架が立てられたのだと、私のために死んで下さった御方を見上げました。

「わたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。…もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」(第二テモテ二・十一〜十三)。

私は弱くとも、不真実であっても、イエス様は常に愛に満ち、真実な方であり、全責任を持って下さる御方であるから大丈夫。アーメン、アーメンと心から御言を受け止めさせていただきました。生きるも死ぬるも、主のための生涯、私は真に主のものでございます、とお答えできるようにせられました。それは、何と爽やかなことでしょうか。入院中の身なれど…。(五二・三・二六記)

このようにして、母は病床の中で整えられていった。それは、ヨブが火のような試練の中で、「彼がわたしを試みられるとき、わたしは金のように出て来るであろう」（ヨブ二三・十）と証したことを思い起させる。さて、病状のその後のことについては、別なあかしで次のように記している。

信ぜば神の栄光を見るべし

骨折の方はまだ十分な状態ではありませんでしたが、病院にいても特に治療があるわけでもありませんので、早めに退院しました。

退院してすぐ、集会で神癒感謝会をしました。私としては、このまま順調に回復すると思っていました。が、六カ月経つても良くなりません。人並みに後遺症の苦痛を舐めなければならぬとは、夢にも思いませんでした。

骨折した箇所だけでなく、事故と関係のない方の肩まで焼き付いたように痛くなり、自由が効かず、着るものまで手伝ってもらわねばならない不自由さで、寒くなるにつれて全身がズキズキと痛んできます。これでもか、これでもかと火矢を持って打ち込んでくるようで、たまりません。あると思っていた信仰も、神癒の喜びも失せ、悲しみに魂はうなだれて力なく、望みも絶え果てようとした時、

「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。

神を待ち望め。わたしはなおわが助け、

わが神なる主をほめたたえるであろう」(詩篇四二・五)。

ダビデのこの詩を思い出して、失われた信仰を取り戻すことができました。

いつまで経っても、幼稚なままで大人の信仰になれない、主のお痛みが手に取るように分かって参りました。私にとつて災いと思うようなことも、主の恩寵であり、神の愛から出ていることを知りました。ひとり子を賜うほどに愛してくださいました方が、御子のみならず万物を賜らないことがあるのか、主の愛がひしひしと迫って参りました。

そこで、もう一度癒しのために祈りました。

「われ汝に、もし信せば神の栄光を見んと言ひしにあらずや」(ヨハネ十一・四十)。

「それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救はるる我らには神の能力なり」(第一コリント一・十八)。

次々に御言が与えられ、神においてはどんなことでもできないことはない、との信仰が与えられました。

それまで、家では痛みのために何一つできませんでした。

しかし、癒されたと信仰を持って、朝起きるとまず洗濯をしてみました。水だけは汲み入れてもらつて、すすきなどをする、できました。

「主よ、癒していただいたおかげで、お洗濯させていただき、感謝いたします」。三男の嫁も喜び、私もうれいのです。そのうちに、水も汲み入れることができるように強められました。やればできるのです。不思議なことに、痛みまでも癒されていました。

教会に通うのに、駅までタクシーを使っていました。歩けば十五分くらいですが、最後の五十メートル程の急な坂道が登れそうありません。そこで、毎朝散歩に行き、近くの神社の階段を登ることにしました。

一段一段用心しながら上がります。十段も登ると、もう息はずみ、足は重くて上がらなくなります。一休みして、また挑戦。何度も休んでやっと登りつめた時、冷たい朝でしたが、汗ばんでいました。

この神社は荒れ果てて屋根から空がのぞいていました。ここなら誰も来ず、静まるには一番良い場所です。自分勝手な体操をした後、下界を眺めながら、讚美歌「いつくしみ深き友なるイエスは…」を歌っていると、主の十字架は私のためであった、主の御愛がひしひしと迫ってきました。自分がどんなところから救われたのか、それは尋常一様のことではない。主の犠牲の御愛を思う時、「我は何をなすべきかを知らず」御名を汚すことしかできない私、ただただ罪を悔やむのみです。

私は、こうして主を讚美しながら、毎日石段登りを続けました。そして、この八十段の石段を休まずに登り切ることができたのです。感謝でたまりません。

その日は聖日でした。駅まで行くのにタクシーを使わず、人の手も煩わせず、杖もつかず、祈りつつ主と共に歩いて行きました。

まことに主は、信ずる者と共にいまして、栄光を現わして下さいました。あの第八胸椎骨折、第三脊椎圧迫骨折、骨盤骨折と骨格の一番大切な所を三ヶ所も骨折し、人間的には元の体には戻

れないと思われたこの体を、完全に癒して下さいました。

主は、ほむべきかな。「汝、もし信ぜば、神の栄光を見るべし」。まことに御言は、主御自身であることを知りした。

「来て、神のみわざを見よ。

人の子らにむかつてなされることは恐るべきかな。…

もろもろの民よ、われらの神をほめよ。

神をほめたたえる声を聞えさせよ。

神はわれらを生きながらえさせ、

われらの足のすべるのをゆるされない。

神よ、あなたはわれらを試み、

しろがねを練るように、われらを練られた。

あなたはわれらを網にひきいれ、

われらの腰に重き荷を置き、

人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた。

われらは火の中、水の中を通った。

しかしあなたはわれらを広い所に導き出された」。 (詩篇六六篇)

アーメン。

## 〈長男家族と同居〉

一九七七（昭和五二）年十月に、私たち眞宏家族が東京勤務を終えて、こちらに帰えることになった。そこで両親も年を取ってくるので一緒に住むことにして、家を増築することにした。最初は、二階建にして私たちが二階に住むことを考えていた。しかし食事の違いなどいろいろ考えてみると、味噌汁の冷めない距離の別世帯が理想的であり、経済的には負担が大きくなるが、棟続きに集会室、台所、風呂も備えた二十坪の家を増築した。平屋で五五坪の大きな家になった。敷地が広いためできたことである。それまで千葉の狭いアパート住まいだった子どもたちにとつて、広い家は格好の遊び場、家の中を走り回るので、父からよく叱られていた。

それまで静かだった家が、急ににぎやかになった。それでも孫と一緒に生活できて、結構楽しそうであった。私たちも留守番を頼んだり、家庭集會を手伝ったり、お互いに助け合い、干渉されず、そういう意味では理想的な二世代住宅であったと思う。この生活が、父が病に倒れる一九八二（昭和五七）年まで続いたが、この時が両親にとつて最も幸せな時ではなかっただろうか。

老いた両親が支え合って生活している様子は、横で見ていて微笑ましく、また二人が朝晩の家庭礼拝を守り、一生懸命家庭集會の御用を果たしている姿は、私たちには大きな励みでもあった。三度の食事は父が受け持っていた。料理は父の方が上手だった。そのために料理の研究をし、必要な買物まで父は嬉々としてやっていた。一般的な夫婦からすれば、逆さま夫婦だったかもしれない。

父は母に対して本当にやさしかった。母のこれまでの苦勞を労わるようであった。母は父の愛情に甘えるように、何の妨げもなく自由に何でもすることができた。日記、手紙、証しをこまめ

に書いた。また色紙に筆でみことばと俳画を書いていろんな人にあげていた。さらに大正琴やエレクトーンを買って練習をする。これまでできなかったものを取り返すかのように、いろんなことに手を出した。母のチャレンジ精神の旺盛さには驚くばかりである。母には退屈ということはなかった。年に一、二度は父と共に別府の温泉に行ったり、岡山の隆士の所に行ったりしていた。父は俳句作りを唯一の趣味としていた。暇があると、紙と鉛筆を持って句をひねっていた。所属する俳句クラブの句集に載せたり、教会誌にも投稿したりしていた。その中には母のことを謡ったものも多くあり、父の母に対する愛情がにじみ出ている。

- ◎ 世の隅に 妻と老いけり あずき粥
- ◎ 着ぶくれて 妻ころころと 出てゆけり
- ◎ 妻の病む 窓辺にゆたかに 水を打つ
- ◎ 身にしむや 妻を支える 松葉づえ
- ◎ 病む友に 今日祈りの ながき妻
- ◎ 妻のさす 日傘にいつか 寄りており

母もまた、父のこのようなやさしさに感謝をしていた。あ  
る証しの中で、次のようなエピソードを述べている。

主人と二人、向かい合つての朝食、その日はパンに牛乳、  
サラダそれに果物としてバナナでした。今日は主人の方が早



食事後くつろぐ両親



くパンを食べ終わり、バナナを取って、一度手にしたものをまた元に返して、別のと取り替えました。これはつきり腐れない良い方と取り替えたに違いない、私だったら良い方を探してから手を伸ばす、それをどうしてそんな不手際なことをするのだろう。そう思ったので、ことさら問うのも失礼とは知りつつも、永年連れ添ってきた気安さから、「どうして取り替えたの」と聞いたのでした。主人はきつと「ハハハ…」と笑ってこまかすだろうと思っていましたら、どうでしょう、「取ってみると、悪い方が残っていたから、取り替えたのだよ」と言うのです。なるほど見ると、残っているのは無傷の良い方です。私は啞然として、同時に自分の卑しい心を恥ずかしく思いました。そして、そういうことが身について自然に行なっている主人を、羨ましく思ったことでした。

そういえば、私が風呂に長く入っていたり、部屋に閉じ籠もっていると、必ず覗きにくる。心配になるのでしょうか。その純粋な心とやさしさは、私の到底及ばぬことでした。それに比べて、私は何と冷やかな心なのでしょうか。それにもかかわらず、私のような者のために主は死んで下さった。その御愛を思う時、「人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや」（詩篇八・四）と申し上げたい気持で一杯です。

私の周りの人は善意に溢れ、加えて神の愛の中に生きることができ、これ以上の幸福があるだろうかと思いません。主人に対して思い違いをするほど汚れた心しか持たない私なのに、親思いの息子・娘に囲まれて…、そう思いながら、朝に夕に主人と共に、「神は愛なり」の讚美に明け暮れています。

〈感謝状〉

そのような両親に、これまでの歩みに感謝の意を表したいと、一九八一（昭和五六）年に金婚式を迎えた時、私たち姉弟一家と母の姉弟全員が集まって、近くの波津港の料亭でささやかなお祝いの会を催したが、その席で感謝状に記念品を添えて祝福した。

それはB4判の白表紙にマジックで書いた粗末なものであったが、私たちの両親に対する感謝のしるしであった。両親は殊のほか喜び、早速額を買って居間に掲げていた。それは自分たちの人生の集大成であり、これまで導き給うた神に捧げる感謝の石塚のように思えたのかもしれない。私たちは両親がいつまでもこのまま元気でいて欲しいとの願いと祈りとを捧げていたが、長くは続かなかった。一年後、父が脳卒中で倒れたのである。

感謝状

正野英雄 息子様

お二人は昭和六年結婚以来五年の姿に語り継がれる時も病める時も互いに助け互いに慰め時にはいやしはしは夫婦ケンカをしながら今日に至りました  
その間経済的苦難の山々数々の涙の谷もありました  
私達はその中でお二人の愛の翼に守られはぐくまれて来ました  
（こういふことい）四つの子はそれぞれ自分の羽で飛び立ち今は新しい子を持つて力強く飛んでいるのです  
使命を終えた賢いことと安眠に入ってください  
お二人には名誉や財産という遺産はありません  
しかしお二人がご存命の時にこそ神を信じて懸命に飛び続けてきた生涯そのものが私達にとりまして最大の遺産であるのとして最大の遺産です  
私達もこの遺産を代々受け継いで参りますよ  
結婚五十年の記念の日に語り私達が思うところの敬愛の御愛を受けた事に対しがっの感謝の意を表します  
親わへはこの後とも来ぬ御健勝にて良き足跡を残されんことを親わへは憐み涙が神が御回に至るまで守り導き給わんことを

昭和五十六年十一月二十三日

息子様一同

## 八 終章

### 〈父の召天〉

父が倒れたのは、一九八二（昭和五七）年十一月三十日である。以前から高血圧があり、何度か発作の兆候があつていたので、父も用心をしていた。母の証しを掲載する。

昭和五一年四月の半ばの出来事でございます。

夜中の何時か知りませんが、突然、主人に呼び起こされました。「お母さん、ちよつと起きて……」。うわずった主人の声に目覚め、何か不吉な予感がして飛び起きました。

「右半身が痺れて感覚がない。少し揉んでくれ」と申しますので揉んでいますと、もつと強くもつと強くと言います。私は強く押ししているのに感じないというのです。これはただ事ではありません。

戸棚から電気アンマ器を取り出し、最高にボリュームを上げても駄目でした。「どうもおかしい、一体どうしたんだろう」と、不安そうに繰り返すばかりでした。主人の親しい友人が、半身不随で不自由しておられることを思い出しているに違いありません。

私はなおも揉み続けながら祈っておりますと、「私は甦りであり、命である」との御言が来て、平安が与えられました。

「お父さん、大丈夫、治るよ。去年も手が動かなくなっただけ、神癒で癒されたでしょう」。

昨年の事でした。主人が着物を着替えようとして、腕が全然上がらなくなりました。そればかりか、右手の五本の指が固定して、石像のように動きません。振ったり叩いたりしても駄目でした。牧師先生に祈っていただいた直後、親指だけが、私の目には分からない僅か一センチほど動き、主人は小躍りして喜びました。信仰もって動かしているうちに、親指はその日のうちに完全に戻り、次の日は人差し指、次の日は中指と一本ずつ動くようになりました。指が動くようになると、上がらなかつた肩と腕まで上がるようになったのです。

「今度もきつと治りますよ。先生に電話しましょう」と、早速、教会に事情を話して加禱をお願いしました。遠路の所を、まさか来て下さるとは思っても見ませんでした、その日のうちに先生ご夫妻が来て下さったので驚きました。

すぐ主人の寝室にお通して祈っていただきました。  
「ただ信ぜよ。われ万物を新たにせん。彼言いけるはずでに成れり。信じて受けよ」。

御言の如く、全然感覚のなかつた体が命に蘇えり、自由自在に動けるようになりました。翌日の家庭集会で早速お証をし、感謝会をしました。

それからの主人の信仰は一層強められ、朝夕の家拝には私の聖書を揃えて待つようになり、家族のためばかりでなく、多くの方々のために心を合わせて祈れるようになったことは、大いなるお恵みでございました。

父は、これらの事を通して、信仰が強められて行った。以前は病気を恐れ、神経質になっていたが、すべては神様の手の内にあることを信じていることができてからは、穏やかな毎日を送っていた。しかし、今回の脳出血は以前のそれとは違っていた。二日ほど前から体の不調を訴えて、寝たり起きたりしていたが、その日が日曜日だったので礼拝へ行く挨拶に父の部屋に行ってみると、父は無表情でベッドに寝ており、呼び掛けても何の反応もなく、目は虚ろに一点を見つめているだけであった。すぐかかりつけの医者に往診を頼み、翌日県立遠賀病院に入院した。思いのほか症状は重く、右半身完全麻痺、言語障害、失禁を起こし、肺炎を併発して重篤が続いた。

三ヶ月ほど治療をし、状態が落ち着いたところでリハビリということになったが、この病院にはリハビリ施設がなかったので、産業医科大学病院に転院をした。しかし、リハビリの時期が遅れたのと高齢で麻痺が強いとのことで、二ヶ月訓練してもらったが回復されず、生涯寝たきりの宣告を受けてしまった。医学から見放され、人間的にも治る見込みがなくなった今、自分では何一つできない、口で意志を伝えることもできない、すべて人の介護を受けなければならなくなった。それでも生きてゆかねばならないのだ。それは、父が今後どのように生きていくか、神様から父に課せられた最後の課題のように思えた。それは同時に、そのような父を私たちが信仰的にどのように支えていくのかという課題でもあった。

このため私たち姉弟は、父が主を信じる信仰によってこの中を雄々しく生きていけるよう、父の魂のために家族を上げて祈った。私も勤めの帰りに、その後転院した北九州老人病院（八幡東区）に立ち寄り、父の世話と共に聖書を読み、祈って帰ることにした。日曜礼拝の帰りに必ず

母を伴って家族で見舞いに行った。福岡や岡山にいる弟たちも折りを見て来て来てくれた。

二年ほどこの病院にいたが、医師の許可を得て私の家から車で三分くらいの所にある特別養護老人ホーム「恵みの家」に移った。私としては母が元気であれば家内と共に家で看て上げたいと思っていたが、この時の母はそれができるといふ状態ではなかった。それで少しでも家族との接触ができるようにとの思いから、移ったのである。ここだと家内も毎日行くことができるし、母も連れていきやすい。私もゆつくり父と話すことができた。話すといつても父は言葉が出ないし、何を言っているのか分からない。こちらの方からあれかこれかと言って当たればそれが分かるという、ほとんど一方通行の会話であった。

ここで一年ほどお世話になった。そして、発病から三年半を経過した一九八六（昭和六一）年三月二七日の朝、心不全を起こしアツという間もなく天に召されてしまった。もうすぐ八十歳だねと話したばかりの七九歳であった。

父の生涯は、生まれた時から苦難に満ち、忍従の連続であったが、人生の後半に母を通して生ける神を知ることができたことは、実に幸いなことであった。母を通してと書いたが、実際は、父が子供の頃日曜学校に行っていたということが、我が家の救いに繋がっていったのではないか、「ひとたび我に来るもの、我再びこれを捨てじ」と言われる主が、父のゆえに我が家に目を留めて下さったのではないかと思う。そういう意味では、父こそ祝福の基であったのだ。父はあの不自由な境遇の中で悔やむことも、失望することもなく、主に信頼して淡々と戦い抜いてくれた。

私は父に十分なことがして上げられなかったという自責の念を消すことができなかった。告別

式が終わった後、父の遺影の前に座り、「お父さん、これで良かったのですか」と問い掛けた。写真の父は上機嫌な顔で、「それでよかったんだよ。すべては神様がなさったことだから」、そう言つて私を慰めてくれているようであった。最後まで父のやさしさに救われた気持である。

〈母の病氣〉

母はこれまで大きな怪我を二度したが、いわゆる病氣というものに縁がないほど、健康に恵まれていた。その母が一九七九（昭和五四）年頃から何となく体に力が入らず、歩いたり字を書いたりするのに、不自由を感じるようになってきた。証しの中に次のように書いている。

最近、目立って手足が弱くなって、ペンを持つても力が入らず、縮まった不明瞭な字になって、自分でも情けなくなりませう。

娘は遠慮なく言ってきました、「母上の手紙は読みにくい。もっと丁寧にゆっくり書いてみたら」。でも、それが震えて思うようにできず、おかしな字になって、ますます書くことが億劫になり、どちらにもご無沙汰ばかりで、暑中見舞いさえも人頼みとなりました。

もっと困ることは、足が上がらず、ちよつとした物にもつまずいて倒れることでした。このため外出はできなくなり、何でも人頼みですから、主人も面倒がつて、「お父さん、あれしてこれして。お父さん、お父さんでは、俺は死んでも、死ねやしない」と言うのです。すかさず、「死んだら困るわ。だから甘えているのよ」と、私も訳の分からぬことを言ってしまった、すまないと思

いつつも、歩けばつい転ぶという具合で、また頼むという悪循環になるのです。(以下、証し集「弱ったひざ」に記載)

このため、産業医科大学病院で診てもらったが、原因は分からず、病院の勧めもあつて家で機能訓練ができるよう自転車漕ぎや握力を強化する道具などを買ひ揃え、家で訓練をするようになった。しかし、症状は改善されず、かえつて進行していった。特に立ち上がつて歩き始める時、きちんと立つてから歩けば何とか歩けるが、今までの調子で立ち上がりながら歩き始めると必ず転倒した。それに途中で左右に曲がる事ができなくなった。曲がろうとするとバランスを失い、よろよろとこけた。それで母の膝は生傷が絶えなかつた。後に杖をつき、膝にサポータをして、父に手を引いてもらつてというより、ぶら下がるようにして外出するようになった。

それに加えて、物忘れが目立つようになった。最初のうちは、母はもともと呑気だからぐらいに考えていたが、だんだんひどくなるので、専門医に診てもらおうと九州厚生年金病院に連れていった。ここでもはつきりしたことは分からなかつたが、どうも脳に栄養が不足しているところから来ているのではないかということだった。そこで本格的な治療とリハビリを行なうため、一九八〇(昭和五五)年六月、病院の紹介で大分県の由布院厚生年金病院に入院した(証し集「由布院に行きて」217ページ参照)。一ヶ月ほどして、母は癒されたといつて退院してきたが、間もなく症状は元に戻つていった。

その後分かつたことは、母の病気はパーキンソン氏病というまだ原因が究明されていない厚生



省指定の難病であった。医師の話では、一般的にパーキンソン氏病は運動の中樞神経をやられ、歩行困難と手足の震えを来たすが、母の場合は運動機能障害のほかに、脳萎縮が見られるということであった。母の生活上の障害は、運動機能障害よりも、いわゆる認知症状の方が重要になってきた。

特に、父が入院してから、急に進行してきたように思える。年を取ってもあれほど気力に満ち、あらゆることにチャレンジしてきた母であったが、とみに気力がなくなり、テレビを見ているか部屋でじっとしていることが多くなった。電話を取っても誰からかかかってきたのかすぐ忘れてしまうので、母の家の電話を撤去した。火を扱わせることができないので、食事も一緒にするようになった。それでも、この頃までは生活に不自由はあるものの、ある程度は自分のこともできたし、聖書を読むこともお祈りもでき、特に支障がある訳でもなかった。証しもいつもの通り書いてはいたが、とても出せるものではなかった。証しとしては、一九八一（昭和五六）年後半のものが最後となった。

病状は確実に進行していった。脳萎縮が進み、徐々に現状認識ができなくなり、昔の記憶しなくなってきた。父の所に見舞いに連れて行っても、何も世話もできず、話すこともなかった。父はこのような母を見て、悲しそうな顔をし、涙を流した。永年連れ添った妻、共に苦労を重ねて来た妻が、恍惚の人となってしまう。いつも元気で、何があってもへこたれず、自分を支えてくれたあの時の姿を思い浮べ、人生の終わりにお互いがこのようなことになる、と涙したに違いない。

「主よ、どうして母はこのような中を通らねばならないのですか。母はあなたから選ばれ、愛された者です。今日まであなたを信じ、忠実に従って参りました。しかも、戦いから戦いの連続でした。そして今は、いかにもしてと主の御用に励んでいたのです。あなたは母にカナンの生涯を約束されたのではないのですか。人生の最後になってこのような結末では、あまりに残念としか言いようがありません。母が頑張つて築いた人生の尊厳と名誉はどうなりますか。あなたは、なお母を鞭打たれるのですか。あなたの愛と慈しみは何処にありますか……」

『わたしは知ります、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを』(ヨブ四二・一二)。そして『あなたは善にして善を行なわれます』(詩篇一一九・六八)。どうぞ、『神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい』(第一ペテロ五・六)あなたの御前に歩めますように……。私は、自分では祈ることができなくなつた母に代わつて祈っていた。

その後の母は、自分の人生を逆に辿るように、過去へ過去へと遡つていった。苦難の東郷時代が一番印象が強かつたと見えて、この時期よく無断外出し、行方が分からなくなることがあつた。ある時は知らないうちに出て行つたことに気付き、いくら探しても分からない。警察にも届けが分からない。夕方になつて、何と東郷で倒れているのを発見され、救急車で病院に運び込まれている旨の連絡があつた。東郷に自分の家があると思つたのだろう。

このため、家内は家を空けることができなくなつた。鍵を掛けても開けて出ていった。寒いみぞれの降る夜に居なくなり、一時間以上探してやっと裸足でうずくまつている母を見付け、連れ

て帰ったこともある。聞けば、馬に餌をやりに行ったのだという。すでに母は八幡時代の娘の時に帰っていた。父の死も認識できなかったようである。母は文字どおり幼な子に帰っていた。何処に置かれてもいつもニコニコと愛らしい顔をしていた。心には何の不安もなく、神の愛の中に安心しきっているように見えた。

神様は、母をすべての労苦から解放し、「人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない」（黙示録二一・四）、そのような平安の中に包んでおられるように思えた。

家内は、母と一緒に風呂に入り、洋服を着せ、下の世話をし、二時間ぐらいかけて食事を食べさせ、礼拝に連れて行った。母は家内をお姉さんと呼び、頼りにして言われるままにしていた。しかし、家内も疲れてきた。これ以上、一人で面倒を見ることが困難になつてきた。ちょうどその頃、認知症専門の病院ができて成果を上げていることを聞いたので、家内の休養と母の症状が少しでも軽減されればと思ひ、一九八七（昭和六二）年五月、福岡市にある今津日赤病院に入院させた。認知症患者ばかりの中に母を入れることは、私にとつて忍び難い事であった。帰りの車の中で、「母よ、許して欲しい」と、心の中で詫びていた。

ベッドには聖書と讚美歌の入ったテープコードを置いてきたが、ほとんど使っていないようであった。見舞いの度に母と聖書を読み、讚美歌を歌った。不思議なように讚美歌はよく覚えていて、看護婦さんがいつも歌っていますよ、と教えてくれた。六ヶ月間入院したが、改善されなかった。それから、再び一年一緒に生活したが、もはや家で面倒を見るには、長期間は無理であった。

止むなく、再度今津日赤病院に入院し、退院後は老人保健施設、特別養護老人ホーム「恵みの家」にと、母に申し訳ないと思いつつ、入所してもらった。

私たちは母の魂のことを思った。たとえ思考力はなくなっても、魂は神に生きている。だから、毎日のように面会に行き、聖書朗読、讚美、お祈りをするようにした。母には最後まで神を礼拝する姿勢があつた。そして、何処に置かれても穏やかな平安の中にあり、いつもニコニコして私たちを迎えてくれた。それが私たちの救いでもあつた。

### 〈母の召天〉

母が「恵みの家」に入所して一年経つた一九九一（平成三）年一月、正月に我が家に外泊してからホームに帰つたが、以前からあつた熱が引かないため、肺炎の疑いがあることで遠賀浅木病院に入院した。そこで肺炎の治療をして熱も下がり、機能訓練に行つたりしていたので退院も間近いと思つていたが、だんだん食事が喉を通らなくなってきた。専属の付添婦さんを付けていたが、それまでは時間を掛けながらもそれなりに食べていた。しかし、嚥下機能が害われたように、飲み込むことができなくなった。そして本人の意思とは関係なく、「アー、アー」という声を夜となく昼となく休むことなく出すようになった。それだけでも相当な体力を消耗したはずである。パーキンソン氏病はやはり恐ろしい病気である。ここまで運動神経が侵されてきたのだ。このため、鼻腔栄養と点滴注射が施されるようになったが、母の体は徐々に衰弱していった。それでも母の表情は変わらなかつた。苦しいとも、きついても言わなかつた。どこまでも穏やかで

あった。

私たちは、これまで何度も苦難を乗り越えた母だから、必ず立ち直ると信じていた。しかし神の時は近づいていた。医師から親族を呼ぶように言われ、お別れを覚悟しなければならなかった。姉弟が枕元に集まった時はすでに意識はなく、人工呼吸器が取り付けられていた。医師は言った、「このまま人工呼吸器をつけていても、回復する見込みはありません。ただ死を引伸ばすだけです。外せば二、三時間で亡くなるでしょう。どうしますか」。

私たちはすぐに答えた、「私たちはクリスチャンで神様を信じ、天国を信じています。これ以上母の苦しみを引き伸ばすことは忍びません。どうぞ、外してください」。人工呼吸器は外された。医師と看護婦がいなくなつた後は、母と私たち姉弟だけとなつた。みんな母のベッドを囲んだ。そして讚美歌を歌い、最後のお祈りを捧げた。「天のお父さま、今日まで母を導き下さつてありがとうございます。母はいろんな困難の中を通りましたが、あなたが神となり、避け所となつて下さいました。今、母をあなたの御手に委ねます。どうぞ、母の霊を受け入れ、御国へと導いて下さい。私たちも母の足跡にならない、信仰持つて歩むことができますように。そして、やがての時、御国で再び相まみえることができますようお導き下さい」。

厳粛な時であつた。一人ひとりが母の耳元で感謝を述べ、別れを告げた。母は何の反応も示さなかつた。霊はすでに、御国に移されているのではないかと思うほどであつた。人工呼吸器が外されて三時間が過ぎた。しかし、母は大きく息をし続けた。医師の言葉に逆らうように、それから丸一日、自力で生き続けた。人の命は人の手によらない、神の御手によるのだ、そういうこと

を証しているようであった。そして、すべての使命を終えた母の体は、静かに呼吸を止めた。時に、一九九一（平成三）年三月三十日午後四時十四分。父が召天してちょうど五年、歳も同じ七九歳であった。

告別式は四月一日、午後二時から榎本先生の司式のもと、八幡前田教会で多くの花と会衆に囲まれて厳かに行なわれた。詩篇二三篇を通して母がどのような人生を歩いたか、主がいかに良き牧者となつて真実に母を守り、導かれたかが語られた。それは母の最後の証しの場でもあつた。

告別式が終わつても、母の遺体は火葬場には行かなかつた。母は生前から自分が死んだら医学のために役立ててもらおうと言つて、産業医科大学の献体組織「医聖会」に加入していた。それは私が同大学の設立に関わり、献体組織立ち上げを担当して市民に登録を呼びかけていたので、母は（私が頼んだわけではないが）それに答えてくれたのであるが、その時私は、母親の愛情の深さを感じるほかなかつた。それで姉弟が話し合い、遺志どおり母の遺体は産業医科大学に引き取ってもらうことにしたのである。

それから一年後、母は文字どおり最後の御用を終え、遺骨となつて文部大臣の感謝状と共に我が家に帰つてきた。「こ苦勞様……」、私はそう言つて遺骨を胸に抱いた。

今、床の間には父と母の遺影が並べて飾つてある。二人とも、にこやかな表情である。

## 九 おわりに

以上が、母が辿ったあゆみである。

たとえ自分の母親とは言え、一人の人の生涯すべてを書き表すことは難しい。書き漏れたエピソードもいくつがある。ただ、母の信仰という視点で書いたつもりである。私は、記念誌の表題として、「神は愛なり」というみことばを掲げた。それは母が主に出会った時のみことばであり、「自分は神様から特別選ばれ愛された、特選の民である」といつも言っていた、いわば生涯のみことばであると思つたからである。

母の生涯を振り返つてみると、

「わたしの子よ、

主の訓練を軽んじてはいけない。

主に責められるとき、弱り果ててはならない。

主は愛する者を訓練し、

受け入れるすべての子を、

むち打たれるのである」(ヘブル十二・五〜六)

というみことばを思い起す。

母には神様に対する切なる飢え渴きがあつた。いろんな困難、試練の中を通つたが、その都度神様にぶつつかれるようにして祈り、とことん導きを求めていた。そこで神様の愛と真実とを、さ

らに深く知っていったと思う。

母には私たちのように中途半端で止めるということがなかった。何でもやりだしたら、最後までやり通した。そのことが信仰でも発揮された。娘時代に材木商をやらされ、訓練されたことが生かされたのではないかと思う。神様は決して無駄なことはなさらない御方である。晩年は、神様が母に休息を与えるために、あの病気の中を通されたのかも知れない。

このような母を持って、本当に有り難いと思っている。七七歳の喜寿を迎えた時、母に対する感謝を書状にして贈った。この時の母は、この事が認識できるかどうか分からない状態であったが、読んで渡した時、一瞬面映ゆいような顔をしたことを覚えている。この書状は母のタンスの中に大切に保管されていた。

この書状を最後に掲載して、母の記録のしめくくりとしたい。



### 喜寿の祝いに寄せて

この度 喜寿を迎えられたことは 神様の祝福と心からお慶び申し上げます

これまでの道程は 決して平坦なものではありませんでした 職を変えること四たびに及び大きな材木商から一転して行商による電球卸売も経験しました 五人の子供を抱え 雨の日も風の日も自転車のペダルを踏み続けました そういう中で 愛子弘巳ちゃんを天国に送つたことは どんなに大きな痛みだったことでしょうか

化粧ひとつすることなく 自分のために着物を買うこともなく ただ子供たちのために頑張り通してきました そのたくましさ強い愛情の中で 私達は育つたのです

子供たちの前では毅然としていた母ですが やはり弱い一人の女性でした 行商の途中のあの鐘崎の岬が母の涙の隠し場所でした 激しく打ち寄

せる玄海の波しぶきのように積もる悲しみを神に訴え叫びました その祈りに主は応え給いました 「わが仕うる万軍の神エホバは生く」これが母の証しの御言です

今 私達は母から金銭でなく最高の財産を受けました その歩みを通して生ける主を知ることができました アブラハムのすえを恵むと約束された主は 母をわが家の祝福の基とされました 今日見るとおりです

お母さん どうぞ胸を張って下さい 主の前に走るべき行程を走って来ましたが 今や義の冠と大いなる報いを主が備えて下さるでしょう 私達もまた満腔の感謝を捧げます

願わくは「わたしはあなたの年老いるまで変わらなず 持ち運びかつ救う」と言われる主が さらに母を恵み導き給わんことを

平成元年三月二九日

息子・娘一同

## 十 母の略歴

一九二二（明治四五）年一月一日 正野峯吉・シカの三女として誕生

（姉弟九人）

一九二八（昭和三）年三月

八幡高等女学校卒業

翌日から父の材木商に従事

一九三一（昭和六）年十一月

石田義雄と養子縁組（十九歳）

一九三四（昭和九）年十月

長女溥子誕生（二二歳）

一九三八（昭和十三）年二月

長男眞宏誕生（二六歳）

一九四一（昭和十六）年十月

次男隆士誕生（二九歳）

一九四四（昭和十九）年一月

三男暢之誕生（三二歳）

一九四四（昭和十九）年八月

大分県東国東郡櫛来村に戦争疎開

正野製材所大分工場を経営

一九四八（昭和二三）年八月

四男弘己誕生（三六歳）

一九五〇（昭和二五）年八月

福岡県宗像郡東郷町に転居（神と出会ふ）

電球卸業を開始（三八歳）

一九五〇（昭和二五）年十月

この頃より隣の津屋崎教会に出席

一九五一（昭和二六）年十二月

四男弘己召天（三九歳）

- 一九五五（昭和三十）年ごろ 青菓業を開業（四三歳）
- 一九五九（昭和三四）年七月 北九州市黒崎にて食堂開業（四七歳）
- 一九五九（昭和三四）年九月 八幡前田教会に出席するようになる
- 一九六三（昭和三八）年二月 うどん用の釜の湯で大火傷（五一歳）
- 一九六七（昭和四二）年十月 三平食堂を廃業（五五歳）
- 一九六八（昭和四三）年一月 遠賀郡岡垣町に自宅新築、転居
- 一九六八（昭和四三）年八月 海老津集会を開始（五六歳）
- 一九七七（昭和五二）年二月 交通事故により入院（六五歳）
- 一九七九（昭和五四）年ごろ パーキンソン病に罹患（六七歳）
- 自宅療養の後、入退院を繰り返す
- 夫義雄召天
- 一九八六（昭和六一）年三月二七日 特別養護老人ホームに入所（七八歳）
- 一九九〇（平成二）年一月 召天（七九歳）
- 一九九一（平成三）年三月三十日 八幡前田教会にて告別式
- 一九九一（平成三）年四月一日

第二章  
母の証し集  
「家族のこと」

## 一 祈りに応え給う主

いつも同じ時刻にきちんと帰ってくる三男暢之（日活ホテルコック見習）が、今晩はどうしたことが帰らない。先に家庭礼拝をしてみました。まだ帰らない。仕方がないので、見たくもないテレビで時間をつぶしたが、それでも帰ってこない。「こんなに遅くまで、一体何をしているのだろう」。少タイライラしてくる。享樂のためではないことは、私が一番よく知っている。でなければ、ちよつとした事故か。さもなくば、愚連隊にでも取り巻かれているのではないか、そう思っただけでもゾツとする。動悸が高鳴る。不安は倍加し、雪だるま式にふくれ上がる。「お馬鹿さんだね、心配したとて何になる」。「祈れば安けし、獅子の穴にも」（讚美歌三一八番）、「そうだ、そうだ」と自問自答し、「イエス様助けて下さい。もう十二時になるのに帰りません。帰りたくても帰れない何かがありましたら、それを取り除いて、いま帰して下さい」。祈っていると、「主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、またあなたの命を守られる」（詩篇一二一・七）のみことば。そうだ、大丈夫、心配することはない。今までの不安はすつ飛んで、安らぎが私を覆った。私は安心して休むことができた。

しばらくして、階段を駆け上がるけたたましい音。暢之だ。私の部屋をガラリと開けたが、私が寝ていたので当惑した格好。「遅かったね」と、労わる気持で言った。「課長がどうしても帰してくれんで、困ったなあ。どんなに頼んでも聞いてくれんし、母が心配しますからと何度も何度も頼んで、やっと帰ってきた」。「今晩はもう遅いから、早くお休み」。今日はさぞ疲れたであろう

と思ひ、詳しい事は明日聞くことにした。

この時、私は思った。もしも主に祈つて導きを受けていなかつたら、状況は変わつていたに違いない。修羅場にならぬにしても、お互い自分勝手な主張をするだろう。「人が心配しているのに、夜更けまで何処をうろついているんね」。こんなこと言つたら、受け言葉に買ひ言葉、「誰も起きて待とつてくれと頼んだ覚えはない。勝手に心配しとつて」。後は、大変な事になるであろう。争いの絶えない家庭に、これに似たやりとりを耳にしたことがある。福音に接した者の有難さ。自分のことばかりでなく、他人のことも考えるようになるから、不思議である。

翌日、私の顔を見るなり、昨日のことを語りだした。「昨夜ね、課長が『酒飲め!』。『僕、飲めません』。『そんな言い訳は通らん。飲めといつたら飲め。飲むまで絶対に帰る事ならん。大体おまえは、真面目一方で純情すぎる。ひとつ悪を入れてやるんだ』。僕、どうしてよいか分からず、逃れることばかり考えて、『僕、明日は早番ですから、帰して下さい』。『早番が何だ、そんなこと言うても駄目だ』。そう言つて帰してくれない」。聞いている私の方が、腹が立つ。「いらん世話をやく人やね。いくつぐらいの人?」。私は矢継ぎ早に尋ねた。「おじさんよ。僕、歳のことさつぱり分からんけど、四十くらいかな。僕のことと思うて、長い説教やつた」。「酒飲めという説教?」。そんな奴、睨み返してやりたいと思つた。

「いいや、そうやない。人が油を売つている時も僕が働くので、真面目な者が上に上がるものではない。ボヤボヤしていると、後輩のT君に先を越され、いつまで経つてもパントリー（皿洗い）におらなならんぞ。T君の母親がチーフに取り入つて、ご機嫌伺いに來とるのが分からんか。あ

んたの親は、息子のこと考えたことないのかって」。

私はチーフの顔さえ見たことがない。入社の時も、一人で行かせた。息子の将来は、母親として人並み以上に心配もし、祈ってきたが、そんな事までして出世を望んだことはない。聞けば、社内はすべてチーフの命令で動いており、最高の権威者で、この人に憎まれて辞めた人が何人かいるそうだ。それは後輩であろうが、若者であろうが、自分の好みによつて拔擢するので、先輩が居づらくなるのだそうで、僕もその組になりそうだというのである。

課長さんは、見かねて忠告したのであろう。そのご厚意は感謝したい。しかし、こんなことがあつてよいのだろうか。成人式を迎えて間もない息子に、大人の汚い社会悪を見せ付けることは、私には耐えられない。道理が通らぬ世であるなら、世の習わしに従うべきか。潔癖な考えで押し通し、もし息子が取り残されたらどうなるか。失望落胆はおろか、惨めさに耐えられなくなつて、辞めるかもしれない……。いけない、いけない。私たちは神の子ではないか。世の人と違うのだ。しかし、それでは息子はどうなる。二つのもの間にさまようことの如何に苦しいことぞ。堂々巡りするだけである。「主よ、私は疲れ果てました。どうしたらよいでしょうか」。胸の不安のまま、主に投げ掛け祈つた。

暗闇の中にも光があつた。「王の心は、主の手のうちにあつて、水の流れのようだ、主はみこころのままにこれを導かれる」(箴言二一・一)。主よ、ありがとうございます。すべてのものの上に居給う主よ、あなたは王の心でさえ自由自在に操ることのできる方でした。チーフが何だ、人ではないか。如何に権威があるうと、主はその思いをも変えることができになる。

「主よ、どうぞチーフの心を真つすぐに息子に向けさせて下さい。正直者が馬鹿を見ることのないように、守って下さい」。祈るうちに、本当にその通りになるように思えて、うれしくなった。私の心は定まりました。もう動かされることはありません。私は暢之に、この事をはつきりさせて置かなければならないと考え、主は今も生きていらつしやること、人の言葉を恐れてはならないこと、チーフの心を変えることができる主に祈つていこうと話した。

「暢ちゃん、入社祝いにあげたみことばを覚えとるね」。

「うん、わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」。

「そのとおり、今日までよく守ってきたとお母さんは思う。陰日向なく働き、朝六時出勤に間に合うよう起こしてくださいと祈ったね。そして誰の手も煩わしたことがなかった。主を前に置いているからできることで、お母さんは本当にうれしい。人が何と言ったつていいのよ。私達の祈りは必ず聞かれる」。

私は導かれるまま説いた。フランスのコックであったローレンスは、いつも主を前に置く練習を十年二十年と続けているうちに、顔が輝きだし、遠国から牧師までが教えを乞いに来るようになり、ついには王の料理頭になった話もしもした。暢之は身動きひとつせず、よく聞いてくれた。以来、この事のために心を用いた。朝、仕事の区切りを付けると部屋に入り、箴言二一章一節を握って祈った。たとえ一年かかっても、祈り続けようと心に決めた。それから一週間も経たぬある日のことである。暢之から電話がかかってきた。



「もしもし、お母さん」。

「暢ちゃんね、どうしたの」。

「あのね、僕、朝チーフに呼ばれてね。今日からグリル（調理）に行っていていいと指令が下ったよ。喜んで」。

「本当、よかったね」。

「僕、昇給もしたんだよ」。

「本当、まあよかったね」。

「うん、僕ね、一分でも早く、お母さんに知らせたかったあ」。

私は胸がいつぱいで声が出なかった。

「それからね、お母さん。返事がないね」。

「はい、ちゃんと聞いているよ」。

「あのね、神様にすぐ感謝してよ。ね」。

「そうよ、何はおいてもするよ。あんたもね」。

「よかったね、よかったね」。

うれしさが込み上げて、何を言ってもいにか分からず、ただよかつたね、よかったね、の連続のまま電話を切った。その足で二階に駆け上がり、感謝の祈りを捧げた、主の实在をひしひしと感じつつ。



## 二 愚かなりとも迷うことなし

まだ黒崎で食堂をしている時のことでした。三男の暢之が会社から帰るなり、私にこう言いました、「明日か明後日、世界文学全集二五巻、家に持って来るはずだから受け取っておいて」。私は驚き、「二五冊もいっぺんで買うの。お金は？」と聞きますと、「無論、現金よ。一度に払うのは僕だけだった」と誇らしげに言うではありませんか。

「馬鹿だね、一冊買つても分厚い本を読めるかどうかも分からないのに、二五冊も買う馬鹿があるね」、私は思わず語気強く言いました。「馬鹿、馬鹿つて言わんで。何もお母さんから出してもらうわけでもなし、僕が働いたお金で買うのが、何が悪い」。ちよつと返す言葉が見つからない。なるほど、私が文句を言う筋合いではなさそうにも思われる。でも、私の内なる方は、このまま引き下がってはいけなとおっしゃるのです。さりとて、口論すれば親子喧嘩にもなりかねない。一瞬ためらいましたが、語気を改めて言いました、「暢ちゃん、お母さんは本を買つてはいけなと言っているのじゃないのよ。買う前によく祈つたね？」。

「……………」、返事がありません。

「それと、お母さんが心配しているのは、お金の使い方に疑問を持つよ。さつき、自分のお金を何に使おうと自由だと言うようなことを言つたわね。これは大変な間違いだと思うの。聖書に『あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であつて、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払つて

買い取られたのだ。それだから、自分のからだをもつて、神の栄光をあらわしなさい』（第一コリント六・十九）とある。私たちの健康も、主が私たちの罪のために身代わりとなつて死んで下さつたからこそ、一日一日守られているのであつて、主がこの健康をお取りになつたら、私たちは立つことも働くことさえできないのよ。自分で働いて得たお金も、決して自分のものではなく、神様から託されていて、神の栄光を現わしなさいとおっしゃつておられるのよ。それからね、本箱に日本文学全集があるから読んでみて、もう一度祈つて買いなさい」。それだけのことを言つて、後は何も申しませんでした。

翌日、暢之が会社から帰つてくると、私の耳元で小さな声で言いました、「お母さん、本屋に行つて断つてきたよ。祈つてみたら、買う必要なかった。本箱に読む本が沢山あるから」。素直に私の言葉を聞き入れて従つてくれたことがうれしくて、「こんないい子を……」、私は感謝しつつ、夕飯の支度をしました。

### 三 次男への手紙

次男の隆士が、東京の河合楽器のセールスマンに転職して三年になった頃のことです。自分の力を試したいと私たちの反対を押し切つて東京に行く時、約束しました。それは、教会の礼拝にはどんなことがあつても出席し、信仰に励むこと。その事を承知しましたので、喜んで送り出したのでした。でも心中では、まだ二二歳、一年も経たぬ内に飛んで帰つてくるに違いない、苦勞することも

良いことだ、失敗して帰ってきたとしても、それから立ち直っても遅くはないと考えておりました。

普通の会社員とは異なり、セールスマンというのは、生存競争が激しくて、長く続くものではないと聞いておりましたので、苦勞も多いことでしょう。夜は十時、十一時まで働くという便りを受け取ると、親たる者、まことに不憫で、暇を見つけては励ましの手紙を書きますが、梨のつぶてで、筆無精の息子は手紙どころか、葉書も来ません。

心配している時、珍しく手紙が来しました。以前に同じ教会の或るクリスチャン女性と知り合い、交際の後、結婚を申し入れていたところ、ご両親が社会的地位のある方で、セールスマンでは生活が安定しないとの理由で断られ、その方は他家に嫁がれることになった。失恋の大きな痛手を受けた上に、売り上げの締切日が迫っているのに、ピアノ五台の差ができてしまつてどうにもならない。力が失せてもう駄目だと、苦悩を訴えた手紙でありました。隆士の切ない気持を思いやり、泣けて、泣けてたまりません。失恋のショックで立ち上がれない様子が目に見えて来ます。飛んで行つて慰めてやりたくても、事情が許しません。

「主の救を静かに待ち望むことは、良いことである。

人が若い時にくびきを負うことは、良いことである。

主がこれを負わせられるとき、ひとりすわつて黙しているがよい」(哀歌三・二六)。

聖書のみことばを冒頭に掲げて、あなたの苦しみ、お母さんによく分かります。けれども世間は広いのですよ。その女性はあなたに相応しくないと、神様の御旨ではないと思えます。神様は別に、もつともつとすばらしい人を備えてあります。信じて下さい。そのうち必ず現われます。

それまで待ち望んでいなさい。

それから、あなたは一人ぼっち、孤独だと思つていますが、孤独ではありません。良き牧者があなたと共におられるではありませんか。他の人たちは一人でセールスしなくてはなりませんから、すぐ疲れて憩いを求め、酒や女に溺れて、成績がガタ落ちして去つていきます。けれども、あなたが今日まで続いているのは、主と共におられるからではないですか。その御方が力になつて下さるのですから、大丈夫です。立ち上つて下さい。「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」(マルコ十・二七)と、切々たる思いをもって、手紙をやりました。

そうしますと、締切までの僅かな間に、ピアノを七台売るといふ奇蹟的現象が起こり、トップになりましたという朗報を受け取つた時、思わず手紙を握り締めて泣きました。最後に、こんな言葉が添えてありました、「正野さんは口は重いし、どう見てもセールスマン型ではない。たいたい成績の良い人でも、一時的で消えていくのに、正野さんは就職当時から今までの三年間、トックラスから落ちたことがない。不思議だ。何かある。それは信仰というバックボーンがあるからではあるまいか」と、上司の人が言われたとのこと。ハレルヤ！感謝！

#### 四 次男の結婚

「主よ、わが魂はあなたを仰ぎ望みます。

わが神よ、わたしはあなたに信頼します」(詩篇二五・一)

嫁になる人からの手紙

尊い主の御名を崇めて感謝いたします。

寒さ厳しいこの頃でございますが、皆様お元気でいらつしやいますか。私も日々主に従いつ守られ、恵みのうちに過ごすことを許されております。

主に依り頼んでいる時、全く心が平安で、主の大きな御愛を覚えます。

私が初めて隆士さんと御殿場の青年研修会でお会いした時、ちょうど私は信仰の問題にぶつかっていた時で、その事を相談するかのようになり、隆士さんにお話し致しました。

その時の隆士さんのお言葉によつて、心のわだかまりもすつかり取れ、すつきり致しました。私の問題というのは、小さい時から受け身の信仰で、人が悩みの中から救われて得たような力強いものがないという単純なものでした。

隆士さんはこうおっしゃいました、「神様を信じることが出来る以上に、すばらしい事はないんじゃないですか」と。

この一言によつて、私は確信と喜びに満たされて、山を下ることができました。隆士さんのような信仰の方と知り合うことができたのも、主の大きい御愛と導きであつたと信じています。

それから数日経つた日曜日の午後、金町教会（以前、次男が行っていた教会）で青年会のご奉仕をしていた時、「今、東京にきているから」とお電話があり、再び新宿でお会いすることが許されました。

お忙しいお仕事の間でしたが、私の魂のために時間を取って下さったのです。自然に信仰の話題が中心になり、楽しい時を過ごしました。

それから、お礼の意味で隆士さんにお手紙を出したのがきっかけとなり、二人の間に文通が始まりました。

手紙の内容も信仰が中心であり、それによつて、私もさらに強められたこととございます。

九月十三日、再度上京なさる旨、お手紙を受け取りました。そして、その日の来るのを心待ち致しておりました。

その日も、会議でお忙しそうでしたけど、新宿でお待ちいたしました。その時でございました。隆士さんから、まだ早すぎるかもしれないがと前置きされて、「将来、主にあつて、共に励まし合つていくことができれば……」とのお言葉を聞き、私は少し驚きましたが、これが主のお導きでありますならば、従つて行きたいと決心いたしました。

それから、月に一度の上京と文通によつて、主にあつてお互いに信頼を深めることができました。でございます。

十一月二日には、姫路の田舎の家に隆士さんをお迎えして、両親や姉と交わりを持つことができ、本当に感謝でございました。

そして、昭和四五年一月十一日、主のたいなるお恵みのうちに、金町教会で高橋義夫先生の司式のもとに、婚約式をしていただきました。

「主は今に至るまでわれわれを助けられた」(サムエル記上七・十二)

主はここまで守り、導いて下さいましたことを、心から感謝いたしております。

さらに結婚の日まで、準備も十分に整えられますよう、お母様のお祈りの内に覚えて下さいませ。(原文のまま)

このお手紙は、息子の隆士と婚約した直後、お嫁さんになる方から、私に宛てて下さったものです。相手の方は東京、息子は岡山、私たちは北九州に住んでおります。思えば、まことに不思議な主のお導きでございました。

御殿場の研修会で、息子は岡山から、私は九州から、そして先方の母親は姫路から、娘さんは東京の勤務先からというように、全国の各地から馳せ参じたのでございましょうが、その多くの人たちの中から、互いに目を止め語り合い、遂にスムーズに結ばれましたことは、まことに主のお恵みでございました。

「家と富とは先祖からうけつぐもの、賢い妻は主から賜わるものである」(箴言十九・十四)。

私は隆士のために、主を畏れる賢き妻が与えられるように、長年、毎日毎日お祈りいたしておりました。ところがある日、「主の山に備えあり」と、お答えを下さいました。このように祈れば応えて下さる主を崇めて感謝でございました。

二人が新婚旅行の帰りに、海老津の私の家に立ち寄るといふ知らせがありましたので、四月三日は、福岡に嫁いでいる娘一家、八幡の長男一家が集まり、部屋一杯の客となりました。そして、親子水いらずの楽しい集いでありました。



まず感謝会をいたしました。それが終わった時、誰かが驚嘆するように言いました、「最初はお母さん一人の信仰から、こんなにたくさんの方のクリスチャンが生まれた」。すると、眞宏が、「それは神様が、格別正野家を愛して下さいましたから」、そして隆士の方に向かって、「什一献金は絶対に守りなさいよ」と言いました。私はこの時、かねて遺言に書いておこうと常日頃思っていたことを、ちょうど良い機会と思ったので、

「皆さん！よく聞いてちょうだい。ちょうど良い機会ですから、物が言える時に遺言しておきます。正野家は代タイエス・キリストを救い主として崇めて従っていき、子々孫々、語り伝えねばなりません。これは主のご命令ですから、絶対に守って下さい」。みんな、しんみりとうなずいてくれました。私は、肩の荷が一度に降りた思いで、感謝で一杯になりました。

## 五 三男の結婚

昨年（一九七四年）十二月に入って間もない頃のことでした。三男の暢之が私の部屋に来て、「お母さん、僕、新会堂ができたから、結婚するよ。会堂第一号になるだろうね」と、自信のあるような口調で言いました。けれども、私には信じられませんでした。三十歳になっても、全くこの事に関しては無関心と思えるほど、結婚話など他人事のような冷静さで、女友達の一人もいない者



が、心に決めた人がいるとも思えず、寝耳に水の思いでした。

「一体、その相手は誰なの」と聞くと、「誰か知らんよ」と、ケロリとしています。「誰か知らんって、他人事のように……。相手なしで結婚するなど言えるはずないでしょ」。

息子の顔を見上げると、落着き払ってニコニコしています。「結婚相手もなく、交際もしていないのに、新会堂第一号なんて、どうして言えるの」。私は、同じような事を立て続けに聞きました。「イエス様がおっしゃったお言葉だから、間違いないよ」と言うのです。「それがどうして分かったの」。私は、なおも追求して止めませんでした。そして分かったことは、長男も、次男も結婚は人に依り頼まず、ひたすら主に祈り、願うところに勝るドンピシャリの女性が与えられたので、三男もそれにあやかりたいと思ったのでしょうか。年頃の男性ですから、女性の人が気にならないはずはないと思いますが、主が与えて下さるまで近付かない主義らしく、未信者から付きまとわれたこともあったのですが、「不信者と釣り合わないくびきを共にするな」のみことばを信じて、心を許さなかったそうです。

自分から相手を見付けようとはせず、私の奨めでさえも聞きませんで、ひたすら主の導きを祈り、五年間も待ち望んでおりました時、「主はあしたの光のように必ず現れいで」（ホセア六・二三）のみことばを戴き、もうすぐ与えて下さるといふ確信が与えられたそうです。祈り続けて右にも左にも曲がらず、全幅の信頼をもつてみことばに依りすがっている純真な信仰を、母親として哀れさを覚えるほどでありました。

みことばを戴いてから十日経ち、二十日経つても何のしるしも、手ほどの雲も見えません。私

は辛抱できなくなりました。可哀相で見ておれず、牧師先生や兄達が推薦している女性が主の導きかも知れないと、息子に内緒で当たってみました。すると、その事がすぐに息子に知られ、いらぬ世話をやく、と立腹されました。それは主の導きではありませんでした。私も反省をして、ようやく祈りに打ち込むようになりました。その翌日、俄然、主は「あしたの光のように」暢之に現われ、幻をもって示されたそうですが、その相手の方があまりにも思いがけない女性でしたので、暢之も何度か打ち消し、高嶺の花と思っていたところ、「我に属ける義人は信仰によりて活くべし。もし退かば、わが心これを喜ばじ」（ヘブル十・三八）のみことばが与えられて勇氣百倍、牧師先生に申し入れたのが、正月元旦、新年聖会中のことでした。

ところが、教会にも、牧師館にもなくてはならない人だけに、一度は断られました。先生も主のお導きと信じて下さいまして、大切な悠子さんを、快く息子に与えて下さいました。その時の息子の毅然とした態度に、私もたじたじでありました。悠子さんは、牧師館において台所と雑用の一切を引き受けて、ご奉仕なさっておられる献身者だったからです。女性らしい物腰、いつも謙虚で、「塩で味付けられた言葉」とは、このような人のことでしょう。牧師夫人だったら最適の人を、献身者でもない息子にはおよそ不似合いで、これは人間的に組み合わせられたカップルではありません。婚約発表した時は、皆さんも驚かれたようでした。

私の少なからず心配になったことは、これは良すぎるということ。世間では「釣り合わぬは、不縁のもと」と言いますが、そんな結果にならぬかということでした。しかし、結婚してはや四ヶ月が経ちましたが、互いにますます信頼を深く致しております。私の心配は、杞憂に過ぎなかつ

たわけでした。

いつも慎み深く、主人の後に従う人、そして祈りの人で、台所に立ちながら、雑巾がけをしながらいつも祈っております。私共に対しても至れり尽くせり、真心と愛をもつて仕えてくれるので、勿体なく思っています。人に仕えるために生まれてきたような人でした。「主に仕えるように、夫に仕えなさい」。悠子さんが私の家に嫁として来られるまでは、世の中で聖書のみことばどおりに歩んでいる人なんて、おそらくおるまいと秘かに思っておりますが、ここに一人おることを認めざるを得ませんでした。

息子の何処を尊敬しているのか知りませんが、己れを虚しくして、「ハイ、ハイ」とよく仕えております。また、時には妹のように甘えたり、コロコロとよく笑い、二人とも見ていて非常にうれしそうです。そして、以前は無口であった息子が自信を持ち、近頃は冗談さえ飛ばすようになりました。悠子さんは、主人に絶対服従しながら、いつの間にか、自分の信仰のベースに足並みを揃えさせているから、大した力を持つているものだと驚いています。それは祈りの力ではないでしょうか。私たちまで、無理なく感化されつつあることに気付いています。

まことに主は、みことばどおり祈りに応えて、賢き妻を与えて下さいました。五年間、主が時をお延ばしになったのは、悠子さんにも、息子にとつても最善だったと思います。その期間



は、二人にとつて、信仰の訓練期として最も良き時であつたわけです。

「主を恐れる女はほめたたえられる」(箴言三一・三十)

こうして、賢き嫁をお備え下さつた主を崇め、この最高の幸せを毎日かみしめ、味合せていただき、心から感謝致しております。そして、息子たちも、私たちも共々に、良き牧者なる主に導かれて、愚かなりとも迷ふことなき道に歩み、この方を主と崇めて、励んでいきたいと願っております。

## 六 賢き妻は主から賜る

長男の時も、次男の時も、結婚のために祈つておりますとみことばを戴き、信仰深き女性を主は与えて下さいましたので、三男の時も祈つておりましたが、息子の状態を見ておりますと、いろんな事で心配せざるを得ませんでした。

松岡忠二郎先生が大塚公園教会で御用をなさつた時、アブラハムがイサクを燔祭に捧げたように、愛する息子を祭壇に捧げよとの御声を聞きましたので、意を決して、すべてを主に委ねて「お願いします」と祭壇の上に捧げました。すると、主はまず息子を変えて下さいました。それはもう、以前の古きものを見る事ができないまでに、霊肉共に新しくして下さつたのです。

そして自ら、結婚相手は共に主に従う者をと心に決め、祈るようになりました。しかしその後、三、四年経ちましたが、与えられませんでした。ところが、俄然、昭和五十年の新年聖会中に祈りが聞かれ、先にもお証ししましたように、献身者の悠子姉と結婚することになったのです。

結婚後は、私共と一緒に海老津の家に住むことになりました。早速、家庭集会で感謝会を致しましたが、その席上で悠子さんがすばらしいお証しをなさいました。

以下は、そのお証しです。

私は八幡前田教会に導かれて十五年になります。両親は早く亡くなり、弟と二人暮らしの中で市役所に勤めておりました。その頃、生活のことで悩み苦しんでおりました。何の希望もなく、自殺のことばかり考えていました。ある時、自殺しようと薬店に睡眠薬を買い求めて家に帰ってみますと、小学校の時の先生から便りが来ていました。それにはぜひ教会に行きなさいと書いてありました。私はあまり関心を持っていませんでしたが、八幡前田教会は通勤の途中にあつて屋根の上の十字架を見ていましたから、とにかく行ってみることにしました。

昭和三五年五月の事でした。後ろのベンチの左端に腰を降しました。その日のみことばは、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」(ヨハネ三・十六)でした。

私は母を亡くして、心は荒れすさんでいましたので、命まで捨てて愛して下さる主の愛に心を奪われまして、それからというものは、毎日のように教会に出入りするようになりました。

そこで、愛の暖かさを初めて味わいました。

弟が大学を出て、自分の責任を果たし終えた時、これから自分はどうのように生きていくべきか、祈りました。その時、私のために命を捨てて愛して下さる御愛に応えていく決心を致しました。そして、不純なものを持ったままでしたが、牧師館に住まわせていただくようになり、榎本先生

ご夫妻のもとで、実生活の中で信仰の道に歩んでおられることを学ばせていただきました。

私が牧師館に参りまして六年の間に、三人のお子様も結婚なさり、いよいよお二人きりになられての生活ぶり、昨年からは会堂建築を神様がお始めになったことなど、すばらしい恵みの時期に置いていただきました。

私の二十代は、自分に自信もありませんので、結婚のことなど考えずに過ごしましたが、二十代が終わろうとする頃、弟が結婚する時期になって父親を必要とする時、自分の夫となる人を父親代わりにも思うようになってから、結婚のことを考え、少しあせるようになりました。

それから、主の道を歩むことができる結婚を望んで、一生懸命祈りました。でも、なかなかその応答はありませんでした。そのうちに弟も良き伴侶を得、生活も落ち着いて参りました。

このたびの結婚が、祈りの応答であるという確信を、結婚後、主人と互いに証し合った時、これこそ神様のお導きで、祈りの応答であるということが分かりました。

それは六年前、結婚のことを祈りました時に与えられた御言は、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」（創世記十七・一）、次に「主の山に備えあり」（同二二・十四）のふたつでした。この御言が結婚によって道が開けるのか、一生独身で神に仕えていくのか分かりませんが、この御言によって平安が与えられました。

それから一年、二年と経つうちに、またもや前途に恐れと不安が来しました。私は本当に弱い者であることに気付き、もう一度崩れた祭壇を築き直し、献身の壇を整え、「主よ、私の将来は一切あなたにお委ね致します。どうぞ、御心のままになさって下さい」と祈って、悔い改めました。

そして、また祈りました。「不信仰の私をお許し下さい。私は先に与えられた御言では確信が持てません。どうぞ、もうひとつ御言を与えて下さい。そして確信が持てるようにして下さい」。その時、「主はあしたの光のように必ず現れいで」（ホセア六・三）というみことばを戴きました。ところが、主人も共通のみことばが与えられていたと聞き、神の御業の鮮やかな導きを感謝致しました。ですから、今度のこの御言は不動のものとなりました。

新年聖会が終わって、牧師先生を通して、正野さんのお話を承りました。その時、私は自信がありませんし、もつと適当な人がいらつしやるのに、私のような者が、気の毒で、勿体なく思いました。それから三日間、眠ることもできずに祈り続けました。「主よ、あなたはかつて『主の山に備えあり』とおつしやった。その後、『主はあしたの光のように必ず現れわれいで』とおつしやったのは、この方なのですか」とお尋ね致しました。すると主は、私の前に座っていらつしやるかのように、即座にご返事下さいました。「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」（ヨハネ二十・二九、二七）。私は今までの恐れも不安も消えて、感謝と喜びが湧いてきました。早速、「私のような者でも、よろしかったらお願いします」と返事しましたら、話はトントン拍子にまとまりました。

主人は本当に純粋な信仰を持っておられますので、もつと素敵な方が候補に上がるだろうと思つて、日頃から祈つておりましたが、まさか私が選ばれるとは夢にも思つていませんでした。また私も、主人に対して特別な感情を持っていませんでしたから、全く「人によらず、人の手によらず」で、その上「見ないで信ずる者はさいわいである」とのみことばをいただき、これこそ主



が備えて下さった道であることを確信することができました。

一月二三日に結婚式の日取りも決められたので、「そんなに急いで、後で後悔するようなことはありませんか」と主人に尋ねたほどでした。主人は五年前から、「主に従う女性が与えられますように」と祈り続けてきたようで、私が献身者ですから駄目だと思っておつたらしく、しかし祈つているうちに、「義人は信仰によりて活くべし」とのみことばに導かれて、決心したそうでございます。こういう事をもつて、二人を合わせて下さった主の、くすしき御業を褒め称えずにはいられません。

婚約後、交際することを許され、互いに祈り合い、証し合いつつ、主はいつも生きておられることを共に賛美して参りました。結婚後も、共に主の道に歩んでいきたいと願つております。どうぞ、皆様の祈りに加えていただきたくお願い致します。

ひと言、ひと言、感動しながら語つてくれました。私はこの証を聞きながら、息子にも同じみことばをお与えになり、共に導き給うた主は、誠に生きて働いておられることを思い、感謝でありませんでした。

長年の祈りでしたが、望みはかなえられ、私は親としての責任を果たし終え、ホッと一息ついております。

誠に神の言葉は生きていて、命があり、人の光でありました。それぞれの息子娘の家庭が、信仰によつて子々孫々語り伝えてくれるように、私達夫婦は朝に夕に祈り、孫の成長を楽しみに致

しております。

## 七 聖美の誕生

「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう」（ルカ一・三五）。

このみことばは、三男の嫁、悠子さんが結婚後まもなく与えられたと息子から耳打ちされた時、私は心に留めて、誰にも語りませんでした。

そして、悠子さんは、暢之さんのために赤ちゃんを産みたい、お母さん祈って下さい、と私に言つて来ました。それは一途に思い詰めているようで、悲壮にさえ思われ、私も陰で祈つておりました。主は祈りに応えて、妊娠したという朗報を悠子さんから聞きました時、うれしくて主に心から感謝しました。

こうして神様からいただいた胎児が、まだ三ヶ月に入つたばかりの「芽生え」の大切な時期に、「胎児の時から御臨在に近付かせなさい」と夫から命じられたらしく、悠子さんは夫に従うことアブラハムに仕えるサラのごとくでした。流産しやすいことを承知しておりながら、教会まで夫が運転する中古の小型車で三十分、ガタピシ揺れ通しですからたまりません。「お母さん、けさ出血があったのですが……」と悠子さんが言うものですから、「それごらん、私が注意したでしょう」と言つたものの、悠子さんは夫に絶対服従です。車に乗せた息子が悪いのですから、私は息子に「五ヶ月になるまでは不安定なのだから、車に乗せる無茶だけはやめなさい」と言いました。す

ると、「お母さんに言ったでしょう（与えられたという冒頭のみことばのこと）。だから一層、神様に近付かなければならないの。胎児だけ連れて行くわけにはいかず、悠子のお腹の中におるからね」。まるで漫談を聞いてみたいなことを言います。それが大真面目なのです。

孝行息子なのですが、こと神様の事になると、どこまでも自分の信念を押し通す始末の悪さ、その時も沈黙せざるを得ませんでした。祈れば出血はピタリと止まる。また車に乗せる。出血する、祈る。そんなことを繰り返すこと三回、私はたまりかねて、牧師先生に訴えました、

「うちの息子は、妊娠三ヶ月の一番大切な時期に、伝道集会、祈祷会、祷告会、夜の集会まで、往復一時間も車に乗せて困ります。私が言っても、言うことを聞きません。先生から止めるように言って下さい」。すると先生曰く、「それが暢之さんの信仰ですね」と、まるで誉めているようにおっしゃって、私への返事は忘れたかのように返ってきません。

その時、私の内なる声は、「暢之の信仰は牧師ゆずりで、御旨と信じたら一直線、右にも左にも曲がらぬ所はまことによく似ている。母親なら喜ぶべきで、その信仰に水を差すような行為は止めなさい」と、私はさすが引き下がるほかすべなく、陰で祈ることを心に定めました。それからしばらくは平穩無事の日々が続き、この調子なら胎盤も丈夫になって少々の無理にも耐えられ、五ヶ月まで続いてくれるだろうと安心していた矢先、四ヶ月に入った頃でした。真つ青な顔をして悠子さんが、私の部屋に入ってきて、「お母さん、流産しそうなんです。今までと違ってひどい出血ですから、産院に電話しましたらすぐ入院しなさいとおっしゃいました」と言うではありませんか。さあ大変です。妊婦は動かされないので布団を敷いて寝かせ、息子にすぐ帰るように電



孫と共に

話してから、入院の準備を致しました。

悠子さんのタンスを初めて開き、悠子さんの指示に従って、寝巻、下着類など必要な物を出しましたが、どの引き出しも一糸乱れぬ整頓に舌を巻いてしまいました。目をつむっていても、何処に何があるかはつきりしています。私だったら、言ったところに必ずあるとは限らない。そこに入れたつもりだが一体何処に置いたかしら、と言うことが一つや二つはあるものですが、悠子さんの場合はそういう調子ですから、揃えるのに手間はかかりませんでした。

報せを聞いて息子は驚いて帰ってくるだろう。そうしたらきつく叱ってやらねばならない。「責任を取りなさい」と言ってやろうか。だんだん息子に腹が立ってきて、心中穏やかではありません。いけない、静まらなければ、と心に言聞かせ、祈っているうちに穏やかな心を取り戻せました。

やがて、息子が帰ってきました。その顔を見るなり、つい愚痴が出て、「お母さんの言うことを聞いておれば、こんな失敗はなかったのに、今更後悔しても始まらない。すぐ入院させるから、車を廻しなさい」と言いました。息子は、そう言われたら、慌てて靴を履いて出ていくかと思えば、さにあらず、悠々泰然自若とした態度で、「まあまあ、落ち着きなさい。神様の御旨

を伺ってみるから……」。そう言つて三畳の間に入ると、ピシヤリ襖を閉めて出て来ません。私は呆氣に取られ、ただ嘖然としていました。

そこで私も祈れば良いのに、心遣いの方が先立つて、もし息子が入院せんでもいいと言ひ出したらどうしようか、悠子さんも入院できずに不安だろう、「心配しなくていいよ、私が加勢して上げるから……」、そう言つて励ましてやろう、そんな事を考えておりました。息子の方は、待てども待てども、襖が開きません。やっと出て来ました。何と言うだろうか、私は緊張しました。

息子は、寝ている悠子さんの枕元に正座して、「悠子、よく聞きなさい。神様はね、『我は全能の神なり、汝わが前に歩みて全かれよ』とおっしゃった。だから、医者に行く必要はない」。私の思つていたことが的中しましたので、語気を強めて「またそんな非常識なことを言う。悠子さんは暢之の言うことを聞かんで、自分の言うようにしなさい」と言つてやりました。悠子さんが可哀相でなりません。

すると息子は、言葉を継いで悠子さんに言いました、「僕は、強制はしないよ。あんたが信仰を持ってないなら、病院に連れて行つて上げる」。悠子さんは、すぐに「いいえ、お従いします」と答えました。その一言を聞いた息子は、布団の上に手を置いて力強く祈り始めました。私もそれに引きずられるように、心を合わせて祈りました。そうしたら驚くべし、「お母さん、暢之さんの祈りが聞かれて、良くなりました」と言つて、起き上がつて台所へ行き、夕飯の支度を始めたではありませんか。

聖書に、イエス様が熱病で苦しんでいたペテロの姑を、一言をもつてお癒しになつた時、姑は

すぐに起き上がったてイエス様をもてなしたという奇蹟の箇所を思い出し、昔も今も変わらぬ力をもつて働き下さる主を、共に崇めたことでもございました。その翌日は、私共の家庭集会でしたので、集会が終わってお茶をいただいている時、この出来事をお話し致しました。すると、感慨深く聞いておられたY姉が、「正野さん、あなたがたは信仰によつて一番良いことをなさいました」と言われて、こんなお証しをなさいました。

「私の娘も、悠子さんと同じ四ヶ月で出血したので、急いで入院させましたが、すぐに墮ろされてしまいました。悠子さんも入院していたら、恐らく墮ろされていますよ。それだけでなく、娘は出産料として十万円も支払ったうえ、胎児も四ヶ月から一人前に火葬認可証を取るため、市役所に届けを出すなどで精神的に参ってしまった、今だに病院通いが続いています。親たる者の心配も大変です。今日は本当に信仰のすばらしさを教えられました。よかったですね」と、心から祝して下さいました。

それを伺つて、私は心から感謝し、みことばに従う幸いを思ったことでもございます。また同時に、その娘さんがお気の毒で、祈らざるを得ませんでした。その後Y姉が、大きなお腹をかかえた娘さんを連れて集会にお見えになった時、共に喜び合ったことでした。

こうして、悠子さんは四ヶ月目を無事に終わり、五ヶ月も過ぎ、だんだんお腹も目立つようになってきましたが、ここにひとつの不安があったわけです。それは、何回となく流産しかけたので、果たして四肢五体完全な子が産まれるだろうか、という心配でした。

私はふと、何十年か前に私の妹から同じような心配を相談されたことを思い出しました。その頃は信仰はありませんし、医学のことも分かりませんので、何も確信もって答えることができませんでした。だから妹は、心配のあまり墮ろしてしまいました。でも今は、「祈りましょう。すべてをご存じの神様はきつと助けて下さる」、そう言つて、祈つておりました。ある日、祈り深い嫁に、主は明確なみことばを与えて下さいました。「信ぜば神の栄光を見んと」(ヨハネ十一・四十)、このみことばで全き平安が与えられたと証しております。

主の憐れみによつて、いろんな困難な中にも共にいまして豊かに守られ、いよいよ予定日が来ました。今日か、今日かと、待てども待てども産まれず、はや十日を過ぎました。掛り付けの医者には、全然下がつていないからまだだと、いった調子ですが、私たちは心配です。

さて、以前私たちが東郷にいた時、お世話になつた安永桃香おあちゃんのことを、いつか息子夫婦に証したことがありますが、今度久しぶりに訪問しようと思うと息子夫婦に話しましたら、自分たちもぜひ桃香おあちゃんに会いたいと言います。それで、春分の日の休日を利用して、何時産まれてもよいように産具の大風呂敷を息子の車に乗せて、おばあちゃんのおられる福岡町通り堂に参りました。ちょうど、産婦人科医でもある安永家の御養子桂先生も御在宅で、嫁の大腹と大荷物をご覧になり、「こりや、いい。専門医はここに控えているし……、ワツハハハ」と高笑いなさつたので、私たちも釣り込まれて一緒に笑いました。まさか嫁がお世話になるなんて、思つても見ないことでした。

その後、息子夫婦は祈りのうちに主の導きと信じて、安永先生に診察していただきました。そ

の結果、

- ① 骨盤が狭くて、お産できないこと
- ② 赤ちゃんが大きいこと
- ③ 予定日を過ぎていているのに、全然下がっていないこと
- ④ 母親が更年期に入っていること
- ⑤ 前置胎盤の恐れがあること 等々

余りにも悪条件が揃いすぎているので、帝王切開をしなければ危険だということになりました。果たして手術をすることが御旨だろうかと迷いました。息子は、牧師先生に相談したようでした。先生は「お産は病気ではない。また手術は罪でもない。それを通して神の栄光が現われるならば、それでよいではありませんか」との回答を得、安心して手術を受けることになりました。

手術が行われたのが、三月三十日。安永先生執刀のもとに、無事、オギヤーという一声を張り上げたのが、十三時三一分でした。「正野さん、女の子が産まれたので見に来て下さい」。看護婦さんの報せに、新生児室に飛んでいきました。同じような赤ちゃんが五人くらいズラリと並べてあります。

「正野さんの赤ちゃんは、こちらですよ」と言われて、隣の部屋に行ってみると、ガラス張りの保育器に入れられてありました。白い襦袢を着せられ、小さな足の裏に「正野」とマジックで書いてありました。色白く、足の指の長いのは父親似で、丸顔は母親似らしい。私は生命の不思議さを思い、主から賜わった「子」という感銘を覚え、深く感動致しました。



安永先生に呼ばれて医務室に参りますと、手術の結果を詳しく説明して下さいました。へその緒が短くて、胎児が下がることができなかつたこと、もしこれ以上放つていたら、胎児は栄養失調で石灰化して死に至ること、赤ちゃんの顔にその兆候が見え、ぎりぎりのところで助かりましたと、おっしゃいました。

まさに危機一髪のところを主は助けて下さった。私は安堵とともに、安永先生にお会いしたことは、主の導きであつたと、今更ながら感謝したことでございました。それから安永邸に参り、桃香おばあちゃんにお礼に上がりましたら、ニコニコしながら、「私は心配で心配で、ズーツと祈り続けていましたよ。正野のお母さんが訪問してくれたばかりに、こんな重荷を負わされてね」とおっしゃいましたので、申し訳ないと思いつながら、「おかげさまで、私はお任せして大安心でした」と、後は和気あいあい笑い声が絶えませんでした。九一歳のおばあちゃんが、お祝いに手作りの靴下を下さいました。嫁は感激して涙ぐみ、押し戴いて帰りました。

私は退院するまで付き添つておりました。その後も順調に回復し、四日後抜糸、十日後には退院できるようになりました。一回の痛み止め注射もせず、看護婦さんが不思議に思うほど、笑顔をもつて誰にでも応対しておりました。大手術の後ですから、痛くないはずはないと思いますが、すべて主が守り支えて下さったのでございましょう。母乳も多くて飲み切れず、吸い出して捨てるほど豊富に与えられました。

先日、牧師先生がお見舞いにこられた時、ちょうどお乳を含ませておりましたその姿をご覧になって、「かつて牧師館にいて、教会の御用に当たっていた悠子さんが、母親になってお乳を含ま

せている姿を、誰が想像することができたでしょうか」と、感懐深く眺めておられました。

パパになった息子が、レビ記のみことばから、聖く美しい女性となるようにと、「聖美(きよみ)」と命名致しました。はや五ヶ月、丸々と肥え、おとなしく、讚美歌を歌えば機嫌よく、両親の祈りの声を聞きつつ成長しております。

私も毎日、神と人に愛せられる子となりますようにと、祈る今日この頃でございます。

## 八 信ぜば神の栄光を見るべし

三男の失業、そのうえ妻は二度目の妊娠中の変調と悪い事が重なりました。この不況の時、大学生でも就職難の時に、自分の信仰上の条件が揃わないならば……と、三男はてこでも動きません。側で見ている方がハラハラしているのに、どつしり構えて落着き払っています。私は、新聞広告の求人欄を毎日見えています、食堂関係で日曜・祭日休みという所はほとんどありません。本人は礼拝と奉仕がしたいという願いが叶えられないはずはないと、与えられるまでは待つ覚悟だったので。待つこと五ヶ月、そして出産十日前に、やっと祈りに応えられて、希望どおり日曜祭日休みの勤めが見つかりました。そこは住宅も与えるというすばらしい条件で、給料も今までより良く、願ったり叶ったり、本当に不思議でした。

小さいながらも、元気な二番目の女の子が無事産まれました。父親の暢之は、もし信ぜば神の栄光を見るべしのみことばから、「栄子」と名付けました。その名にふさわしく、神の栄えを現わ

す子になってほしいと思います。上の子を預かって、約一ヶ月お守りいたしましたがおとなしくて物分りがよく、両親の信仰を受け継いで、お守りするのも楽で、楽しませていただきました。

満二歳になったばかりで、まだおしめが離れません。おしめが濡れると、腰をくねらせて、ここ、ここと教えてくれます。そのうえ、滅多に泣くことがないので、随分助かりました。一度、机の角に頭をぶつ付けて泣いてきたので、母親の仕草を真似て、頭に手を置いて祈ってあげたら、まだ痛いはずなのに、折れば治ったと信じているのでしよう、もうケロリとしています。また、どんなに機嫌の悪い時にも、家庭礼拝が始まると、すぐ自分の手提げを持ってきて、子供讚美歌を聞いて、ニコニコしながら私の調子に合わせて歌います。聖書を読み始めると、自分は日曜学校の金言ガードを取り出して見えています。讚美歌と聖書を心得ているのです。お祈りの時は、もみじのようなかわいい両手を合わせて、頭を下げています。その謙遜な態度は、大人の方が教えられます。子どもをこうして神に結びつける、これこそ最高の教育だと思っています。

三男の独身時代は内向性が強く、行く末を心配していましたが、「我、万物を新たにせん」とあるように、信仰によつて、神様は別人のように変えて下さいました。私の方は愚か者ですから、家、土地でも備えてやれば、この子が一人前にやっつけていけるのでは……そんなことを考えて、わずかな物を積み立てておったのですが、神様は「その子を私の所に連れて来なさい。捧げよ」と仰せになりました。「はいはい、捧げます」とお答えしましたが、それはただ自分の悩みだけを捧げているに過ぎないことを、主はお示し下さいました。主は、さらに「あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」(創世記二二・二)

と、聖書のこの箇所をもって、単に捧げますという口先だけではいけないことを教えて下さいました。しかし、私にはアブラハムほどの信仰がありませんから、数日激しい戦いが続きました。

結局、最後には「汝は我に従へ」(ヨハネ二一・二二)のみことばによって、アブラハムのように心から三男を捧げることができました。その時から、三男が変わってきました。そして、神様はこの信仰の篤い、すばらしい助け人を与えて下さったのでした。人間的にはおよそ不釣り合いのようでしたが、今では最高の配偶者だったと主を崇めています。夫婦仲も良く、二人の子宝に恵まれ、主の証人として、同じ目的のもとに、主の喜び給う道に進んでいることを心から感謝しております。

## 九 昨日も今日も永遠に変わらず

仕事の関係で千葉に住んでいる長男の眞宏が、一週間の研修のため久しぶりに帰って来ました。八幡にいる三男暢之一家も総出で来て、にぎやかな夕食を楽しみました。それが終わると、いつものように家庭礼拝を致しました。互いに信仰の証しをして、夜の更けるのも忘れ、もう十二時近くになっていました。その時、長男がこんな証ししてくれました。

八月に青年研修会が御殿場の東山荘であった時、金町教会が世話の当番になったので、自分も奉仕に行った。日曜学校の中学生五人も連れて行ったが、その生徒達が一日経ち、二日経つても冴えない顔をして、人とも交わろうとせず、五人が寄り固まってシヨボンとしているの、「説

教を聞いてどうだった？」と聞いても、ただ「分かりません」と答えるだけだった。せつかく連れて来たのに、このままでは申し訳ないと思い、会場の受付をしながら、集会の間中必死で祈った。「主よ、今日が最後の日です。生徒達は説教が分からないと言っています。恵みを受けないで帰すわけにはいきません。御聖霊によって光を与えて下さい。パンくずのような恵みでも良いですから、生徒達を恵んで下さい」。

癲癩の子を持つカナンの女のように、すがりつくような気持で祈っていると、「あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いている。また、主が彼になさったことの結末を見て、主がいかに慈愛とあわれみとに富んだかたであるかが、わかるはずである」(ヤコブ五・十一)のみことばが与えられ、主の応答を確信することができた。集会が終わると、生徒が私の所に集まってきた。みんなの顔が喜びに輝いていた。こちらが何も尋ねないのに、「岩井先生のお話で大変恵まれました。とてもよく分かりました」と喜び合っていた。私は、主がみことばどおりに応えて下さったことを心から感謝していた。次の週の日曜学校では、私の説教がスースー受け入れられている様子が見えるようだった。そして、その中の二人が、洗礼を受けたいと申し出た、という内容であった。

主の真実な応答に感激しながら、昨日も今日も永遠に変わり給わぬ生ける主を崇め、みんなで讚美しました。



第三章  
母の証し集  
「生活の中で」

## 一 ゆるし

五月十一日、夕方の出来事である。流し台の汚れ物を洗っていると、突然「ガチャン！ ガラガラッ！」という食堂玄関のガラス戸が割れる音に、思わず濡れた手のまま表へ飛び出した。何度も被害を受けているからである。逃げていく車の番号を目で追ったが、確かめることはできなかった。遣り切れぬ思いで家に入ろうとした時、一台の単車が家の前に止まった。

「やっぱり破れとるね。すみません、すぐ入れますから」。「そうですか、それは済みません」。

私は丁寧にお辞儀をした。四十歳くらいの頑丈な労働者風の男であった。車にまたがって帰ろうとしたので、住所と氏名を聞くことを忘れなかった。世の中には正直者もあるものだ、私はほのぼのとした気持ちで家の中に入った途端、「アッ！」と声を上げた。表ガラスだけではなかった。単車が跳ねた小石はガラス戸を突き抜けて、大陳列の鏡板を割っていたのである。「もしもし！もしもし！」、金切り声を張上げて叫んだ。男の人は振り返って、変な顔をしながら引き返した。「これをちよつと見て下さい」と、陳列を指差した。

男の人は被害甚大と思ったのか、見る見る顔面蒼白になった。しばらく沈黙が続いたが、

「こりやひどい。奥さん半々にしましょうや」と言った。私は気の毒にも思ったが、どうも筋の通らぬ話に思えてならない。「半々なんておっしゃるのは無理ですよ。あなたが石を避けさえすれば、こんなことにならなくて済んだでしょう」。納得がいかないのです、思ったまま主張した。

ところが、ますます変なことを言い出した、「奥さん、そんなこすいことを言うもんじゃない。

今時、逃げる人が多いのに、俺のような正直者がどこに居るな。俺が引き返さんじゃったら、あんたが皆かぶらななんとばい。それを俺が半分持とうと言うとるんに」。これでも分からんかというような口振りである。何だか、私が悪い事をしたように思えてくる。いやいや、そんなことはない。私の言い分が正しい。自分から正直者と言う人に限って、正直者のおつたためしがない。もしかしたら、私が追い掛けた時、車台番号を見られたと思つて、訴えられることを恐れて引き返したに違いない。そんな意地悪な考えも浮かんだ。「負けてなるものか」、心の中で自分を励ましていた。

「あなたのおつしやる事、おかしいと思いませんか。割った人が弁償するのは、当たり前のことではないでしょうか。とにかく、ここで言い合つても仕方ないから、警察の方に聞いてもらえませんか」。これなら先方も納得ゆくだろうし、それで私に不利になることになつても、警察の言うとおりにしようと思つた。ところが、警察と聞いて怖じたのか、「払いますよ、払いますよ。払つたらいいんじゃないやろう」。元通りにして下されば、何も言うことはありません。それではお願いします」。ということになつて、別れた。

私は、その言葉を信じて何日も待つたが、何の音沙汰もない。表ガラスだけは用心のため、すぐガラス屋に入れてもらい、領収書は大切に取つておいた。支払う誠意が感じられないので、こんな場合どうしたら良いか、隣の関門急行バスの所長さんに聞いてみた。「そんな横着な奴は、警察に頼んで、懲らしめてやりなさい」とおつしやつたので、早速派出所に出掛けた。警察という所は、いっそ関係のない所でもなかつた。父が材木商をしていたので、長大物許可証を貰いに何



度も足を運び、冷やかされた思い出もある。だから別に堅くなることはなかったが、通行人からチラリとこちらを見られると、あまり居り心地のよい所でもなかった。

派出所にはたった一人の警官が腰掛けていられた。相当年配の方で、落ち着いた低い声と温厚な態度は好感が持てた。この道で苦勞なさつたのであろう、額のしわが物語っているように思われた。

「何の御用ですか。住所、氏名は？」。

型通りの尋ね方である。日誌であろうか、部厚い帳面に何か書いておられる。

私は今までのいきさつを、ありのまま申し上げた。

警官は、静かに聞いておられたが、

「被害を受けた時に来ればよかった。その時の立会人がおりますか」。

「立会人ですか」。予期しない言葉に戸惑った。

「証人のことですか」。

「証人ですか。そんな人はおりません。しかし、本人が認めているのですから……」。

「ところがね、自分で認めておきながら、証人がいないと第三者には分からないのだから、否定すれば事は面倒になる。そんな時は誰でもよいから、立会人を立てておくことだね」。

なるほど、そんな悪い人でなければよいが……、何か不安になってきた。そこでお願いした、

「私が請求するより、あなたから言っていたただくほうが効果があると思うのですが……」。

「それが、そうはゆかんとですか」。

「どうしてですか」。

「戦前までは、そういう取り立てまでやっとなんだがね。戦後道德感が薄れて、成功したためしかない。かえって逆ねじ喰わされるようになって、それに人手不足のために、そういうことは家庭裁判所に持つて行くようになってるのね」。気の毒そうにおっしゃった。

「それでは、全然だめですか」。

「そういうことはすなわ、戦後、警察の威力も地に落ちて、あなたの意に沿うこともできんで、不服じゃろうけんども」。仕方がないというのであろう。腰の刀剣も泣いているように思われた。「それでは何ですか、警察の仕事は泥棒を捕まえることと、交通取締が専門ですか」。警察はあまり頼りにならない存在に思えて、不服でたまらなかつた。私の言い方が余程おもしろかつたのか、顔を天上に向けてカツカツと大笑された。私はちつとも可笑しくもおもしろくもなかつた。

「あなたの言いなさるとおりですたい。一口に言えば、犯罪を取り締まる所、つまり暴力に対してどこまでもあなた方を守り、味方になって上げるが、今のあなたの場合、犯罪とは認められんから、示談に持つていくしかないでしょう。それで解決できん時は、家庭裁判所に訴えなさい」。親切丁寧に教えて下さった。

もうこれ以上いる必要もないので、お礼を言つてすぐごと家に帰つた。

「もしかしたら、案外よい人かもしれない」、私は一縷の希望を持つて、丁寧に手紙を書いて送つた。事件から一週間が経つていた。

翌々日、本人ではなく、代理人が来られた。てつきり仲裁に来られたのだらうと思つた。この

人の言うことを聞いて上げようと思って、善意を持って対応した。ところが、さにあらず、

「実は〇〇さんに頼まれて来ました。私は事情は知りませんが、これだけ言ってもらえばよいと言われました」。

「どういうことですか」。

「あのう…、そのう…」。何だか言いにくそうです。遠慮せずとも、たいいていの事は聞いて上げるのにも思いつつ、次の言葉を遅しと待った。

「あのですね…、実は自分の車が小石を跳ねたと思ったが、よく考えてみると、自分の車ではなく、後ろから来た車だということでした。一気に言ってしまうとホツとした様子で、もう帰ろうと浮き足立っているのである。

「まあ！ 本当にそんなことをおっしゃったのですか。あの人が石を跳ねたとき、私はすぐ追ったのですよ。後ろからは何も来ませんでした」。

「…」。

「何も関係のないあなたをよこすこと自体が、おかしいとお思いになりませんか？ 本当にそう信じている人なら、自分が来たらよいでしょう。そんな見え透いた嘘をおっしゃって支払わないつもりでしょうけど、こちらにも考えがありますとそう言つて下さい」。先方の行爲を決して許すまい、また許してはならない、そのためにどんなに費用がかかっても戦おうと思った。

「あのう、お気の毒ですが、警察では取り扱わないそうです」。

すでに、そういう事を調査のうえで、計画的な行爲であることは明白である。

「そのために裁判所というものがちゃんとあります。そちらが御免なさいと言って来たのであれば、あるいは許して上げたかもしれないけど、もう一銭もまけません。帰られたら、そうおっしゃって下さい」。

これ以上、言う必要はなかった。それで「ご苦労さま」と言つて別れた。ところが、その人が帰つた後がいけなかった。ムラムラと怒りがこみあげてどうしようもない。と言つて、訴えるほどの金額でもなし、さりとて許してもおけない。所長さんがおっしゃつたように、懲らしめてやりたい。しかし、裁判するには煩わしいし、忘れられたらどんなによいだろう。そう思つていと、あの男の顔が目には浮かぶ。そしてこちらを見て、ニタリニタリ笑つてゐる。

「おまえが欲なことを言うから、ざまあみろ」。そう言つてゐるようで、歯がゆい。怒りは燃え上がり、胸の動悸は高鳴る。何としてもいやな思い、押しつぶされそうだ。悔し涙か、自分の卑しい心を悲しむ涙か、泣けて泣けて仕方がない。

おまえはそれでも信仰者か、もつと信仰者らしく振る舞つたらどうか。…そんなこと言つたつて、これが腹立てずにおれようか。私がサムソンのように強かつたら、あの男を投げ飛ばしてやりたい。

「そうだそうだ、信仰、信仰と言うけど、信仰したつて何の役にも立んよ」。

「アツ悪魔だ。悪魔が爪を研いでいるぞ。わが心よ、しっかりせよ。お前には悪魔よりも強い方がついでいるぞ」。

イエス様、早く来て下さい。悪魔を追い出して下さい。そして私の心を静めて下さい。憎らし

くて許せません。許したいと思うのですが、はがゆくてとても許せません。心の中に黒潮が渦巻き、荒れ狂うています。苦しいです。助けて下さい。

あなたは嵐の海に向かって、「波よ、静まれ」と命じられた時、一言で波が穏やかになりました。その平安が欲しいのです。今、お言葉を下さい。私に何の力のないことが分かりました。弱い私を憐れんで下さい。あなたはいつも私の願いを聞いて下さいました。あの時も、この時も…。主の恵みを数えている時、静かな細き声があった、

「上着を取ろうとする者には、下着も与えなさい」。

上着…、上着…、そうだ！主よ、あなたの上着は役人共が暴力をもつて剥ぎ取り、くじ引きして自分の物にしました。それでもあなたは、取り返そうともなさらず、黙々となすがままに、裸の恥を群衆の前にさらけなさいました。上着のみか、ご自身をさえ惜しまず捧げなさいました。罵られて罵り返さず、苦しめられて激しき言葉をいださず…ああ、それなのに…わずか一枚のガラスのために…私は愚か者でした。ごめんなさい。ごめんなさい。悔いと感謝の涙があふれ流れた。

「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子には枕する所がない」（ルカ九・五八）。

三三年の間、一点の罪なき神の御一人子が、私たちと同じ試練を受け、人々からは冷たい目で見られました。それでも多くの苦しめる人、悲しみの人に喜びを与え、盲人の目を開け、重い皮膚病の人を癒し、日夜休みなく町々村々を巡り給いました。そして最後は、多くの人を救いし

御手と御足は心なき者のために釘もて打ち込まれ、強盗殺人者と同罪の十字架にかかられました。頭にはいばらの冠をかぶせられ、悪口、ざん言の中で血潮を流され、その御苦痛はいかばかりだったでしょう。「父よ、彼らを赦し給へ。その為す所を知らざればなり」と、憎むべき敵のために祈られました。何たる崇高な御愛でしょう。あなたの御愛は測り知ることができません。「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし」。人から捨てられたのみか、父なる神からも捨てられ給いました。

主よ、申し訳ありません。それは私が呪われ、捨てられるべきです。その十字架は私がかかるべきものでした。主は、私が今まで犯した罪を許さんとて、罪の固まりのような私を徹底的に潔めるために、私の身代わりとなつて死んで下さいました。許されし身の大恩を忘れて、人の過ちを許さず、裁き、憎んでおりました。私は何という愚か者でしょう、お許し下さい。私は涙とともにひれふし折つた。

その時、全き平安とはこういうものでしょうか。荒海のように荒れ狂っていた憎しみも、跡形なく消え去り、不思議に変えられた自分を見たのでした。自分の努力で許そうと願つてできなかった許しが、聖霊の力によつて、一瞬のうちに變えて下さったのです。ああ、人を許すことは、何とすばらしいことでしょう。受けるより与えるほうが幸いであるという境地が、分かるような気がします。私は、あの男の人が可哀相になつてきた。私がすっかり許しているのも知らずに、家の前を通るたびに心を刺されて入るのではないだろうか。「主よ、どうぞ、あの人の罪も許して上げて下さい。そしてあなたの福音にあずかりますように」と祈つた。

勝利！勝利！平安！ありがとうございます。怒り、憎しみから解放されたこの喜び、この平安。讚美は口を突いて出、讚美歌五三一番「心の雄琴に」を歌っていた。

## 二 詩「スリッパさん」

名前のはいつたスリッパ

その名のあるじは 今はいない

それなのに 礼拝の日はいつも

きちんと 両足そろえて

主が来るのを待っている

ある信者が

そのスリッパに手を置いて祈った

「早く帰って来ますように」

あなたの心を察してか

ある日 持ち主に会ったので

スリッパさんが あなたを待っているよ

と言ったら



すっかり忘れていた

けど 持ち帰るほどのものではなし

名前が残っていやだから

始末しとつて…と

可哀相な 可哀相なスリッパさん

わたしは不憫でたまらない

何も言わないから

よけいにたまらないの

この前 そつと 履いて

あなたの表情をうかがったの

そつと耳に手を当ててね

そしたら おどろいたの

あなたは 決して

嘆いたりなんかしてなかったのね

わたしはお馬鹿さんでした

感傷的で 泣いたりして



だけどあなたは立派です  
人の目につかぬ所で

人の足を守って

踏まれても 捨てられても

だまつて 黙々と使命に生き

古びれて色も褪せたけど

誰にでも真実で

誰にでも愛され

見栄もはらず

誰からお礼も言われず

主の日まで

キリストに生きることを

生きがいとして…

あなたのささやき

よく聞こえたわ

わたしも

あなたのようにになりたい

ありがとう スリッパさん

### 三 あなたこそわたしの主

吉田稲城先生の記念会を十二月七日にしますから、お証しして下さいという電話があったので、必ず参りますと返事をした。行こうと思えば、行けると思ったからでした。ところが思わぬ災難が起こって、行けなくなろうとは…。

その日、記念会は午後だから、午前中に畑に撒く鶏糞をいただきに、近くの鶏舎に出掛けました。鶏舎の中の暗がり、土間が濡れてズルズルしているのに気付かず、踏み入れた途端に足が滑って、たたきの上に仰向けにひっくり返ってしまった。高いビルから落ちて地面に叩きつけられたような衝撃を受け、しばらくは物も言えず、目も見えず、体は石像のように動かなかった。

近くにいた人たちが駆け付けて来て、起こそうとされたが、しばらくこのままのしておいて下さいと頼んだ。誰かが気を効かせて、トラックを持ってきて寝たまま家まで運んで下さった。公民館に行っている主人を電話で呼び出してもらい、帰って来てもらった。記念会にはとても行ける状態ではないので、電報で欠席のお知らせをした。本当に申し訳ないと思った。この時、つくづく主の許しなくば、何事もできないことを悟った。当然、出席できると思っ、このために祈ることもしなかった。「事毎に祈れ」とのみことばが、ひどく胸にこたえた。

それからもう五十日も経ったが、体がガタガタになって全体が痛み、仕事もできない。礼拝の椅子に腰を降ろすのも苦痛であった。医者に診せ、レントゲンを撮り、薬も飲んだが、効果がなかった。途中で止めてしまった。神癒で折っていた時、「人には能わざるところなり、されど神においてはしからず」というみことばを戴いた。次の週も折っていたかと、また同じみことばであった。

寝ても醒めても、このみことばで繰り返し祈った。ある時、信仰持って働いてみようと思ひ、茶わんを洗いかけたが、胸が痛くて思わず投げ出してしまった。情けなくなってくる。主人はやさしく、「寝ていなさい」と言ってくれけれど、そうそう寝てもいられない。ある信者の方から、肋間神経痛になって一年で治ればいいほうだと聞かされて、ますます心細くなった。鞭打ち症と同じで、一生治らぬかも知れないと不信仰が頭をもたげた。これではならぬ、信仰を持つとうと奮い立つようにして木曜会（聖書講話の集会）に出席した。

「主はわたしの義にしたがってわたしに報い、わたしの手の清きにしたがってわたしに報いかえされました」（詩篇十八・二十）。

「たとひあなたがたの罪は緋のようであつても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ」（イザヤ一・十八）。

このみことばによつて、強く自分の不信仰を示された。主の贖いによつて、不義な者、不信仰な者を義人として下さった奇蹟に思い至った時、そうだ、「人にはなし能わざるところなり、神においてはしからず」、そうでした、このように限りなく愛し、恵んで下さった神様、私を贖つて下

さった御方が、どうして元通り健康を返して下さらないことがあるのか、そういう信仰がお腹の底から湧き出る泉のように満たされた。それで、思わず先生にお話をし、感謝の祈りを捧げていただいた。帰る時の身の軽かったこと、信仰とはこれだと思った。しかし、痛みがすぐになくなったわけではない。

「彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によつて強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができる」と確信した」(ローマ四・二十〇二一)。

私は神癒を確信していた。長い間畑の手入れを怠っていたので、鍬を取つて畑に出た。サンサンと輝く太陽を体いっぱいを受けて、喜びが溢れる。すでに癒されていた。

「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によつて、われわれはいやされたのだ」(イザヤ五三・五)。

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ三・十六)。

主は生きておられる。卑しき我をさえ愛し、命を給う。もはや私は恐れない。誰が何と言おうと、主がいませば、心安しである。私は言う、「あなたこそ、わたしの主、あなたのほかにわたしの幸いはない」と。

#### 四 すばらしい一日

昨日は、すばらしく嬉しい一日を過ごしたことでした。

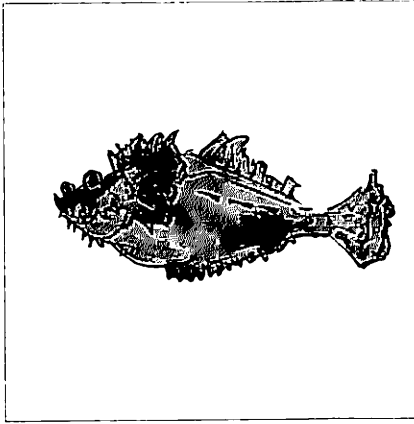
T姉から、伝道に行つて下さいと頼まれたことを思い出し、朝の涼しい内に仕事に取りかかることにしました。時計は見ませんでした。薄暗い内に起きて、畑を掘り起こしました。すがすがしい朝、玉のような汗を流して働くことの、えも言えぬ喜びを味わっているうちに、山の端より赤い太陽が顔を出す。何とすばらしい景色でしょう。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、

大空はみ手のわざをしめす」(詩篇十九・一)。

美しい空を見上げ、鍬を持ったまま、しばし手を休めて黙想していると、おのずから感謝が湧き出るのでした。仕事が終わったのは、十時過ぎでした。それから、T姉の所へ出掛けたのですが、行く道々集会案内をしながら、初盆の家があったので、そこでも座敷に上がつて集会案内をして、T姉宅に行きました。

突然の訪問でしたので、T姉も戸惑っていました。参りましょうと一緒に出掛けました。訪問先は、山のふもとにある一人住まいのおばあさん宅で、足の関節に膿がたまつて困つておられるという方でした。驚いたことに、T姉がすでに伝道されているとのことでした。「私は長い間婦人病で困っていました。この方(私を指して)からキリスト様のお話を聞いて、信じさえすればキリスト様がどんな病気でも治して下さいと教えられ、教会に連れて行っていただきましたら、



とてもありがたいお話で、礼拝だけでは物足らず、木曜会にも行っています。そして一生懸命祈っていたら、涙が出て、有難くてたまりませんでした。その時、目の前が輝いて、今覚えていませんが、何かみことばを頂いたと思います。それと同時に全身にぐっと力が入り、自分でも不思議なくらいでした。その事があつてから、すっかり下り物が止まって、癒されておりました。ただ信じただけです。信じたらいいのですよ。有難いではありませんか」。このように語りながら、何度も何度も涙を拭いておりました。

もうそれだけでも、そのおばあさんは信じたようで、自分もそのような教会に出してもらいたいけど、歩いたら足が悪くなるからと、まだ少し躊躇はしておりましたが、とにかくT姉の信仰のすばらしさに驚かされました。まだ数えるくらいしか教会に行っていないのに、確かに力を受けておられると感じました。自分は伝道できませんからと私を引き出したわけですが、私はただ横でT姉の上に働いておられる神様の御業を驚きの目をもって拝見させて頂いたにすぎなかったのです。私は最後に罪の問題と十字架の救いについてお話し、そのお宅を辞したことでした。(その方は後に海老津集会に来られるようになった。)

## 五 先見の明

「神は、神を愛する者たち、すなわちご計画に従つて召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」(ローマ八・二八)。

ある日、一通の移転通知の葉書を受取つた。それは二年ほど前まで食堂をしていた黒崎にいるKさんからであつた。それにはこう書いてあつた。一日通過車両台数三万台、その騒音たるや平均八十ホーン以上、四エチル鉛、一酸化炭素、亜硫酸ガス、降塵等々。『よくぞ住んでいる』と人に笑われても、「殖生の宿」とやせ我慢はしたものの、遂に地獄よりの脱出を決意。四十年住み慣れた黒崎を離れて左記へ転居しました、という内容であつた。この通知に注目させられたのは、どうしてそんなに公害がひどくなつたのだらうということだつた。

Kさんは生涯ここに住むつもりで、家の改造までしたのに、どうしてそこを捨てて転居したのだらう。それに一日三万台というのも、オーバーに思えてならなかつた。それで礼拝の帰りに黒崎に寄つてみた。この暑さの中を物好きのように思われるが、実は食堂を人に譲つて引上げてきたので、その店が気になつたのである。もう関係がないと言えばそれまでだが、どのようになつているのか見たかつたのだ。

まず新しくできた大きな陸橋が目に入った。聞けば直方方面から来た国道二〇〇号線が国道三号線を横切つて、急な陸橋を通り若松方面に行けるようになったのだという。

一日の車両台数三万台は偽りではなく、事実、車の切れ目はない。しかも車の騒音とほこりはすごいものである。これでは逃げだすのも無理はない。歩行者の影は稀で、これはただに暑さのせいだけではないようだ。あまりの変わりように驚いていると、誰かが私の肩をポンと叩いた。振り返ってみると、豆腐屋の奥さんである。「まあ正野さん、珍しいじゃあないですか。どうしていらっしやいますか。ここはもうあきません。あなたたちは一番いい時に商売しなされた。先見の明があつたとみんな言うていますよ。本当に運のいい人」とおっしゃった。

私に先見の明などあるはずはない。裏話をするなら、主人も私も体が弱り、やつていくのが大変になったので、人に権利を譲つたまでのことである。八年間ここに住み食堂をしたが、主の祝福は私たちを一生遊んで暮らせる身分にして下さったのである。その恵みに感じて、今は教会なき地に福音の看板を掲げ、救霊のために祈っている。

帰る道すがら、豆腐屋の奥さんが言った「先見の明」とやらを思い出し、神様は先の先まで見通される方である、もし続けて商売をしていたら、どちらも病気になるていただろうし、だれも食堂の権利金を払ってまで譲り受ける人はいなかったに違いないと思つた。現に二、三軒店を辞めて、空き家になつていないか。私は心から主を褒め称えていた。

「主の祝福は人を富ませる、主はこれになんの悲しみをも加えない」（箴言十・一二）。

八月十九日は、毎週開かれていた海老津集会の第六十回を迎える。始めてからちようど一年になるので、感謝会をすることになっている。主は次々と救われる方を起こしておつて下さる。

「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである」（詩篇三四・八）。



私は、主が与えて下さっている嗣業を生きがいとして、喜びをもって仕えさせていただいてるのである。私たちは目の前の事しか見えぬが、神は天地の造られざる前より、全てをご存じなのだ。私は、決意を新たにして帰ってきた。

## 六 高尚な生活

「わたしは主なる神をわが避け所として、あなたのもろもろのみわざを宣べ伝えるであろう」（詩篇七三・二一八）。

「お母さん、一体どうしますか」。

「……」。

「僕は神様の御旨ならば、どちらだつて構わないよ」。

これは長男がお嫁さんを選ぶのに、同居か別居かはつきりしてもらわないと、選ぶ都合があるというのです。

神の御旨と信じて、別居したいと思う道は閉ざされているように思われ、同居して、息子の負担にはなりたくないし、どっちつかずで、どちらが御旨か分からなくなっていました。

「僕は思うに、お母さんに子守で終らせたくないなあ。お母さんは、これからは高尚な生活をしてもらいたいと思う」、と長男が言った。高尚な生活……？

よく分からないが、息子が精一杯の好意を示しているに違いない。すごく良い事のように思わ

れたし、返事に窮していた時だったので、助け舟の思いがして言った、

「私も、できればそんな生活をしたと思うけどね」。

しばらくして、独り言のように、長男が言った、

「僕はお嫁さんまで稼がせたくないなあ」。

長男の気持も分からぬではないが、正直なところ難しいことであった。

私が言った、「誰でも家を建てるには、一苦労しなくては建つものではないよ。買ってある海老津の土地は、そのまま放っておくつもりね」。今度は、長男が返答できなかった。

親子の間柄ですから、理想は言ってみるものの、現実には厳しいものがあつた。随分、食違があつて、算数の問題を解くようにはいかないものである。翌日になつても、高尚な生活とはどんなことだろうか、私は考え続けていた。茶室にでも入つて、お茶を立て、生け花でも生けるような結構なご身分になることでもなさそうに思える。本棚から大辞典をめくつてみた。高尚とは、程度の高いこと、尊敬の情をもつて仰視せられる性質、と書いてあつた。

長男は、それから毎日勤めから帰ると、机に向かつて家の設計に余念がない。書店からカラー写真入りの新築設計の本を買つて、研究に没頭している様子である。私は、長男のなすがままに身を委ねることにし、思い煩いまいと心に定めた。(昭和四一年七月十日記)

机の引き出しを整理していると、こんな私の手記を見付けた。日付を見ると、はや四年を経過している。その間いろいろな出来事に出会つたが、すべて主の祝福の中におかれ、主の恵み深き

ことを味わい、人生は実に愉快だなあと思った。主の御業を崇めたいと思う。

子宝とはよく言ったもので、三人の息子たちのお陰で、思いのほか早く家が建った。これも息子たちが主を信じて、それぞれ祝福を戴いた賜物でした。土地も、最初は六十坪もあればと言っていたのが、倍以上の広さが与えられ、家も十四、五坪で辛抱するつもりがこれも倍の広さになった。それで、私たちは神の御旨と信じて、長男夫婦と同居しましたが、一年あまりで、私たちだけで経済的にやっていける道が開けた。すると、長男はかねての望みどおり、共稼を止めて別居すべく、ちょうど市営住宅の管理人宅が空いたので、そこに入った。ここは勤めにも教会にも近く、こんな都合の良いことはなかった。二人目の子どもがすぐでき、これからが大変なのに、私たちのことを考えてであろう。私たちは心から感謝している。

お陰さまで静かな生活を楽しむことができたばかりか、「福音の家」の看板を掲げた責任もあつて、ひたすら祈りの奉仕をさせていただくことができた。これらの事も、みな主の祝福と思つている。

振り返つてみると、主は力強い御手をもつて救霊の業を行なつて下さった。最初に救われたのは若いご夫人で、ルカ八章にある十二年間長血を患った女がイエス様の裾に触った途端に癒された、そのままの現代版であつた。今も変わらぬ力が働いていることを見て、主を崇めました。

次に六七歳のおばあさんが救われ、天涯孤独の身を泣いて暮らしていたのが、喜んで喜んで集會を楽しみにしていращやる。また、ノイローゼの中年のご婦人が導かれて熱心に励んでおられる。十年間精神病で言葉も忘れていた四十歳の男の方が癒されて、職に就くことができた。こ

の方を松岡先生の聖会に連れていったところ、感動して涙を流し、ハンカチを口に押し込んでヒ―ヒ―言つて泣いていた。十字架の愛を知ったからでしょう。御聖霊の働きでなくて何でしょう。

このような全知全能の神に任せさせていただく私たちは、何と幸いなことか。朝から讚美歌を歌い、聖書を読むこととお祈りをするのが私たちの仕事である。何の御用もできないと思つていたが、いつの間にかお証しをさせていただくようになり、悩みを持ちかけられたり、相談を受けたり、ますます忙しくなりそうである。月一回だった集会も毎週開かれるようになり、集会が待遠しいという人も出てくるようになった。本当に私たち夫婦は、生きがいのある日々を送れるようになったのだ。

「受けるより、与えるほうが幸いである」ことの喜びを知った。受けた恵みを与えると、喜びも倍加される。救われた人たちが感謝されている姿を見ることは、私たちにとつて無上の喜びである。悩み悲しんでいる人に、主の十字架を説き、三二番の讚美歌を一人で歌えるまで繰り返し歌つてあげて、もし悲しくなったらイエス様の十字架を仰いで、この歌を歌いなさいよと教えてあげたら、その方がすっかり変わった。ご主人が奥さんの変わり方に驚いて、お札にこられたこともあった。

子どもたちもそれぞれ信仰を持って、岡山に、福岡に、八幡にと遣わされて、教会の御用をさせていただいている。日曜日は孫の守をしながら一緒に日曜学校に出るのも、楽しみのひとつである。礼拝の後は長男一家と会つてご馳走を食べさせてもらつたり、海老津に泊まつたりする。長男の嫁もそうだが、次男の嫁も感心するほど筆まめであつて、毎週のように便りを書いてよこ

してくれる。

主人は暇さえあれば俳句をひねっているし、私は色紙に俳画と聖句を書いて求道者の方に贈つたり、時には下手なオルガンを鳴らして楽しんでるが、一向に上達しない。自然が残された田舎道を散歩しながら、神の愛に満たされ御愛に浸るとき、あまりの幸せに涙することもしばしばである。人の世話にもならず、祈りの生活と悠々自適の日々、これこそ「高尚な生活」だろうと信じている。

四年前のことを思うと、とてもこのような生活ができるとは思ひもできなかったが、主が私たちの祈りに応えて、無理なく最善に導いて下さった。主は、今後「高尚な生活」を送るだけでなく、高尚な人となることを望んでおつて下さると思うが、選んで下さった方によつて、この事もならせて下さるに違いないと信じ、感謝しつつ筆を置くことにする。

## 七 目を覚ましていなさい

昭和四五年九月六日の聖日の事であった。

私たちは聖日毎に教会で長男夫婦と孫たちの顔を見るのが、楽しみのひとつになっていた。

長男には一昨年に男子が生まれ、昨年は女の子が生まれた。年子の子を抱えて忙しいのに、マは毎週のように祈禱会のみことばや孫たちの様子を報せて、私たちを喜ばせていた。

私たちも孫というより息子夫婦が喜ぶだろうと、その日もいろいろな物を風呂敷に包んで、主

人が大事そうに抱えて国電に乗った。教会は海老津から五つ先の八幡駅から歩いて十分程の処にある。その日のみことばは、「だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである」(マタイ二五・十三)であった。

さて、礼拝が終り、長男夫婦に渡す風呂敷包みを主人から受取ろうとして気付いてみれば、国電の中に忘れたというのです。今頃慌てても後の祭り。電話で問い合わせたが、どこにもなかった。人間ぼんやりしている時があるもので、私にも経験があるので、文句は言えなかつた。この中には、昨夜出てきた古バリカン、孫の役に立ちはしまいかと入れていた。見つけた時、バリカンを握つてカチャカチャ動かしてみると、遠い昔のことを思い出し、何やら書きたくなつた。そこで、次のような詩を書いて、バリカンの箱の蓋に貼つておいた。それもなくなつたと聞くと、少なからず失望せざるをえなかつた。苦難時代の思いが込められているからである。

あの頃のことば みんな

このバリカンが知つている

悲しかつたこと

苦しかつたこと

悔しくて幾夜も眠れなかつたこと

みんな知つているバリカンさん

今はなつかしい思い出

孤独に耐えて三十年

おまえもまめに働いた

代は変われどわたしの孫に

最後の奉仕をしておくれ

おまえもわたしも年老いたけれど

まだまだの心意気

もうひと働きしましょうよ

わたしはね

イエス様のために働くの

悲しんでる人がいたら

もう泣かなくていいのよ

苦しんでる人がいたら

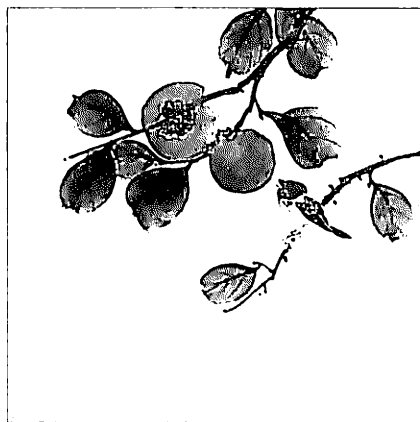
あなたの罪は許されているのよ

神はあなたを愛しています

神は愛です

信じなさいよ

そしたらわたしようになりますよと



だれにでも語りたいのよ

ねえ働きましょう

バリカンさん

ともに使命が終るまで

最後の力の一滴までも

イエス様のために

尽くしましょう

ねえ頼みますよ

バリカンさん

夜の家庭礼拝は主人と二人だけであつた。「俺ももうろくしたもんだ。どこで落とされたのか、さっぱり覚えておらん。こんなに祈つたことは初めてだ」。腰を降ろしながら主人が言つた。私は嬉しくなつて、「きつと、神様が祈らせるためだったのよ。私もよく物忘れするでしょ。同類ができてよかつた」と言つと、「うん、二人とも目を覚ましとかな、いかんぞ」と言つたので、二人でワハハ……と笑つた。

今晚の主人の祈りは、いつもと違つて型破りだつた。

「天のお父さま、あなたの御血のゆえに、今日も健康が与えられ感謝します。『目をさましてい



なさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。』このみことばは肝に銘じました。信仰のたがが緩んでいました。孫たちを喜ばそうと思つて買ったバナナ、それから貰つた栗と大蟹、これなど私共一口も食べずに入れました。それから何だったかな……。ちらりと横目で私を見ますので、吹き出しそうになるのをこらえて、「ナスビとバリカン」と口早に言った。

「ナスビね。これは家の畑で今朝ちぎつたばかり。それからバリカンはお母さんが大事にしつたもの、みんな落としてしまいました。目を覚ましておれとおっしゃつておられるのに、つい居眠りしまして申し訳ありません。けれども、これらは買えば買うことができます。しかし、永遠の命だけは、金があつても買えません。これだけは、目を覚まして、落さんようにします。…アメン」。子どものような祈りでしたが、心からアメンと和しました。そして、しみじみと教えられたことでした。

全てのものを失つても、永遠の命なるイエス様さえ失わず、私たちと御一緒なら…。

「キリストには代えられません」

世の宝もまた富も

この御方がわたしに代わつて死んだゆえです

世の楽しみよ、去れ

世の誉れよ、行け」

(聖歌五二一番)

私たちは、心の中から言うことのできない喜びが湧いて、今晚は格別恵まれた家拝になりました。

## 八 恵みの訪れ

「あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸いはない」（詩篇十六・二）

## （その一）

病気とはトンと縁のなかつた私は、ちよつとした風邪をこじらせて、三八〇四十度の熱がかなり長く続いたが、肺炎一步手前で、どうにか起きられるようになった。そのため一ヶ月余り礼拝を休んでしまった。何とか出たいと思ひ、廊下を歩いてみると、どうも調子が悪い。ふらついで、足が地に着いていない感じだつた。そのうゑ、昨夜は眠れなかつた。あすは礼拝に参りますから、眠らせて下さいと祈り、主の祈りを繰り返したり、数を数えてみたりしたが、眠られない。どんなことをしてもすぐ物を考えて、ますます頭が冴えてくる。だから、今朝は頭もぼけておれば、体の調子も悪い。礼拝は今日も駄目だと観念した。

日曜学校の御用の準備をしている三男に、そのことを話した。無口ではあるが、心やさしく思ひやりのある子ゆゑ「無理しないほうがいいよ。礼拝はこの次にして、早くお休み」と言つてくれるだろうと期待していたところ、「とんでもない。お母さんは行つて行かれないことはないと思う。たとえば、タクシーに乗れば戸口から戸口まで運んでくれるし、教会のベンチに腰掛けるのがきつかつたら、座敷もあるし、家におるよりはましでしょう」と言うのです。そして、自分はそそくさと日曜学校の御用に出て行つてしまった。私はしばらく呆氣にとられて、ポカンとして

いた。

なんて冷たい言葉だろう。しかし、あの毅然とした暢之の態度はいつもとは様子が違う。とても暢之の言葉とは思えなかった。もう一度、その言葉を繰り返し考えると、まことに理にかなっているし、そこまでは気付かなかつたと、自分のうかつさを思つて立ち上がった。そして息子の言うとおり実行してみると、なるほど教会まで来れた。

いつもの指定席？ に腰を降ろしたが、讚美歌がどうしても歌えない。蚊の泣くような声しか出なかつた。まるで腑抜けた人間のように、力がない。力を出そうと努めるのだが、自分のからだが言うことを聞いてくれない。説教が始まる頃には、開いた聖書の上に臥せてしまった。誰かが私の肩を叩いて、「大丈夫ですか」と尋ねてくれた。私は頷いた。こんな状態では眠ってしまうかもしれない。幸い私の魂は醒めていた。みことばだけはちゃんと受けとめていた。

「神の和解を受けなさい」とのお話であつた。その中で「あなた方はキリストの使者なのである」というみことばを聞いたとき、光が与えられた。その時のみことばがどんなに慰めとなり、力となつたか分からない。その訳はこうである。私の家の集会に来られている求道者が、最近になつて三人も落ちて行つてしまった。私はその人たちを愛し、共に労し泣いてきた。それなのに、その人たちは後足で砂を引つ掛けて去つて行つたのである。私はもう一度、膝突き合わせて語りかけた。私の涙を見てほしかった。

だが今は、すでに私の手の届かない所に行つてしまった。いくら思つても、考えても、どうにもなることではない。いい加減にあきらめなさいと、我と我が身に言聞かせても、全ては虚しく、

糠に釘の状態であった。おまえには福音を語る資格がどこにあるか、おまえと接する人はみな、つまづいて逃げて行ってしまうのではないか、と責められる。人に言えないやるせなさ。そうした中で与えられたみことばは、千万力の味方を得たよりも力強いものであった。

「神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや」（ローマ八・三一）

今日、こうして教会に導かれたことは、すばらしいことでした。主が憐れんで、失望落胆の中から導き出して下さったのでした。礼拝に出ることができないでいる者を、ちょうどロバがものを言つてバラムを救つたように、息子を用いて礼拝に導き出し、臨在にふれさせて下さったのでした。

### （その二）

礼拝の祝祷が終つて神癒の祈りが始まったので、前に出て祈っていた。礼拝後は婦人会があると聞いたので、証しをしていきたいと思つたが、体が持てそうもない。早く帰つて休もうと教会を出た。そこでタクシーを待つてみると、

「主を待ち望む者は新たな力を得」（イザヤ四十・三一）。

神癒の時と同じみことばが与えられた。すると、タクシーに乗りたくなくなり、市電で黒崎まで行き、そこから国電で海老津まで行つた。駅から家までは当然タクシーに乗るつもりであったが、ここでも同じみことばが目の前に浮かんだ。「主よ、歩けとおっしゃるのですか。健康な人でも十五分はかかるのです。そんな無謀なことではできません」。心の中で反発した。

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」（ヘブル十一・六）。

「そうです。私もそう思います。けれども私はできそうもありません。行きも全然歩いていませんし、今は疲れて早く寝たいのです」。

「なぜ、わたしの言うことを信じないのか。信仰によらないのは罪である」。

主の最後のお言葉が終らぬうちに、私は歩いてきた。しばらくして気が付いてみると、今までとまるで違つてしっかりと足取りで歩いてきた。こんな力がどこにあったのだろうか、不思議に思えた。長いだらだら坂も何のその、息切れもなく無事家に着いた。

「汝の信仰のごとく、汝になるべし」、「あなたがたが、足の裏で踏む所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるであろう」（ヨシユア一・三三）の御言を思い出し、心から主を崇めた。

健康な時でも駅から歩くと、疲れて一休みしたくなるのに、まして一カ月も外に出てない者にとつては、重労働でぐったりするところを、これはまた何としたことか、「走れどもつかれず歩めども倦まざるべし」（イザヤ四十・三一）の状態で、はなはだ気分爽快であつた。余りの嬉しさに、八幡の長男に、このことを知らせるべく便りを書いた。

するとその時、「今、エベネゼルの記念碑（サムエル記上七・十二）を建てよ。日が経つにつれて、サタンに神の御業をばやかされ、恵みが薄れてくる。そうならないうちに感謝の石塚を建てよ」との御声を聞いた。私は急ぎペンを取り、しかと記録することにした。

## 九 主の祝福は人を富ませる

この度は、姫路福音教会の聖会に出席することができ、この機会に岡山にいる次男の家に寄りましたが、子どもたちに徹底した宗教教育がなされている様子を見せられて、満足して帰宅することができました。

聖会では、講師の諸先生方がそれぞれ特長ある説教をなさり、力強くみことばをお語りになりましたが、わけても礼拝説教をされた末永先生の御用は、強く私の印象に残りました。杖を付き、介添人が双方から抱えるようにして講壇に上がられ、椅子に四枚重ねた座布団の上に座られた先生のお姿は、痛々しく思われました。しかし、そのお顔は病人とは思われず、つやつやとして血色よく、皺ひとつない、輝いたお顔を見た時、聖い！という感じに打たれた。

「わたしが聖なる者であるから、

あなた方も聖なる者となりなさい」

説教が始まると、リンとして透るお声は、力強く、心の底までしみ通るように感じた。とても御病気中とは思われない。これが御聖霊の働きというのでしょうか。御講壇から命の泉が流れ出ているのが、見えるような感じがしました。お説教が終わって祝祷をされる時も、他の先生方が心配して、「どうぞ、そのまま」と言われていたが、末永先生はお立ちになって、両手を高く掲げ、ひときわ高いお声で祝祷して下さった。あのお力は、一体どこから来るのであろうか。今日のみことばは、私にいただいたものだと思います、主の契約の箱を預かる家庭であるだけに、一層厳

しく自らを顧み、御用に当たらなければ、と心から願いました。

姫路聖会が終わってから、次男の車で嫁の里である「山ノ内」の藤原家に行くことにしました。山里とは聞いていたが、なるほど姫路の街を過ぎると、眼前に深緑したたる山々が現われ、私達を取り囲んでしまった。車はその中をひた走りに走っている。幾つもの山を後にして、大分時間も経ったので、「もう近くだろうか」と息子に聞くと、「まだ半分も来ていませんよ」との返事であった。そして、「僕も初めてこの道を来た時は、こんな山奥から嫁をもらうのかなあと驚きましたよ」と述懐している。嫁とは、主のお導きで御殿場の青年研修会で会ったのが始まりで、今では二児の父親になっております。

当時は、九州から出て東京の会社に勤め、それから新しい会社を興すために岡山に移って間もない頃でした。私たち親は遠い九州にいたので、仲人役も自分でしなければならなかったのです。でも、縁談が成立してからは、全てがスムーズに運び、感謝でした。私たちはお膳立てが整った後、結婚通知を受けたようなことで、先方とは結婚式で初めてお会いしたような次第です。

以来、藤原家とは、主にあつてお交わりさせていただいておりますが、今日は嫁が二人目の子どものお産のために帰郷しているので、お見舞いを兼ねて藤原家を初めて訪問するわけなのです。

途中で、川べりに何百本と植えられた桜並木、満開に咲き、その美しさ見事さは筆舌に尽くし難いものでした。山から流れる水は清らかで、底石が手に取るように透けて見えます。私は絶好の時期に来たことを感謝しました。またこうして、息子と水いららずで長時間のドライブができた

のも初めてでした。聖会に思い切つて出て来て良かったと思ひました。一時間以上走り続けて、やつと藤原家に着きました。こんな遠いところから、毎週の礼拝にお子さんを連れて何十年も通ひ、信仰を守り通して来られたお母さまに対し、頭の下がる思いがしました。

家は百年も経つてゐるとのこと、頑丈な造りでした。この地は林業が盛んだそうで、どの家にも自家用車を備え、裕福そうに見えました。

今度生まれた孫も、元氣よくお乳を飲み、母子ともに元氣な様子を見て安心しました。その日の夕食は賑やかで、二歳の順子ちゃんも日々の糧の讚美歌を上手に歌ひ、小さな両手を合わせて、エシユさま、感謝、アーメンと食前のお祈りをしました。私はその可愛さに涙の出るほど嬉しく思ひました。

冬でもシャツ一枚で通すほど厳しい躰をしていました。風邪ひとつひいたことなく、いつも外で遊ばせて、顔も体もよく焼けて健康そうでした。母親が聖書によつて良き教育をしている様子をこの眼で確かめ、全く主は思ひに勝る助け人を息子に与えて下さつたと、心から感謝せずにはいられませんでした。

お母さまは、五十年間、姫路教会で信仰一筋に励んでこられ、その間、祈り続けられたご主人も遂に信仰に導き入れられ、最近召天なさつたとのこと。お悔やみ申し上げましたら、「悲しみよりも、長年の祈りが聞かれて、イエス様を信じて平安のうちに召されたことの喜びが大きくて、悲しみがありません。今、何もかも解放されましたので、これからは本当の人生です。この身を捧げて主の御用に励みたいと思ひます」とおっしゃる。私は、この母にしてこの子ありと思ひま



した。「賢い妻は主から賜わる」、「主の山に備えあり」、この二つのみことばをもつて息子のために祈つて来ましたが、長男の嫁、然り、次男の嫁、然りです。今、三男のために祈つておりますが、主はこのような者の祈りをも聞いてくださる、何という有り難いことでしょうか。翌日、感謝一杯で藤原家を辞し、帰途に着きました。

先日、岡山の息子から電話があり、藤原のお母さんが重病で入院されたと報せてきました。先月お会いした時は、あんなにお元気だったのにと寝耳に水のような思いがしました。その後、嫁から便りがあり、お恵みで危ないところは過ぎましたが、まだ頭の血管の一部が詰まっていて、頭痛が止まらず、面会謝絶の油断ができない状態が続いているが、主が母を必要となさいますならばもう一度立たせてくださるでしょう、お祈りくださいと書いてあった。私は、嫁の心中を察して、たまらない思いで祈った。「なやみの日にわれを呼べ我なんちを助けん」、「人には能わざれども、神には成し能わざることなし」、全能の神よ、お聞き下さい、藤原のお母さんの病を癒し給え。私は今日も祈り続けています。

## 十 愚かなりとも迷うことなし

これは最近の出来事ですが、私の知らぬ間に隣接の土地が掘り下げられ、私方の家屋やブロック塀が危険にさらされているのに気付き、お隣に行つて、これ以上掘られてはブロック塀が崩れるのみか、地盤が緩んで家屋が傾いて危険になるから止めてほしいとお願いしました。

ところが、返ってきた言葉は何と、「自分の土地を掘ろうと、どうしようと勝手ではないか。ブロックが壊れるなら石垣をすれば良い。庭を広くするため自分の土地を削るのに何の文句があるか」と、どこまでも自分本位で譲りません。こちらで石垣をするとすれば、何十万円かかるか分かりません。困り果てて、千葉に行っている長男に電話しました。すると、「法律の事は詳しく知らないが、いくら自分の土地でも、危険を承知で掘ることはできないはず。よく調べて返事する」と言つて切れました。

翌日、私も法律に詳しい人にお尋ねすると、後日の証拠のために現場写真を撮っておきなさい、そして被害を受けた時は全面負担を申し渡す内容証明を先方に出しなさい、その外にも簡易裁判所があるから調停してもらいなさい、と知恵を貸して下さいました。

しかし、「主の僕は争うべからず」のみことばが脳裏に引掛かつて気が進みません。ざりとて、このままではどンドン掘り下げられてしまいます。夜も心配で眠れませんでした。私は山に登つて、一生懸命祈りました。「汝、心を騒がすな。神を信じ、また我を信ぜよ。彼は依り頼む者の盾なり」と、今年の新年聖会でいただいたみことばが与えられました。それでも、不信仰にも、私の内にはまだ心配が残っており、平安ではありませんでした。

翌日の朝、思いがけない方が、私の家に来られました。それは、この辺りの山や土地を持つておられる町の有力者で、私たちはこの方から土地を分譲していただいたのでした。その地主さんから意外なことを聞きました。「お宅の隣のKさんの土地は、私が貸している土地で、何の許可もなく土を掘って運び出しているの、びっくりして『誰の許可を受けて、そんな勝手なことをす



るのか。正野さんちの塀が崩れるのが分からののか。すぐ埋めて、杭を打て』と、今怒鳴ってやったのですが、大変ご迷惑をかけました。だが、もうご心配なさらぬよう。必ず埋め立てさせますから。それは私にとって、神から遣わされた軍勢の将のように思えました。ヨシユアが堅固な工リコの城を前にして思案投げ首していた時に、抜き身の剣を持って現われたあの軍勢の将です。あの時、城壁は内から崩れたとありますが、神様は不信仰な者にも真実な方で、思わない方を通して勝利を与えて下さったのでした。Kさんの土地が借地だったとは知りませんでした。地主さんの一言で、Kさんは早速人夫を雇って運び出した土を元通りに運び入れ、杭を打って地盤を固めております。

ハレルヤ！「神の言葉はみな真実である、神は彼に依り頼む者の盾である」（箴言三十・五）。

アーメン。

このようにして事件は無事解決しましたが、お隣り同志の交際ができなくなつてはいけません。そのために主に祈るとともに、私共も身を低くするように心がけていました。すると、先方の心がだんだん解けてきたのか、先日奥さんが来られて、「うちで漬けた漬物です」と持って来られました。これでわだかまりも全く氷解し、以前に勝って互いに座敷に上がってお茶を飲み合えるようになりました。

「主の恵みふかきことを味わい知れ、

主に寄り頼む人はさいわいである」（詩篇三四・八）。

すべては主のお恵みでした。無力で何もできない私を、「愚かなりとも迷うことなき」幸いな道に歩ませて下さいました。

## 十一 すべての道にて主を認めよ

私は、今年（昭和五十年）の五月一日から三日間、神戸で開かれている塩屋聖会に出席しました。それは最初から予定して出掛けたのではなく、急用があつて岡山の息子家に行つておりましたが、そこで、盲目になられた小島伊助先生の講演があると聞き、行く気になつて、西明石まで足を伸ばすことにいたしました。

「すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまつすぐにされる」（箴言三・六）とありますが、何気なく気の向くままに聖会に出席したことで、そこに祈りの応答があつたことに気がきませんでした。

私が急用で岡山に参りましたのは、息子の嫁の母親が、ご主人が亡くなられるやら、ご自分は脳内出血で半身不自由になられるやら、そのうえ大火傷で長期入院されるなどの災難続きで、そのため頭がおかしくなつて、退院はしたもの、長男の家には行かぬ、一人で山ノ内に暮らすの一点張りで、五人兄妹が集まつて説得しても聞き入れず、わめいて困っている。今は皆帰つてしまつて途方に暮れているので、すぐ来てほしいという電話がかかつてきました。

それでは男の人の方が力が強いから、お父さんに行ってもらおうかと言うと、お母さんでない  
と駄目、祈って鎮めてくださいと嫁の返事です。これは大変な事になったと思いました。祭司の  
大役が勤まるか、はなはだ心許ないことです。背後の祈りを榎本先生にお願いで、とにかく行っ  
てみることにしました。新幹線に乗っている間中、心の中で祈り通しました。岡山駅に着くと、  
息子の車が迎えにきており、間もなく早島の家に着きました。藤原のお母さんは、私の顔を見る  
なり相好を崩し、とても嬉しそうに迎えて下さったので安心しました。そして、神様は私を愛し  
て下さってこんなに良くなりました、神は愛なり、神は愛なりと言って、感謝賛美をなさいませ  
私は、聞いた話と大分違う様子に、狐につままれたようになって嫁に聞きました、

「少しも間違ったところなんかじゃない」。

「それはお母さんと話している時だけです」と嫁が言うので、しばらく居ることにしました。  
そのようなことで、前述のように塩屋聖会に出席することになったわけです。

全国から集まった人、六百人。会場となった講堂の階上階下とも一杯です。

一日目の集会が終わって、割当ての居室に入りました。すると、同室となった方から  
「何処からいらつしやいましたか」と尋ねられました。

「北九州からです」。

「北九州は、何処の教会ですか」。

「活水の群れの教会です」。

「あら、私も活水の群れの姫路福音教会です」。

姫路福音教会と聞いて、私は「そこに藤原こはるさんという方がいらつしやるでしょう」と尋ねました。「私の姉です」とおっしゃる。意外な事にビックリしました。これだけ沢山人の中で、嫁の伯母さんに会おうとは……。そのうえに、この方から意外な事を聞かされました。姫路福音教会の牧者末永先生は、この世を去られる前に愛する教会員一人ひとりを枕辺にお呼びになつて、遺言を残されたそうです。その時、藤原のお母さんは入院中であつたためお会いできず、退院した時は、すでに臨終真近く、言葉をかけてもらえなかつた。しかし御愛の先生は、後継の牧師に遺言を言付けてあつたそうで、藤原こはるさんへのお言葉は、「あなたの病気が癒されるように祈っています。良くなられたら山ノ内に帰つて、集會が再會されることを天上で祈っています」であつたとのこと。この事を聞いた藤原のお母さんは、末永先生を敬愛しておられただけに、どんなお気持ちで受け取られたことか……、その胸中を察する時、私はたまらない思いがしました。それから岡山に帰りまして、家族の者に言つて聞かせました。

「お母さんが山ノ内に帰りたがっているのは、わがままでも強情でも狂つていゝものでもない。尊敬する末永先生の遺言を守りたい一心、神様にお仕えしたい思いから出ている。だから、お母さんの意志に暖かく沿つてあげるのが、子どもとしての愛情と思う」、そう言つて帰りました。その後、聞くところでは、そういう遺言のことは、息子さん達はお母さんと言わないので知らなかつたそうで、早速、母親の意志どおりにさせてあげたそうです。

先日、私は熊谷市の籠原教会に導かれましたが、そこで丸山今朝次先生から、藤原のお母さんにお会いになつた時の様子を聞かせていただきました。「童心に帰つて、神様を賛美しておられる。

主は藤原さんを潔めて下さって、天国の備えをしておられるんだなあ」と。今は、一人住まいも主と共にあつて、多くの魂の救いのために祈っておられる尊いお姿を思い浮べ、「よかったですね。よかったですね」と、お会いして言つてあげたい心で一杯です。陰にあつて祈つていただいたおかげで、こんな形で私の使命を果たすことができたこと、主のお導きと心から感謝し、栄光を主に帰します。

「すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまつすぐにされる」(箴言三・六)。

## 十二 我が家の家庭礼拝

家庭礼拝を始めて二五年、今では息子たちも自立して家庭を持っておりますが、それぞれの家庭で続けているようです。

そもそのの始まりは信仰があつての事ではなく、福音を聞いたその時から食前の祈りを始め、讚美歌を一つ覚えると、それを子どもの答案用紙の裏に書いて教えたのが始まりです。子どもたちに讚美歌を買つてやれないため、その手書きの答案用紙を綴り、厚紙の表紙を付けて讚美歌代わりとしました。今もそれが残っており、当時が偲ばれ懐かしくなります。

そのうちに聖書を輪読するようになり、一章を読んでお祈りしました。私の祈りが長過ぎると苦情が出たりしましたが、だんだん楽しんでやるようになり、互いに珠玉のみことばを見つけて感想を述べだすと何時間もかかる始末で、一家団樂の楽しい時間となりました。

主人はなかなか協力してくれませんでしたので、得られるまでは忍耐せねばなりません。食前の祈りの時も先にご飯を食べます。すると子どもたちはお父さんの方に気を取られて、欲しそうな顔をして見えています。私が協力して下さいと頼みますと、箸は置きますが、俺は祈りは聞かんぞ、というようにふんぞり返って、口の中のご飯をわざわざ音を立てる始末です。主人が参加してくれるまでは戦いもありました。

貧しい生活でしたが、誰も不足を言う者はいませんでした。これも祈りのおかげで、神様中心であった賜物と思います。兄弟仲良く、喧嘩をして叱ったという記憶がありません。男の子は高校生にもなると、生意気になつて親の言うことを聞かなくなるとよく聞きますが、子どもながら一生懸命協力してくれたと思います。その頃、私も外で働いておりましたので、疲れ切つて返りますと、今日は止めようかと思う時もありましたが、心を奮い起こして、夕食の片付けが終つてから、「さあ、みんな集まりなさい」と号令を掛けますと、みんなが集まってくれました。先日も、「お母さんは辛抱強い」と三男が言いますので、「どうして？」と尋ねますと、「一向に上達しないのにオルガンだつて続けているし、家庭礼拝だつてお母さんがいなければ、二五年も続かずはないよ」と言いますので、私はすぐに打ち消しました。

私は飽きやすの好きやすのたぐいで、日記を毎日書こうと思つて始めても、できた試しがありません。何をやつてもものにならない者が、今日まで家庭礼拝を続けさせていただいているのは、全く神の恵みであつて、こちら側には何もありません。「誇るなら、主を誇ろう」と言つたことでありました。



もしも、我が家が家庭礼拝なしで生活していたとしたら、親を泣かせるような子が一人くらいは出たでしょう。私たちにも今日のような祝福はなかったと思います。四人の子がそれぞれ主の証人とならせていただいておりますのも、家庭礼拝を通して、主を畏れる精神が自然に培われたからではないでしょうか。主の恩寵は計り知ることができません。埼玉県熊谷市籠原教会（丸山今朝治牧師）の「祷告」誌に証を続けて四年五十回になりますが、あかしは尽きません。

「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみは

とこしえに絶えることがない」（誌篇一三六・一）。

### 十三 行く先を知らずに出て行った

今朝の私は吉田先生のお宅を訪問することで、心は弾んでおりました。まず、美容院に行つて結髪して、着物は何にしようかしら、神様のお恵みを報告したらどんなに喜んで下さるだろうかと私の胸は喜びで一杯でありました。さて、美容院は朝が早かったので、誰も来ていませんでした。私がドライヤーの中に入った時のことです。電気から起こる風の音の中に、えも言えぬ妙な音楽が流れ、誰かがソプラノの声で歌っています。何とそれは、私の大好きな讃美歌五一三番でした。

天に宝積めるものは げにもさちなるかな

主に任せしその喜び いかにしてかは述べん

朝から讚美歌を歌っている人がいる？ それともレコードかな。私は美容院の人に聞きました、「今、音楽をかけておるのですか」。

「いいえ、何もかけておりません」と言う。でも、私の耳にははっきり聞こえてくるのです。

主はわが歌 わがよろこび わがひとつの救い

いざや伝えん世にあまねく このよきおとずれを

不思議に思うと共に三番の歌詞が心に留まつて、主が私に使命を与えておられるように思えてなりません。

「主よ、今朝は吉田先生を訪問するつもりでおりますが、あなたは私をどこにお遣わしになさるのですか」、心の中で黙祷のようにして、主にお尋ねしました。すると、妹の憂えた顔が目の前に描き出されたのです。私は困ってしまいました。これまで何度か伝道したのですが、信じようとはしませんし、かえって私を軽蔑してまいりますので、行きたくありません。でも、主の御愛を思うと背くわけにも参りませんので、美容院を出て家に帰り、着物を着替えるとすぐ黒崎駅に行きました。それでも気が重く汽車に乗る気がしません。何を語ったらよいか、全然見当もつきません。不安はますます大きくなるばかりです。

ふと、良いことを思いつきました。こういう時は牧師先生に聞くことが一番よいと思ったので、今度は市内電車に乗り換えて牧師館に行きました。幸い先生は御在宅でしたので、今までの事情を話してから、「私は行っても何を話してよいかわかりませんから、教えて下さい」とお願いしました。先生は、すぐ教えて下さるだろうと思つて待つていますが、何ともおっしやいません。私

はイライラしました。だって、吉田先生の所に行くのが目的ですから、ここで説教を教えてもらい、妹の所で話してしまつたら主の御用は済むのだから、それから吉田先生の所に行こう、そういう心組みですから、私の心は急いでいました。しびれを切らして、催促しました、

「先生、私は黒崎駅から乗るはずでしたが、先生からご指導を受けるために、わざわざ立ち寄つたのですから教えて下さい」。

そうしますと、先生はやつと口を開きました、

「神様が、妹さんの所へ行きなさいとおつしゃつたんでしよう」。

「そう思います」。

「そうなら、行つてらっしゃい」。

「先生、それは困ります。教えて下さい」。

「お祈り致しましょう」。

お祈りをしてから教えて下さるとばかり思つて、私も頭を下げて終わるのを待つていました。お祈りが終わつたので、共に「アーメン」と和しました。すると、

「祈っていますから、さあ行つてらっしゃい」。

やはり教えて下さいません。そして、追い立てられるようにして、先生は玄関まで見送つて下さるのです。私は取りつくしまもありません。悲しくなつてしまいました。来ねばよかつたとかすかな後悔のようなものが一層気を重くしました。玄関の戸を開けて空を見ると、今までカンカン照りだつた天気が今にも降りだしそうな気配です。あいにく傘を持っていませんでしたから、

先生にお願いして借りました。そのお借りした黒布張りの大きな傘を持って、「お祈りしていますよ」と優しい声でおっしゃって下さったのを背にしながら、トボトボと八幡駅に向かいました。なぜ教えて下さらないのだろう…、私には訳がわからないのです。とうとう雨が降りだしました。「おお主よ、一体、私はどうしたらよいのでしょうか」。傘の中で思い悩んでいた時、稲妻のようなものが目の前を走ったように思いました。その時、小さな声がありました、「アブラハムは、…行く先を知らないで出て行った」というみことば（ヘブル十一・八）でした。ああそうでしたか、分かりました、分かりました。私はその時、全き平安が与えられたのです。

それはこうなのです。アブラハムは神様から「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」と言われた時、「アブラムは主が言われたように立った」とあります（創世記十二・一〜四）。もし私だったら、どこへ行くのですか、何をするのですかと尋ねなければ、心配で行かなかったかも知れませんが、アブラハムはその行く先を知らず、主が言われたとおりに出て行った時、主が共におられて次々と導いて下さったことを、一瞬のうちに思い起させて下さいました。

ですから、私は信仰を持っていきさえすればよい、そう思った時、今までの不安は何処へやら、私の足は軽く、旅行にでも行くような楽しさでした。牧師先生も私のために祈って下さっているので、心強うございました。

東郷駅に着いた時は、ドシャ振りの雨になりました。妹の家は、駅から歩いて十五分くらいの所にあつて、本屋を営んでおりました。いつもは立ち読みのお客で賑やかなはずなのに、雨のた

めに一人も客はいませんで、好都合でありました。これも主のお導きのように思われました。店に入りましたら、妹が驚いて、「まあお姉さん、このドシャ振りの中を何ごと？ ああ分かった、ヒロちゃんのよい報せでしょう」。よい報せというのは、年頃の娘を持っておりますので、結婚の報せと勘違いしたようです。

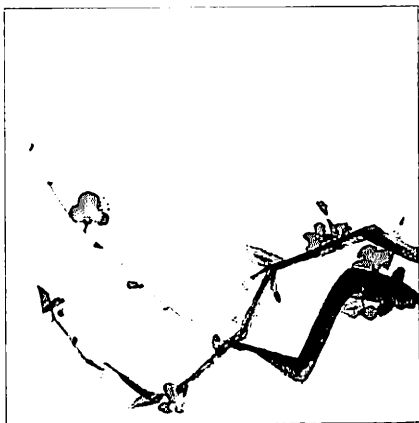
「そうじゃないの、あなたによい報せを持ってきたの」、と私が言ったので、よい報せとは何だろうと思つたに違いありません。

「早くお上がり」と急ぎ立てるようにして、座布団を勧められました。その上に座つて、出されたお茶を飲むと、

「一体、人間とはいかなるものであるか、なぜこの世に悲しみ、病氣、苦しみがある？」、第一声はこうして切り出されました。

「知らない、どうしてこんなに悩みがあるのかしら」。

そこで、私は語り出しました。床の間に天照皇太神宮の掛け軸と櫛が立てられており、右の棚には金光教紋入りのガラス戸の中に何やら祭つておるし、かまどの上には大黒様と恵比寿様を並べてかざつてある。その刻んだ像はすすだらけになっていた。それらを指差して、こんなに神様がいくつもあるように思っているけど、これはみな人が作ったもので、神様ではない。本当の神様は、人の手で造られたお社にはお住みにならない。天を造り、地を造り、その中のすべての物をお造りになった御方は偉大な御方で、「地はわたしの足台である」とおっしゃつておられる御方である。人類の始祖は、この方によつて造られ、何不自由のない生活をエデンの園で続けられた



のに、神様の戒めを破つて罪を犯し、その幸せな園を追放された。その結果、人は手に汗して働き続けなければならなくなり、悩み苦しみに付きまとわれて、最後は死んで地獄に落ちていかねばならなくなつた。しかし、愛であられる神様は、ひとり子を世に遣わし、人類が犯した罪、私達が地獄に行く代わりに、ひとり子イエス・キリスト様の上に負わせて十字架に掛けて殺し、私達の身代わりとなして下さつたことを語り、その贖いの十字架を信じるならば、私たちの罪は許され、あまつさえ神の子として受け入れて下さる。そして、今まで自分ではどうすることもできなかった悩み苦しみからも解放して下さることを、延々一時間半語りました。

それは神様が、こんこんと湧き出る泉のように次々と語ることを教えて下さつて、語つておる私自身がまず恵まれました。

聞いていた妹の方も、今まででしたら私の言うことをそんなに簡単に受け入れないはずなのに、何と身じろぎもせず、食い入るように私の顔を見つめながら聞いてくれたのも、不思議に思えてなりませんでした。話が終わると、私は他に用事があるからと、「ご飯でも食べて……」と止めるのも断つて、妹の家を辞しました。後で聞くと、その時の妹は家庭問題で大変悩んでいました。可哀相に、聞いてあげればよかつたと思ひました。しかし主は、すべてを良きに変えて下さいました。その翌日、妹は多忙な店を閉めて、私の家を訪ねてきました。私も食堂の

仕込みの忙しい時でした。「お姉さん、昨日はどうもありがとうございます。もっとお話が聞きたくて来たけど、お忙しそうだから、牧師先生の所を教えて頂戴、これから出掛けていこうと思うから」と言ったので、早速くわしく地図を書いて渡し、先生には妹が行きますのでよろしくと電話を致しました。私のような者を神様は用いて、妹を救いにお導き下さったことを知った時、恐れ多く、もう仕事の手が付かず、二階に上がって、しばらく祈りつつ感謝したことでした。

#### 十四 わたしに聞け

「義を追い求め、主を尋ね求める者よ、わたしに聞け」(イザヤ五一・一)

「義を追い求め、主を尋ねる者よ」というのは、信仰の篤い人にだけ語っておられるのではなく、不信仰な私共にも呼び掛けていて下さる、だからそこに自分の名前を入れて読みなさいと、先生は講壇からおっしゃった。

「サカエよ、わたしに聞きなさい」。

そのみことばは私の心にピツタリとして、いつまでも残りました。それは、最近起こった苦い体験を通して、主が私に諭すように与えて下さったみことばのように思えたからです。それで、私の失敗談を書き留めて、忘れぬようにエベネゼルの石塚を建てておこうと思いました。それは、七月下旬のことでした。長男の休みを利用して、貸しアパートの鉄骨部分のペンキ塗装に、私たち夫婦と長男夫婦四人で行ったのです。四人でするのだから、一日かければできるだろうと思っ

ていたのですが、思いの外錆がひどく、錆を落とさねば塗装してもすぐ剥げるということで、ワイヤーブラシで錆落としから始めた。

しかし一つの階段の錆落としだけで二時間もかかった。それが四つもあり、さらにペランダもある。これは大変だなあ……と少々疲れ気味の所に、タイミングよろしく、見知らぬ若い男が近付いてきた。「暑いですなあ。おばあさん、やめときなつせ。おばあさんのできる仕事じゃなか。わしに任せとき。安うしときますけん」。ニコニコしながら、博多弁で人懐っこく言った。

「折角ですが、安いと言ってもお金がありませんし、暇暇にやりますから、いいです」と断ったが、「素人が高い天井どうして塗れますかいな。足場もいるし、ハシゴも要りますばい。危なかあ。怪我でもしたら、どぎゃんする」。耳を傾けて聞いているうちに、成程と思われてきた。それに、親思いの息子が私たちの経済のことを思つて、これまでも部屋のペンキ塗りなどをやつてくれており、今日も折角の休みを棒に振つて手伝つてもらうのも、可哀相に思われたので、「錆落としとして、塗つてもらえますか」と聞くと、「そりゃ専門やけん、錆落としした上に錆止めの薬は塗つて、ペンキ塗りやるけん大丈夫、まかせとき」。「それなら鉄骨部分全部、階段、手摺り、ペランダの天井部分、二棟でいくらか、値段次第で決めましょう」。私が言うと、手帳を出して計算していたが、「六万円ですやりますよ。こんな値段じゃ、わしの手数料もなか」と言っていた。

六万円くらいなら手持の金があるからと、頼む決心がついて、高い所にいる息子に「真宏さん、六万円です請負ったから降りてきなさい」と呼びました。その人から名刺をいただきました。見ると、この土地の人でない福岡の人でした。遠方の人で信用できるかなと思つたとき、不安が胸一



杯拡がりました。「あなたはこの土地の人ではないのですか」、私は戸惑って聞いたのでした。するとその不安を打ち消すように、「何も心配することはないか。(下の家を指して) この家も、あの家も、屋根の塗装をしてあげたから聞いてみんさい。悪い人間じゃなかけん、安心して頼みなつせ。板壁の釘がゆるんだる所があるけん、サービスで釘ば打ち直してあげるばい」。

何と親切な人だろうと、祈りもしないで、その場で口約束して帰ったのでした。しかし、落し穴のあることに気付きませんでした。仕事を始めるときは電話をするということでしたが、一向に電話がないので、不安になって現場へ行ってみると、もう七分かた塗り終わっていました。二人の人が作業していましたが、天井の錆を落とさないでやっています。私は「約束が違うじゃないの」と言うと、「わしゃ知らん」と言うのです。どうも下請けの人らしい。「錆を落さないならば、当たり前のお金を払うわけにはいかん」と言うと、しぶしぶ錆止めも塗ってくれましたが、私がいなくなった後も果たして塗ってくれたか、信用できる人ではないように思われました。それから二日ほどして、請負った人が請求書を持ってきました。見て驚くべし、十二万円の請求でした。

「一体、これはどうしたのですか。あなたは六万円で引き受けたではありませんか」。

「そうたい、一棟が六万円だから、二棟で十二万円になるじゃろ」と、平気で言うのです。

「あの時、一棟分とは言わなかった。一棟分の値段であるなら、二棟分で十二万円になりますと言うのが常識じゃないですか。なぜあの時、十二万円と言わなかった。私は六万円でも取り過ぎだと思っていたのに、錆落としも私が見ている時だけ、それでは約束が違うでしょう。六万円は

払いますが、それ以上は支払う訳にはいかない」と言い切つて、私は腹を決めました。詐欺師のような人の言いなりになつてはいけないと思つたからです。ところが、どこまでも横車を押して譲りません。果ては六万円で請負させたという証文があるなら出せと言うのです。最初から騙すつもりでいたらしい。私も負けてはならないと、キツとなつて言いました、「ここで言い合つても、水掛け論でちがあかない。言い分があるなら、裁判所で裁いてもらいましょう」。

「裁判所なんか誰が行くか。払わんなら、家をガチャガチャにしてやる」。

請負つた時の恵比寿顔が閻魔のような恐ろしい顔になつて、本性を現しました。

「そんな、人を脅すようなことを言うのは、男らしくない。もし請け損じたのなら、正直に言う方が、よっぽど男らしいわ」。そうは言つたものの、本当に高いか、安いか分かりませんので、「調べてみることにするから、もう一度、出直して来なさい」と言うと、仕方なしにシブシブ帰つて行きました。

思いがけない問題にぶつつかつて、悲しみに閉ざされ、部屋に入つて祈りました。すると、「頼む前に一歩下がつて、なぜわたしに聞かなかつたのか」、「わたしはあの時、警告したはずではなかつたか」と主はおっしゃいました。「そうでした、御免なさい。でも、こうなつたらどうしたら良いでしょうか。十二万円とは法外な額のように思われますが……」。

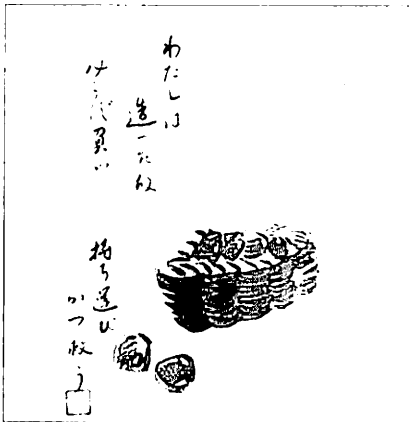
その時ふと、建築請負業をしている親戚に相場を聞いてみようと思ひ浮かびましたので、早速行つてみました。それによると、普通二度塗りで一㎡当り七百元だと教えてくれました。すぐ先方にこのことを伝え、坪数で払うから計算をし直してほしいと頼みました。単価は七百元で承知

してくれました。

ところが出された計算書を見て二度びっくり。前の請求額より増えて、十四万円と書いてありました。それで、長男に頼んでよく調べてもらいますと、七万五千円しかないというのです。請求書の坪数は、全くでたらめだということが分かりました。私の代わりに応対した長男は、怒りもせず、柔和な態度で一つひとつ間違っているところを指摘してやりましたので、先方もそれを認めざる得ず、態度もがらりと変わって「息子さんにはかなわないなあ」と、笑いながらこちらの言い分を承知してくれました。

その人が帰った後、息子がポツンと言いました、「商いは、ファンを作ることだ。それを、あの人はファンを失った」。私は何か分からず、「何が？」と聞くと、「凡そ、お母さん、この次もあの人に頼みますか。頼まないでしょう。また人に聞かれても、信用できない人だと言うでしょうが」。すなわち、お得意を失ったという意味でした。

信仰も同じで、利欲のために一人のファンも失ってはならない、と大きな警告が与えられたように思われました。そして、「わたしに聞け」とおっしゃる方に、いつも耳を傾けたいと思いました。



## 十五 弱ったひざ

「あなたがたは弱った手を強くし、  
よろめくひざを健やかにせよ」(イザヤ三五・二三)。

最近目立って手足が弱くなって、ペンを持ってても力が入らず、縮まった不明瞭な字になって、自分でも情けなくなりません。娘は遠慮なく言ってきます、「母上の手紙は、読みにくい。もっと丁寧につくり書いてみたら」。でも、それが震えて思うようにできず、おかしな字になって、まず書くことが億劫になり、どちらにもご無沙汰ばかりで、暑中見舞いさえも人頼みとなりました。

もっと困ることは、足が上がりず、ちよつとした物にもつまづいて倒れることでした。このため外出はできなくなり、何でも人頼みですから、主人も面倒がつて『お父さん、あれして、これして。お父さん、お父さん』では、俺は死んでも、死ねやしない』と言うのです。すかさず、「死んだら困るわ。だから甘えているのよ」と、私も訳の分からぬことを言ってしまうと、すまないと思いつつも、つい歩けば転ぶという具合で、また頼むという悪循環になるのです。

長男が、リハビリテーションに行けば治るよ、と言って慰めてくれました。産業医科大学病院が七月九日に開設されるのを待って、車で連れて行ってもらいました。膨大な敷地に高い建物が林立して、さすがに日本最高級の病院、聞きしに勝ると思いました。長男は、この大学の設立した

めに四年間も東京勤務を命じられたのでした。それだけに余計、興味深く見させていただきました。

さて、リハビリテーション科には、いろいろな訓練ができるように様々な設備と道具が整っていました。自転車漕ぎ、砲丸のような物を持って振り廻すもの、握力測定器等患者の状態によって使用するのでしょうか。

私の場合は、何の道具も使用することなく、足腰の強くなる体操を習って、それを家でしなさいと言われただけでした。教えるのは簡単ですが、「それが難しくできません」と言ったら、「それをできるように、家で稽古しなさい」と言われました。

たとえば、気を付けをさせて、そのまましゃがみこんで、それから立ちなさいと言うのです。物に掴まらなければ、ひっくり返ります。それで、はじめは物に掴まって立つ稽古をしていましたら、そのうちに足の筋が堅くなって、とうとう歩けなくなってしまうました。大病院へ行けば治るつもりでしたのに、失望のあまり泣きたくなりました。そんな時、使徒行伝三章にある「美しの門の生まれながら足のきかない男」の記事を思い出しました。

「彼は、ペテロとヨハネとが、宮にはいつて行こうとしているのを見て、施しをこうた。ペテロとヨハネとは彼をじつと見て、『わたしたちを見なさい』と言った。彼は何かもらえるのだろうか」と期待して、ふたりに注目していると、ペテロが言った、『金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい』。こう言って彼の右手を取って起こしてやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、踊りあがって立ち、

歩き出した」とあります。私は、この人のように癒されたい、信仰によって強くしていただきたいと思ひ、「昨日も今日も変わりなき主よ、あなたはどんなことでもできないことはないと思ひます。どうぞ、私をお癒し下さい」と一生懸命祈りました。その時示されましたことは、祈りは聞かれて、すでに癒されているということでした。弱くなったのは、私が自然の掟を破った結果である、と教えられたのです。

私はうかつでした。大学病院で診察を受けた時、レントゲン写真を八枚も撮って、結果は骨盤の骨折はピツタリと組織が一つになって分からなくなっていたため、「あなたの骨折は、右でしたか、左でしたか」と、医師から尋ねられたことを思い出したのでした。あの時の写真によると、あとかたもなく癒されていたということでしょう。それを足の上がらないのは後遺症ぐらいに考えて、半ばあきらめていたわけでした。自然の掟を破ったとは、使わない機械は錆ついて動かなくなる、この道理と同じで、私は動くのに動かさなかつた、ということです。だから、運動すれば元通りになると思いました。その日から早速、私は心を入れ替えて、病院で教えられた体操：よりは働いたほうが良いのではと考えて、モンペに着替え、地面を這いながら、毎朝、庭の草取りを始めました。

きれいになつた庭を見ると、心はさわやかになります。時には孫たちの汚した物を洗濯したり、散歩もできるだけしました。神社の鳥居まで九百七十歩、鳥居から拝殿まで百六十歩、そのうち石段が八十段あります。手摺りのない石段を、一段一段杖を付いて足を踏みしめながら登る。私にとつては、足腰を鍛える絶好の場所でした。石段を登りつめると、拝殿の階段に腰を降ろして

汗を拭き、鳥の声を聞きながら、下界を眺めるそのすがすがしさ。昔は、ここでおこもり等が盛んに行われたと、母の幼少の頃の話を聞かされたことを思い出しました。だが今は、誰一人ここまで登って来る人はいません。それを幸い、私は一人祈って、自由に賛美しては、好きな時間に帰ってきているのです。

〈註〉母はこのように回復のために努力したが、原因は骨折ではなく、別な病気であったことにまだ気付いてはいなかった。

## 十六 由布院に行きて

〈その一〉

最近、私の歩き方がおかしいと家の者が言いますし、立ち上がる時などバランスがくずれて倒れたりするので、九州厚生年金病院で診察していただきました。

脳の断層写真を撮り、心電図や血液を採って内蔵も調べました。その結果は、何処も悪くないが、バランスが取れないのは脳からきていると思う、だから一週間分の薬を上げますから、効き目があれば知らせてほしいとおっしゃった。今までお恵みで健康が与えられ、風を引いても薬を飲まず、祈りだけで治っていました。しかし今度はそういうわけにはゆかず、言われたとおり薬を飲みますと、確かに効き目がありました。

一週間して、「葉の効力があつて足が軽くなりました。足の良くなる薬ですか」とお聞きしました。すると、「いや、脳に栄養が不足しているから、栄養が行くようにする促進剤です。だから、リハビリ専門の病院に行けば治るでしょう」と言われ、大分県の由布院厚生年金病院を紹介されましたので、申し込んで帰りました。それから一ヶ月後、忘れた頃になって、由布院の病院から、明日十時までに入院しなさいと連絡がありました。

翌朝五時に目が覚め、いつものように主人と家庭礼拝をして祈り、六時に長男の車で出発しました。途中、車の渋滞もなく、予定よりも早く、九時には病院に到着しました。手続きを済ませ、備えられた病室は一階の一〇八号室で六人部屋の入り口に近いベットでした。主人と長男はしばらくして帰りました。

身長一五三、体重四九キロ、標準より二、三キロ重いので、一日二二〇〇カロリー、塩分七・五グラムという目標がベッドの壁に貼られ、私の名前が記入されました。食事として出されたご飯は、茶わんの底に二口食べれば無くなるくらい。それでも副食が四品ほどあつて、結構満腹しました。入院中は食事だけが楽しみです。

二日間の精密検査の後、主治医の指示によつてリハビリ訓練が始まりました。自転車こぎによる足の訓練、重量物を手足に付けて引つ張つたり、鉄棒にぶら下がつたり、自由に自分に適した運動をし、午後は運動療法士によつての訓練があります。はじめはやさしいB組に入り、それからA組に入ると退院間近になります。

私は最初からA組に入つて烈しい訓練を受け、一ヶ月で退院しました。皆さんに祈られている



から、こんなに早く退院できたのだと思います。同室の人から羨まれました。私の隣のおばあちゃんには心臓病で、毎日、注射や血液検査の度に、痩せ細った腕に注射針を刺される姿は可哀相でなりませんでした。また、向かいのベッドは、女性の牧師さんでした。この方は、脳内出血で倒れて右半身が痺れ、そのうえに言語障害のために言っている言葉が聞き取れません。この状態ではいつ牧会に戻れるのか、そう思うとお気の毒でなりませんので、癒されるよう祈っておりました。

私も、その牧師さんに近づき、話を聞いてあげようと語りかけるのですが、口を指し、手を横に振って「言えません」というジェスチャーです。「話さなければ上手になりませんよ。思い切つてしゃべって下さい」と申し上げて、根気よくお相手をしておりました。その内に、私も聞き上手になり、大分わかるようになりましたので、その方もとても喜んで、よく物言うようになりました。私が帰る時には、足が不自由なのに杖をついて見送り、別れを惜しんで下さいました。

隣の病室に、胃潰瘍で入院されている修道女の方がおられました。食事がいけないので痩せて、青白い顔をして伏せておりました。その方は信仰が厚く、よく祈られる方でしたので、ときどき遊びに行き、お話をしたり、祈ったりしました。宮沢ふみさんという方で、祈っておりましたら、「何事も思い煩つてはならない。ただ事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではどうも測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあつて守るであろう」(ピリピ四・六)のみことばが与えられましたので、早速、そのみことばを書いて差し上げました。「あなたの病気は、思い煩いからきているのよ」と申し上げましたら、「その通りなのよ」と認めてくだ

さつたので、そのみことばで祈って上げました。そして、「祈ったら、もう聞かれたと一切を主にお任せするのよ。それが信仰でしょう」と申し上げたら、素直に受け入れて下さいました。

その後、宮沢さんがおっしゃるのに、昨夜九時の消灯の時間が過ぎてもおしゃべりするお婆さんがいて、眠れないので、「お話止めて下さい。あなたは仏教の信者さんのようですから、仏教のお祈りでもなさったら」と言ったら、「私、祈れんから、あなた祈って下さい」おっしゃったので祈って上げたら、静かになったのよ、と話されました。あとでそのお婆さんが来て、「私は、毎晩、宮沢さんに祈ってもらっているけど、キリストのお祈りはとてもいいのね。昨晩は聖書の話をお聞かせしてもらったらとても良くて、みんな喜んで聞いているのよ」とおっしゃった。宮沢さんの伝道力に、少なからず驚きました。そういう温かいものを感じさせる方でした。そんな先輩に対し、何と失礼なことを申し上げたことか。それでも非難する言葉も、怒る風もなく、すべてを受け入れて下さった態度に感心させられました。

それから私は、カトリックに対する疑問を投げ掛けました。それは、なぜイエス様よりマリヤ様の方に重きを置いているのかということでした。それに対して、特にそういう訳ではないが、マリヤ様はイエス様をお産みになられた聖母様だし、私たちの祈りを取り次いで下さる大切な御方ですからとおっしゃったので、私は、「それは違いますよ。マリヤ様がどんなに偉い方であっても、神様ではない。神様に造られた、私たちと同じ人間でしょう。私たちの祈りを取り次いで下さる御方は、神の子イエス様でなくてはならないはずよ。私たちはお祈りの終りには、必ず『イエス様の御名によってお願いします』と言うのよ」と言いました。

最初は反発されていましたが、私が、罪人の祈りは聞かれませんが、仲保者なるイエス様は神の子でいらつしやるから、その御名によつて聞かれるのよ、と申し上げましたら、「そうね」と素直に受け入れて下さいました。長年の信仰はなかなか変えられないものですが、何と素直なへりくだった方だろうかと尊敬の念を深くしました。二度とお会いすることはあるまいと思ひながら、別れを惜しんで我が家に帰りました。三ヶ月の予定が一ヶ月で帰れたのです。家の者や教会の方々の愛の祈りに応えられたことを感謝致しております。

〈その二〉

入院中有り難く思つたことは、私のような者に牧師先生をはじめ教会員の方々や思いがけない方から、御愛のお手紙やみことばを送つていただいたことで、どんなに慰められ励まされたかわかりません。

ある日、思いがけず、前田教会の岡島ミヨ子姉が妹さんに見舞いに来られた時は、夢ではないかと驚きました。妹さんが由布院に嫁がれて、ご主人に先立たれ、一人で住んでおられるので、その訪問を兼ねて私の見舞いに来て下さつたそうです。みことばをもつて懇ろに祈つて下さり、本当に嬉しく思いました。岡島姉よりも妹さんの方が、年長のように見えました。髪が真白く、美しいまでに輝いて、ご苦労の跡が額のしわに見えました。お一人で淋しいでしょう申し上げたら、近いうちに息子さんの家で住むようになるらしく、家も売つて行かれるようなことをおっしゃつておられました。その家には温泉も湧いて、使用権利だけでも相当なものとのことでした。妹さ

んも主をお知りになつて、信仰に励まれるようにと願わずにはいられませんでした。その点お姉さんの岡島姉は、榎本牧師の次男の和義さんが小学校の時の教え子だった関係で、教会に来るようになったと伺つております。四十年勤続して定年退職され、今は信仰に励みつつ、悠々自適の生活を楽しんでおられる。ご主人も病床の中で信仰に近づきつつあるとのこと、祈つておられるのですから、きつと救われる日も近いことでしょう。

さて、私の方は、大分良くなつてきました。私自身神癒を信じておりますから、一ヶ月経つた時、回診に来られた院長先生に、(神様によつて癒されましたとは言えませんので)「お陰さまで、もうすっかり良くなりましたので、退院しようと思ひます」と申し上げました。付添つている婦長さんに、何ヶ月になるねと尋ねられると、婦長はカルテを見て「約一ヶ月です」と答えました。「うちの病院は、三ヶ月より早く退院する人はいない。早く退院して、また逆戻りするようになつてはいかん。三ヶ月おきなさい」。そう言つて、部屋を出ていかれました。周りの人たちも、自分たちは半年以上もなるのにいつ帰れるか見当もつかない、あなたが一ヶ月で帰れる訳がないと言います。私は自分の信ずるところに従つて言いました。

「私が信じている神様は、瞬間にでも癒すことができます方です。一ヶ月で癒されても不思議ではありません。院長先生は、私が五階までのスロープ階段を駆け上がり、また駆け下りたのを見てないから、知らずにおつしやつておられるのです」。一方、婦長さんは私の家に電話をかけたのです。「お宅の奥さんが、まだ一ヶ月しか経つておらず、完全に治つていないのに退院したいと申されます。帰らねばならない特別の事情があるのですか」。主人は「そんなことはありません。完全

に治るまでお願いします」と返事をしたとのことで、真偽を確かめるために、今度は直接私に電話が掛かってきました。

そこで私は、院長先生の回診の時の様子を詳しく話し、神様が癒して下さったこと、千歩を歩いても、以前のようにひっくり返るようなことはなく、階段を駆け上がったたり駆け下ったりすることができると、主治医がそれをご覧になって退院を許可したのであって、私が帰りたいために言っているのではないことを詳しく話したので、主人も長男も分かってくれました。

家族の了解が得られましたので、主治医の桑山先生に退院のお願いをしますと、快く承知して下さい、「あなたは明日でも帰ってよろしい。院長先生には私からよく言っておくから」と言っておきました。早速、明日迎えにくるように、家に電話しました。

翌日、七月十九日午前十一時頃、首を長くして迎えを待っている私の前に、見覚えのある車が止まって、中から主人と長男が降りてきましたので、私は走り寄って二人を迎えました。

病院の支払いを済ませ、同室の人たちにお別れの挨拶に廻りました。私を引き止めようとしたAさんが、「正野さんの方が勝利したね」とおっしゃるので、私はそれを否定し、「勝利ということはないよ。院長先生の言われることはもつともです。ただ、私のことを一番よく知っておられる桑山先生が正しい判断をして下さっただけです。皆さんも早く良くなって下さい。お祈り



しております」、そう言つて一人ひとりと握手しました。

イエスの御霊教会の島崎先生とは、早く癒されて教会に戻れるように、併せて同室の皆さんの名前を連ねながら一緒に祈りました。

部屋を出ようとすると、島崎先生が立ち上がつて私を見送ろうとしました。私は止めて、「玄関までは遠くて大変だし、別れにくくなるからここで別れましょう」、そう言つて、隣の部屋の宮沢ふさみ先生の所で互いに祈り合つて別れてきました。

帰る車の中で感謝の祈りをしていると、

「神の造られたものは、みな良いものであつて、感謝して受けるなら、何ひとつ捨てるべきものはない。それらは、神の言と祈りとによつて、きよめられるからである」(第一テモテ四・四、五)のみことばをいただきました。そのみことばを「アーメン」と受け取つた時、私のすべての汚れは潔められ、新しい生命に甦つたように思えました。

第四章  
母の思い出

一 詩「祈り」

松崎 溥子（長女）

神さま

母をありがとうございます

溢れるほどの想い出を

わたしたちの胸に積み込んで

母は今

あなたのもとへ 旅立ちました

神さま

母をありがとうございます

わたしたちは

母の涙を通して

イエス様が生きておられると知りました

熱き祈りによって

イエス様の愛を学びました





そして

苦難と忍耐の中でさえ

イエス様にある者の安らぎを教えられました

神さま

母をありがとうございました

あれは 幾つの時だったでしょうか

心臓発作で倒れた日

「息ができない！」と

苦しむ私の手を握りしめ

「お母さんが代わってあげたい！」と

大粒の涙を落した 母の顔が

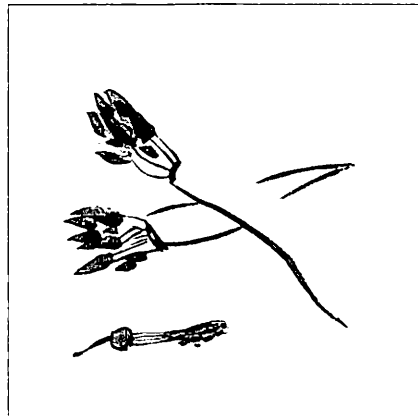
鮮やかによみがえってきます

それ以来

歳を経た今も 胸が苦しくなると

「お母さん！息ができない」と

幼い時のように胸の内で叫ぶようになりました



第四章 母の思い出

神さま

母をありがとうございました

わたしたちの胸の中に

溢れるほどの思い出を積み込んで

母は あなたのもとへ帰りました

もし許されて

またこの世に生まれでることがあるならば

もう一度 母の娘としてください

神さま

長い間 ありがとうございました

今 母を

あなたにお返しいたします

—一九九一年四月一日 母の葬儀に寄せて—

(姉は二〇〇〇年七月二八日、六六歳で召天)

## 二 母から受けたもの

正 野 眞 宏（長男）

私は正野家の長男として生まれ、当時どこの家でもそうであったように、跡取り息子として両親から特別に目を留められてきたように思います。愛情とともに、長男としての期待も大きかったわけです。両親だけでなく、周囲からも長男坊、跡取り息子と言われますし、自然に将来は家業を継ぎ、親の面倒を見なければならぬ事を受け入れていました。

しかし、周囲の期待を感じる一方で、私自身は小さい時から体が華奢だったこともあって、何事にも消極的で、自信が持てませんでした。ですから、学校で答えが分かっているにもかかわらず、一番に手を上げることができず、他の人が上げてからそっと上げるといった風でした。年頃になって、自分の性格の弱さを悩んだものです。

そういう時に希望を持ったのが、何事にも体をぶつつけるようにしてチャレンジしている母の姿でした。母から叱責を受けたことはありませんでしたが、無言の励ましを受けたものです。挫けそうになる弱い心を、もう一度頑張ろうという気持を持たせてくれたことは、幾たびあったでしょうか。

弱い私に頑張る心を植えつけてくれたことが、母から受けた第一のことです。

私たち家族は一九四四年に戦災を避けて、大分県東国東郡櫛来村に疎開しましたが、そのまま

であれば、私は跡取り息子として製材所の跡継ぎとなり、生涯をそこで暮らし、この福音に与ることはなかったでしょう。ところが、神様が不思議な御手をもって我が家をそこから引き出し、福岡県宗像郡東郷町へ導いてくださったことを通して、まず母が神と出会い、二次的ではあります。母を通して私たち子どもが信仰へ導かれたわけです。母は何事も一生懸命でしたから、信仰もそれこそ命をかけたものでした。母の真剣さに私達も引きずられて来た、と言っても過言ではありません。「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない」(箴言二二・六)とありますが、良くぞ実地教育してくださったと感謝するものです。その後の人生において困難に直面しても、信仰のゆえに、それを乗り越えて来ることができたと思います。

私たちに真の信仰を植えつけてくれたことが、母から受けた第二のものです。

このたび、母の生涯と信仰を広く皆さんに知ってもらいたいという願いから母の記念誌を自主出版するということになり、一九九三年に内部的に限定発行していた記念誌の見直し作業を行いました。再度読み返してみると、改めて母の生きた信仰、実践的な信仰を思い知らされ、まだまだ私は信仰的に及ばないことを実感しました。行いの伴わない知的な信仰、低い所で止まりやすい信仰に気づかされ、もう一度高きを目指して進むべきことを、覚醒させられました。

母から受けた最後の教訓です。

## 三 母からの最も大いなる遺産

正 野 隆 士（次男）

ジリジリ、ピー、ガタン、ゴトン、一九六四年十一月二九日、東京行の夜行列車が北九州小倉駅を徐々に離れていく。父と兄が「ガンバレヨ」と手を振って見送ってくれた。母はともも駅で見送るのがつらかったのか、黒崎の家で別れた。汽車が駅から離れて見えなくなり、暗くなってきた車窓を見ながら母のことを思った。さつきまで、東京に出ていつて一旗揚げろぞ、と希望に燃えていた思いがいつべんに消え、フーツと淋しさと感傷がこみあげてきた。

「ああ、母には悪いことをしたのではないだろうか。親孝行らしきことは何もせず、自分勝手に生きてきた。今回も地元金融機関を辞めて、敢えて厳しいセールスの世界に飛び込む無謀をしでかそうとしている。成功する確立の方が少ないのかもしれない。本当にこれでよかったのだろうか。両親の死に目にも会えないかもしれない。親不孝な息子だなあ、母を悲しませてしまつて……。『覆水盆に返らず』、このうちは成功して帰らないと……」と、感傷を押さえたのを思い出します。

後で聞いた話ですが、母は「とても息子がセールスの世界で生きるのは無理だろう。いつかは失敗して帰ってくるだろうが、男が決心した以上やらせてあげよう」と許してくれたそうです。よくぞ安定のみを願わず、可能性に挑戦させてくれたか感謝しています。反対していたら、おそ

らく挫折していたでありましょう。

私の母は製材所の娘として生まれ、事業にも関わっていましたが、先を見る太っ腹のところがありました。私が小さい頃、母と祖父が私を前に置いて、「兄弟の中で、この子が一番商売人に向いているね」と何度となく話をしているのを、不思議と鮮明に覚えていました。今回の東京行きも、サラリーマンで終わりたくない、商売や事業で生きてみたいとの思いが捨て切れなかったのも、記憶の隅に子どもの頃の誉められたことが残っていたからなのでしょう。母親の子どもへの影響力の大きさに驚きます。

東京での三年間、母は一週間に二通くらいの割合で便りをくれました。その内容のほとんどは、家族の様子と聖書の教えでした。母は熱心なクリスチャンでしたから、「人生の土台にキリストの教え」との願いが込められていたのです。そうすることが誘惑に負けることなく、正しく幸福な人生を送れると信じていました。便りの葉書はうれしいのですが、時にはうんざりすることがあったり、決まりきった内容に読まないこともありましたが、母の熱い愛情と熱心さに、大きく道を外れることなく精進できたことは、「よき母を持った」と有り難く思っています。

ある時、早くもセールスや世の中の厳しさ、そして将来に希望を失いかけていた時、母が秘かに私の聖書の裏表紙に、「前途を祝して」と題して書いてくれた聖書の言葉が目にとまりました。「我なんぢに命ぜしにあらずや心を強くしかつ勇め汝の凡て往く処にて汝の神エホバ偕に在せば懼るる勿れ、戦慄なかれ」(ヨシユア記一・九)。

「わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていないよう」(ヨハ

ネ十五・四)。

私が曲がりなりにも今日あるのは、この聖書の言葉と母の励ましで目が覚め、勇気づけられたおかげです。

母は決して注意や説教はしませんでした。子どもが何処へ行こうが、何をしようが、私を信じ続け、限らない愛をもってあるべき方向を示し、自立するのを待ち続けてくれました。

「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である」(第一コリント十三・十三)。

今にして思えば、私は母から金銭では買えない大きな遺産、

- 一 自主自立のたくましい精神
- 一 他のために生きる幸い
- 一 全能の神への全き信仰

を受け取りました。しかし、何よりもすばらしい「生きた信仰」は、このうち最も大きな遺産であり、正野家に代々受け継がれるものと確信します。感謝。

## 四 母の思い出

正 野 暢 之(三男)

母のことを想うと、走馬灯のように頭の中を思い出が走り抜けていく。兄弟の中で、私が一番長く母と共に居たからである。

東郷町にいた時、母が祖父から火箸で頭を叩かれ、怒鳴られていた時、その側で、私は見ていたのである。母にとつて、どんなにつらく、悲しいことであつたであろう。

弘巳が亡くなる時も、くずれるようにして激しく泣いている母。私もその側で、その姿を見ていたのである。それも、悲しく、つらいことであつたであろう。

母は重い自転車で東郷から岡垣、遠賀川へと電球を行商して行つた。夜遅く帰ってきて、疲れた体で家庭礼拝を毎日するのであるから大変なものである。その時も、私は共に居たのである。

神の御旨により、黒崎で食堂を始めることになつた。

厨房で熱湯を下半身にかぶり、大火傷をして倒れた母、それを助けようと一生懸命叫んでいる父、救急車に運んでもらつて入院した母、私はその姿も見ていたのである。

食堂を閉店し、海老津の地で過ごすことになつた。今まで与えられたものでアパートを買い、家賃で生活するようになった。初めて安住の地を得たのである。毎日を多くの人にみことばを書いた手紙を送り、色紙に絵を書いて人に上げたり、日々聖書を読み、祈りの生活ができるように

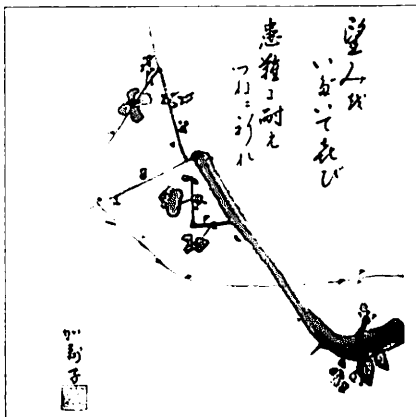


なった。

父母が結婚してこのかた、二人だけの生活をしたことがなかったが、ここで一年半その生活を送ることができた。父は老人大学で俳句を習い、市場で新しい魚を買って料理を作り、母のために洋服を買ったりしていた。母は色紙や手紙を書いたり、エレクトーンを弾いたり、榎本師の説教テープを筆記して過ごしていた。また、鹿児島島の姉のところへ父と遊びに行ったりしていた。そして、一年半の後、長兄一家が東京から引越してきて、共に住むようになった。海老津の地は、カナンの生活であった。それはまた、神によって魂は潔められ、天国目指す準備の時でもあったように思われる。

母の生涯は戦いの連続であり、多くの苦しみの中を通った。しかし、主はいつも見えない御手をもって導き、もう駄目だと思われるその中であつて、弱き心を支え守り、乗り越えさせてくださった。神が母と共に居給うたことを思うのである。

エジプトの地、大分から導き出され、苦難の東郷時代を通り、黒崎に導かれた。そこはまさに神様が居られて守ってくださり、神を知つていく時でもあつた。そしてヨルダン川ならぬ遠賀川を渡つて、カナンの地、岡垣町に至つた。そこで神の恵みと祝福が豊かに与えられ、また霊的に内から新しくされて、天国へ行くための備えをして下さつたのである。



母から受けた教訓や信仰は、計り知れないものがある。母をこのように導かれた父なる神は、私をも導いてくださると信じて、歩んで行きたいと思う。

## あとがき

○母が召されたのが一九九一（平成三）年三月であるから、はや十八年近く経ったことになる。歳月の速さを思う。

○私は母から受けたものを長く記念し、子どもたちにも伝えたいと思い、一九九三（平成五）年三月に「神は愛なり」と題して記念誌を作り、私の姉弟の教会関係者にもお配りした。当時のワープロに打ち込んでオフセット印刷した粗末なものであったが、B4版二七〇ページに及ぶものとなった。

○余分に刷ったつもりがいつしかなくなつた頃、岡山の弟から電話があり、このまま埋没させてしまうのももつたない、自費出版して多くの人の見てもらつたらどうかとの提案を受けたので、初めての事でもあり躊躇したが、主の導きと信じて、取り組むことにした。

○先の記念誌をベースに手直しをし、母の証し集も少し整理して、読みやすいようにしたつもりであるが、文章・編集とも稚拙を免れないと思う。お許しを願うと共に、御霊が補い、届いてくださるよう祈るほかない。

願わくは、この小さな証し誌と通して、主の御名が崇められますように。

## 正野眞宏の略歴

- 一九三八(昭和一三)年 正野サカエの長男として生まれる
- 一九五六(昭和三二)年 福岡県立福岡高校卒業
- 一九五七(昭和三二)年 福岡県八幡市(現北九州市)に入職
- 約四十年、主として保健福祉分野に従事
- 一九六一(昭和三六)年 八幡前田教会(榎本利三郎牧師)にて受洗
- 一九六三(昭和三八)年 日曜学校教師(現在に至る)
- 一九九七(平成 九)年 北九州市役所(社会福祉協議会常務理事)退職
- 一九九八(平成一〇)年 北九州市シルバー人材センター理事長
- 二〇〇〇(平成一二)年 福祉系大学、専門学校非常勤講師
- 二〇〇四(平成一六)年 社会福祉法人八幡民生事業協会理事長就任
- 母子生活支援施設を経営、現在に至る

## 神は愛なり

— 正野サカエの生涯と信仰 —

定 価 表紙カバーに記載

発行者 正 野 眞 宏

発行日 二〇〇九年10月

発行所 (有)ベラカ出版

〒652-0804

神戸市兵庫区塚本通3-3-19

TEL 078-575-5572

FAX 078-575-5582

印刷 松木共栄印刷(有)

表紙デザイン アートリック